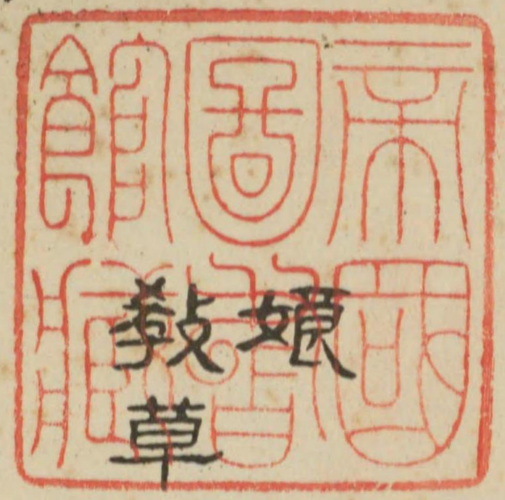
543-87
1200501503884
43
87

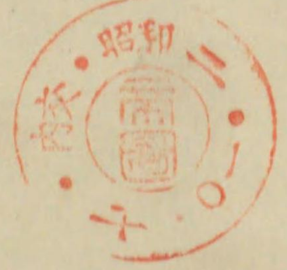


婦教草

節用

女房形氣

全



543-87

緒言

娘節用三編九卷は曲山人の筆に成り、人情本中最も出色あるものの一に居る。曲山人の傳は未だ世に詳ならずと雖も、其脚色の比較的自然にして、よく當時の世相を寫せるが如き、又その描寫の淸新にして、人物の個性を表現せるに近き等より觀るに、蓋し當時の隱れたる一大作者たりしを疑はず。本書は他の人情本と等しく、事多く狹斜花柳の巷に關すれども、其ヒロインとして捉し來れる小三といひ、又其姉眞名鶴の如き、金五郎の妻お雪の如き、何れも當時の社會道德よりすれば、所謂烈女貞婦の鑑にして、彼の徒に淫靡蕩奢の風を寫し、以て無學者流の低級趣味に投ぜんとしたる滔々たる人情本とは、自ら其選を殊にすと稱すべし。文亦流麗滑達、よく情景に伴へり。殊に小三の遺書の如き、寔に人情の極美を現し、讀者をして思はず涙潸然たるものあらしむ。

女房形氣は草雙紙の合卷と稱するものにして、其二十五編中、一編より十九編迄は山東京山の作に係り、其餘は鶴亭秀賀の補訂又は述作に成る。第一編の稿成りしは弘化二年の夏にし

て、第十九編の稿は安政五年京山九十歳の四月に成り、その間實に十四年の久しきを歴て續刊せられたるもの也。而して京山の死は十九編稿成るの九月、その發兌は翌年の春なるを以て、嚴格の意味よりいへば、十九編は彼の遺稿と稱すべく、二十編は其草稿を採りて秀賀の補訂せる所なるべきか。原本十九編に京山九十一歳と署し、二十編以下最初一二編の緒言に京山の遺艸と稱するものは、蓋し前作の惰力を利用し、以て從來の好評を持續せんとせる書估の一手段に過ぎざるべきか。二十五編の緒言には、更に二十六編の刊行を豫告せりと雖も、未だその版本の世に流布するものあるを見ず。京山は京傳の弟にして、戲作者の第二流に位する者、秀賀は更に下りて、其傳亦明確ならず。されば本書が同種の小說たる田舍源氏の如きに比して遙かに遜色あるは固よりなれども、亦よく當時の時好に投じ、多大の好評を博したるものの一なる事論を俟たず。本書の如き合卷の類は、讀み本、人情本、洒落本の類と異なり、每葉悉く畫にして、文句は寧ろ其畫の解說とも稱すべく、文と畫と相俟つて始めて其趣を爲せるもの也。されば此種の覆刻は、本文庫黃表紙の如く、全部寫眞製版となすを

最良の法となせども、甚しく浩瀚にして、到底その理想を實現し得べくもあらず。されば今本文庫に收むるに當りては、或は表紙の繪、或は表紙裏の繪、或は前書きの繪、或は本文の繪等、各方面に涉り、成るべく畫面の多趣にして原本の面影を偲ぶに足るべきもの若干を添へたり。

以上の二書を併刊するに際し、娘節用は假名遣を統一し、會話に鉤識を施したる外、用字句讀等概ね原本のまゝにして、甚しく意義の通達を害するものの外、敢て改訂を加へず。女房形氣は原文殆んど總假名にして句讀なし、よりて意義の上より努めて平正の漢字を配し、句讀を施し、會話には鉤識を加へ、以て閱讀に便じたり。本書の校訂校正は主ら星野亮太郎氏の力に賴る。　玆に特記して深謝の意を表す。

大正三年五月

校訂者　塚本哲三

目錄

小三金五郎假名文章娘節用

前編……一
二編……六一
三編……一二一

當世男女之鏡教草女房形氣

初編……一六五
二編……一九二
三編……二二五
四編……二四一
五編……二六八
六編……二九四
七編……三二一
八編……三四七
九編……三七四
十編……四〇二
十一編……四二六
十二編……四四九
十三編……四七二
十四編……四九七
十五編……五二〇
十六編……五四五
十七編……五七二
十八編……六〇〇
十九編……六二九
二十編……六五六
二十一編……六七七
二十二編……六九七
二十三編……七一八
二十四編……七四〇
二十五編……七五九

娘節用内容細目

主要人物

假名家文字之進（斯波家の藩中、後隱居して白翁）　文之丞（文字之進の長男）　玉章（たまづさ）（奥づとめの御側）　文次郎（文字之進の次男）

金五郎（文之丞の一子後文次郎の養子）　おつる（芝數星町古鐵買六兵衛の長女、後遊女となりて眞名鶴、終に、尼となりて紫雲）　おかめ（六兵衛の次女、文之丞の養女、金五郎の幼なじみ、後藝者となりて小さん、金之助の母）　おゆき（文次郎の娘金五郎の妻）　金之助（小さんが生みし金五郎の一子）

事件の梗概

初編

㊀ 斯波家の藩中に假名家文字之進といへる者あり、長男を文之丞といひ、次男を文次郎といふ。㊁ 文之丞奥づとめの女玉章と契り、玉章懷姙の身となりて共に館を忍び出で、遂に都三筋町のほとりにて學問劍法の指南をなし、相當に暮す中男子出生す、卽ち本篇の主人公金五郎なり。後玉章は死去す。㊂ 又珠數屋町に古鐵買の六兵衛といふ者あり、其妻四十にあまりて女子を儲けお鶴と名づく。其次の年また女子を擧げ、産後妻死去す。㊃ 文之丞、六兵衛の難澁を聞き、其當歲の子を親知らずに貰ひうけてお龜と名づく。これ本篇の女主人公也。㊄ 文字之進は、文之丞の不孝不義を

怒りて勘當し、文次郎に家を讓りて嫁を迎へ、自分は隱居して白翁といふ。文次郎夫婦の間に女子一人を儲く。これを發端とす。㊅ 金五郎十七歲、お龜十五の春、金五郎は文次郎方に引取らるゝ事となり、兩人後年を誓ひて別る。㊆ 其後金五郎より音信なきを歎き、お龜は家出して生死も知れず。㊇ 金五郎、後に此事を知りて面白からぬ日を送りしが、ある日醉狂といへる友にさそはれ、大磯の燈籠見物に行きて、圖らずもお龜の姉、今は千歲屋の抱へ眞名鶴を相方とす。㊈ 後また額俵屋といふ茶屋の新規抱へ小さんが、お龜なりと知れ、その苦衷を聞きて深く契を交し、眞名鶴と姉妹の對面をもさす。㊉ 斯くていよ〳〵しげく通ふ中、小さん身おもになりてはや三月なり。

二編

㊀ 眞名鶴はさる有德の商賈の隱居に請出され、向島の邊に住む。㊁ 金五郎は小三請出しの金策に苦心する内、額俵屋夫婦の深切にて、小三は無事に子を産み金之助と名づく。㊂ 金太郎腰の物購入のためと僞り實父より金一包を得、小さんを請出し、母子を青柳橋のほとりに住ましむ。㊃ 小さんは金五郎がまだ部屋住にて金の不如意なるを氣の毒がり、再び藝者をなす。㊄ 金五郎の留守勝なる不身持止まず、隱居白翁之を愁ひ、小さんに逢ひて、一時の緣切を賴む。

三編

㊀ 小さんは煩悶の極、ぶら〳〵病氣にかゝる。金五郎憂慮して止まず。㊁ 小さん心に決する所

あり、一日金之助と乳母となつれて向島の姉—今は尼となりて紫雲といふを訪ふ。㊂ 其夜金之助と乳母とはそこに泊り小さん一人歸る。㊃ その翌早朝、金五郎來りて小さんの自害を知る。㊄ 漸く野邊の送りもすまし、金之助と乳母とは紫雲の許に移る。㊅ 白翁は金五郎の態度の激變せるを見て深く心配し、遂に小三を訪れて近隣の口よりその死を聞き、更に紫雲を訪れて、始めて小三の身の上を知り悉す。㊆ 依りて金之助は乳母もろともに引取りてお雪の子となし、小さんを先妻と呼做したり。㊇ 小さんが百ヶ日、金五郎寺まゐりに行きたる留守、ふと金五郎の煙草盆中より小さんの書置を發見し、お雪母と共に之を讀みて其貞烈に泣く。㊈ 金五郎忠孝を勵み、家内も和順に、お雪の腹にも子を儲けていよ〳〵家富み榮えぬ。㊉ 金五郎の實父文之丞も年來の勘氣遂にゆるされ、都の家には養子をなし、其身は東へ下りて一同に對面し、又小さんの身の果を聞きて、悲歎の餘り深く無常を觀じ、剃髪出家して諸國行脚に出づ。

女房形氣内容細目

(一) 初編より二編に至る

主要人物

谷橋渡（附人の重役）　横島眞雁（志賀の山の家中）　柵浪右衛門（谷橋の下役）　おりつ（浪右衛門の妻。一時のか〳〵名おいと）　峰松琴次郎（梅月院に仕へる料理人、一時のか〳〵名次郎吉、後浪右衛門同役）　おふで（はゝ浪右衛門の後妻、後琴次郎の妻）　尼君梅月院（志賀の山左衛門の太夫はるのぶの母君、谷橋渡等の主人）

事件の梗概

㊀ 足利室町の頃、都の近郊に住む志賀の山左衛門の太夫はるのぶの母に梅月院といへるあり。㊁ 其附人の重役谷橋渡の下役に柵浪右衛門とて年は五十に近き男、亡妻の妹おりつとて二十三四の才女を妻とす。㊂ 梅月院家の料理人に峰松琴次郎とて二十五六の男あり、浪右衛門の家族の如く出入す。㊃ 同じ家中に横島眞雁とて三十五六の男、不圖おりつの艶色を見かけ横戀慕せしも、おりつに恥しめられ、却ておりつと琴次郎との密通を讒構して浪右衛門に說く。㊄ 浪右衛門其言葉を信じ、且偶然疑はしき兩人の振舞を見つけ大に怒る。㊅ 兩人刃の下を逃れて春日社に兄妹の誓をなし、有馬の湯に身を潛む。㊆ 舊主梅月院保養に來り、藥師にあげたる貞節の額を見ておりつならん事を推し、遂に谷橋渡をして兩人を搜し出さしめ、兩人の潔白を浪右衛門に說かしむ。㊇ 浪右衛門が後妻おふで此事を聞きておりつに義理を立て、自ら離緣を求めて髪を切り、おりつ亦髪を切る。㊈ 尼君梅月院の計ひにて、竟におりつはもとの浪右衛門の妻となり、おふでは琴次郎の妻になりて共に子孫を儲け繁榮す。

(二) 三編より六編に至る

主要人物

染付屋佐良右衛門（有徳の瀬戸物屋、前名佐良太郎）　おかね（佐良右衛門妻、近江屋の娘、）　おいな（染付屋の下女、佐良右衛門が手をつけし女）　ぼら吉（いなの兄にて正直一遍の魚屋）　竹吉（夫、いなの情無頼漢）　大吉（茶道具屋とぶや、いなが亭主）　おへそ（いなの叔母、欲心深き女）　金神長五郎（しかち）　持丸屋長次郎（長左衛門忰、）　おとく（金升屋娘、持丸屋長次郎妻）　おかつ（長五郎妻）　お花の幽霊（金升屋の娘、長次郎と契りし女）

事件の梗概

㊀ 鎌倉に瀬戸物を手廣く商ふ染付屋佐良右衛門といへるあり、ひとり息子佐良太郎の嫁を求む。㊁ 第一の後補者りんず屋の娘は、佐良右衛門の兄黒石といへる隠居の言によりて、其不品行を知り止めとなる。㊂ 依て黒石の妻おいしが插花の教子近江屋の娘おかれ、桃の井家に奉公せしを佐良太郎の嫁とす。㊃ 後両親は死し、佐良太郎今は佐良右衛門とて四十七、おかれは四十二、忰は二十八にて嫁もあり、本編の事件は端を茲に發す。㊄ 佐良右衛門、下女のおいなに手をつけ、おいな姙娠す。㊅ 妻おかれ自ら其兄ぼら吉を談じて妾の證文させ、やがて女子を産ませて後ひまを遣す。㊆ おいな家に歸りて後身の行ひよからず、叔母おへそに預けらる。㊇ 叔母のさしがねにて、再び佐良右衛門を呼出し、一頓て茶道具屋喜の八方に圍はる。㊈ この事また本妻おかれに知られ、おかれが計ひにて更においなを妾宅に住ましめんとす。㊉ おいなは情夫竹吉と駈落し、竹吉元の親分金神長五郎の家に行く。折から長五郎夫婦は出入場の婚禮に出かけ、留守を預る長五郎の叔母に恥

しめられて去る。㊉一 此婚禮に關する插入の一話あり。要に曰く、鎌倉屈指の金持持丸屋長左衛門、その悴の長次郎の嫁として金升屋福右衛門の娘おとくを迎ふ、婚禮の當夜少しも違はぬ二人のおとく來る、大騒ぎの結果、其一人は一年前に此世を去りし金ため屋の娘お花の幽霊にて、生前箱根の湯場にて一夜を長次郎と契りし者とわかり、長左衛門の情にてお花の幽霊長次郎と盃し、お花は先妻おとくは後添といふ事になり、其夜おとくの夢にお花より祕藏の人形を貰ひしと見て、男子を孕む。㊉二 さておいなは竹吉と共に四ッ手屋かご六の許に行きて五六日潜みしが、竹吉に愛想がつき、且又二人の姦計を立聞きて其儘逃歸り、遂に花水橋より投身するに至る。㊉三 然るに恰も染付屋の妻おかれの乘りたる屋根舟の上に落ちて救はれ、また主人の家に歸る。㊉四 斯くておいなはおかれの計ひにて竹吉の手も切れ、遂に改心して染付屋の地内にすむ茶道具屋とぶや大吉の妻となり、男子を産む。

(三) 七編より十五編に至る

主要人物

徳若屋萬左衛門（質、兩替にて有福の暮し）　おへみ（はじめの名はおみの、萬左衛門妻、家つきの娘、剃髪して妙と稱す）　小糸（藝者、萬左衛門の圍はれ、萬太郎の母、後に萬左衛門の本妻）　おちよ（浪人から四郎の娘、徳若屋の下女、後に湯女千代吉、遂に半次郎の妻）　半次郎（星の井家の浪人の忰、徳若家の小僧、後に二代目かち四郎）　おてい（浪人羽打かち四郎妻、おちよの實母）　およく（おちよの養母）　寺岡平六（小糸の叔父、秩父家の家來）　だいばの仁三（およくの情夫）　廣田小太夫（秩父家の家來）　黒星眼

平（秩父家の浪人、悪漢）　おみよ（おみの叔母、ちく隠居）　おひよの（おみの氣に入りの悪玉下女）　玉の一（年若き按摩）　權太（おひよのの弟、悪漢）
一ッ目熊右衛門（獄師、悪漢）

事件の梗概

㊀ 鎌倉に質兩替の有德なる商人德若屋萬左衛門といへるあり、家つきの娘たる妻おへみ、わがままの女にてやきもちやきなり。㊁ 萬左衛門小糸を圍ひおき一子萬太郎を儲く。㊂ それより前、おへみ此事を知りて、下女おひよのを語ひ、洗濯婆おのりをしておろし藥を小糸に呑ましめんとす。おのり仕損じ、金を騙取して逃亡す。㊃ おへみの叔母おみよは、小糸の子萬太郎をおへみに養はしめんとして苦心すれども得ず。㊄ おへみは又おひよのと謀りて、其弟權太に小糸を暗打せしめんとす。㊅ 小僧半次郎下女おちよと契りて偶々雜藏にあり、其密談を聞きて小糸の母に告ぐ。㊆ 小糸は叔父秩父家譜代の足輕寺岡平六に預けらるゝ事となり、途中つけ行きたる權太は平六に追拂はる。㊇ おへみは密計の暴露を以ておちよの密告に出づるとなし、藏にておちよを責め、遂に殺さんとして果さず、其夜盗賊入りておちよ命を助かり、家に逃歸る。㊈ 養母およくその若き情夫だいばの仁三と謀りておちよを化粧坂へ賣らんとす。㊉ おちよ逃出して投身せんとし、圖らずも救はれたる女乞食おていは、浪人羽打から四郎の妻にて、實に十六年前貧苦の餘り已を捨てし實母なり。おてい之を名乘らんとして流石に得せず。㊉一 だいばの仁三逐ひ來りてお千代をつれ歸り、葛籠に入れて化粧坂へ賣りに行く。おてい追跡して却て仁三に蹴られ氣絶す。㊉二 折から通りかゝりし寺岡平六に助けられ、昔隣家たりしよしみにて其家に引取らる。㊉三 おちよは月花家の遊女に賣らる、仁三は其金を持ちて逃亡せり。㊉四 おちよは此所に圖らずも萬左衛門に遇ひ、一伍一什を語る。㊉五 萬左衛門、其昔おちよを拾ひし廣田小太夫をつれ來りて逢はす、小太夫おちよの守袋を見て羽打から四郎の娘なる事を知り、その妻おていと寺岡平六とを招きて母子の對面せしむ。㊉六 廣田小太夫萬左衛門とおちよ身請の談整ひ、月花屋の亭主に相談す。㊉七 おちよの養母およくゝ、手切の金高につきて折合はず、歸途だいばの仁三に邂逅して相爭ひ、其結果遂に悶絶するに至り、仁三は驚きて逃去れり。㊉八 かくておちよは無事實母の許にかへり得たり。㊉九 おちよの母おていは、寺岡平六の世話にて手習師匠の跡を讓受け、遂に小糸及小太夫等の好意にて、半次郎をおちよの聟に迎へ、家内和合せり。㊉十 ある日半次郎おちよ兩人の留守中、浪人黒星眼平來り、遂におていを切りつけし折から、夫婦歸來り半次郎は親の敵眼平を討つ。㊉一 此事により半次郎は召出されて二代目羽打から四郎となる。㊉二 おへみは下女おひよのにそゝのかされて愈わがまゝ募り、遂に按摩玉の一と姦通す。㊉三 ある夜、其現場を萬左衛門に見つけられ、その翌日二百兩の金を持ち、おひよのと玉の一を伴ひ、玉の一の在所越後へ駈落す。㊉四 德若屋にては追手を出して捜索せしも得ず。㊉五 叔母おみよの計ひにて、小糸をまづ妾として家に入る。㊉六 駈落の三人は、熊谷の先の立場茶屋におひよのの弟權六に遇ひ、それを供に連れて伊香保に廻り、草津へと志し、ころばり峠に

て三人の追剝にあひ、おへみは財布を奪はれて谷へ落つ。此追剝實は櫨太が頼みし者共にて、金は櫨太の懐に入りたるなり。㊐ 櫨太おひよのは玉の一を麓の宿屋に置き去りにし、上方をさして赴く途中、おひよのは櫨太に谷川へ突落され、櫨太は狼にくはれて死す。㊑ 谷へ落ちたるおへみは獵人一ッ目熊右衛門に助けられ其家に連れられ、不得止その女房となりて苦しみしが、この山里より鎌倉へ下女奉公に出づるお竹といへる娘に託したる手紙により、遂に鎌倉に呼び返さる。㊒ 叔母手づからおへみの髪を切りて尼とし、別莊へ隱居させたり。㊓ 其後萬太郎五才の祝をなし、小糸は本妻となる。㊔ おへみ髪を剃りて、名もへ妙と改めしが、惡緣猶つながりて、再び玉の一と契り、遂に孕みて女子を産む。㊕ 小糸今の名はおいとが計ひにて、その女子を引取り、後々は萬太郎の嫁にもしたしといふ。㊖ へ妙、おいとの至誠に感激し、おいとと姉妹の盃をなすに至る。

(四) 十六編より二十編に至る

主要人物

金有屋箱右衛門（金持、屋敷方の銀主）　おしやく（箱右衛門の圍ひ女、姦侫）　金太郎（箱右衛門長男）　錢藏（箱右衛門次男）　おひな（錢藏の妻、松竹屋龜右衛門の娘、御奉公の名ひなぢ）　おはな（薄田段五兵衛の娘、孝女）　妙節（おはなの母）　かをる（今出川の物頭長橋わたるの娘、金太郎の妻）　髪結才三（町内の廻り髪結）

(五) 二十一編より二十五編に至る

事件の梗概

㊀ 鎌倉に金有屋箱右衛門とて有德の商人あり、妻のおよわ二人の男の子を殘して死す。㊁ 圍ひ妾おしやく、本妻の看護に託して家に入り、遂に其儘ずるゝべつたりとなる。㊂ 長男金太郎は劍術を好みて楠左門の弟子となりしが、武者修行を志して家出す。㊃ 次男錢藏家督をつぎて松竹屋龜右衛門の娘おひなを妻とす。㊄ おしやく出入の髪結才三と不義をなし、其文をおひなに拾はれ、却つて姦策を弄しておひなをいぢめる。㊅ 長男金太郎、以前金有屋に勤めしいせ田や忠右衛門と邂逅し、連れられて家に歸る。㊆ 箱右衛門不在中、一夜盗賊入れりとの騒ぎに、金太郎追駈けて切殺せしはおしやくなり、大に驚き切腹せんとしたるに、半澤六郎の裁判により、おしやく金を奪ひ髪結才三と駈落せんとしたる段判明す。㊇ 爰に望月家の浪人薄田段五兵衛の娘お花といへる者、父の歿後、母の妙節と二人、忠僕袖助と共に金有屋の別莊あるその地内に住む。㊈ お花の不在中、井原垣藏といへる不良浪人妙節を殺し、袖助にも深手を負はしむ。㊉ お花母の敵を打たんとして金太郎の弟子になり、終に本望を達して尼となる。㊊ さて金太郎は武者修行中の手柄に據りて、御譜代弓頭役に新規召出され、かれておひながすゝめし今出川の物頭長橋わたるの娘かをるを妻とす。

主要人物

黄金屋爲右衛門（はじめの名はため助、奈久四郎の父）　おぬか（爲右衛門の妻、奈久四郎の母）　奈久四郎（爲右衛門悴、おゆきの夫）　おゆき（奈久四郎妻、爲右衛門が故郷の大盡の娘、）　おてこ（瓢鶴屋の抱へ、遊女名まひ鶴、奈久四郎に身請せらる）　もみ助（黄金屋番頭）　おひき（もみ助のかこひもの）

事件の梗概

㊀ 越後より鎌倉に稼ぎに出でたる爲助、遂に金持となり黄金屋爲右衛門と改名、妻おぬかとの間に一子奈久四郎を儲く。㊁ 爲右衛門死去し、奈久四郎放蕩甚し。やがて爲右衛門が故郷の大盡の娘にて鎌倉の親類たらふく屋太利右衛門の許に居るおゆきといへるを妻とす。㊂ 暫しの後、再び遊蕩に耽る。悪番頭もみ助、奈久四郎に勧めて舞鶴屋の遊女舞鶴を身請して圍はしむ。籾助は既におひきといへるを圍ひ居るなり。㊃ 奈久四郎、おゆきに難くせつけてたらふく屋へ追かへし、舞鶴本名おてこを家に入れる。㊄ おゆきは太利右衛門の心配にてお出入屋敷なる畠山家へ奉公す。㊅ 奈久四郎は家屋敷も人手に渡すに至り、場末に移りて何がしの會所に筆執る役をなし、細き煙を立つ。㊆ おてこは男の子をまうけていよ〳〵増長し、姑おぬかを虐待し、又くりから龍の吉五郎といへる男と姦通、姑を殺さんとなす事再度に及び、遂に過つてわが子を殺す。㊇ 後奈久四郎をそゝのかして太良福屋より金を貰ひ來らしめ、それを持ちて吉と共に走る。㊈ 奈久四郎は、太良福屋及びおゆきの苦心に頼りて、以前畠山家へ貸上の巨金御下金になり、再び大分限者となりておゆきを迎へ、子孫長く榮ゆ。

そも〳〵男女のなからひは、八百萬の神達の、出雲の御社に群つどひて、結ぶえにしのさまざまなる、竈の前の三介が、相摸出生のおさん殿と、物置の出合の國訛、片言まじりの口説事、寡婦と養子の芋田樂、喰はぬは損者のびんづる隠居が、むしろやぶりの女ぐるひ、あるは帶屋の長右衛門が、老實をして筥入の、お半の壺へくらひ込み、浮名を桂川に流せしも、皆こと〴〵く縁なるべし。こゝにあらはす一部の册子は、いかなる人の筆に稿けむ、小三金五郎が一期の奇譚を、いと長々しく綴りたるを、書肆のもて來て、補ひてよと、需にしたがひ、をこがましくも、いさゝかこれに筆を加へて、櫻木に壽くこととはなりぬ。

文政拾四年辛卯孟陽

江戸　文盲短齊しるす

前編上卷

小三金五郎

假名文章娘節用

江戸　曲山人補綴

ほったん

太刀は大山石尊の、さとげ物に納れば、長刀はひやめしの、草履にその名を止めたり、弓は矢場のあねさんが、活業の助となれる靜けき御代のことになん、斯波家の藩中に、假名家文字之進といへる者あり、一人の男子ありけるが、兄は文之丞と云ひ、弟は文次郎と喚なして、兩人ともに文武の道を、常にはげみて勤めしが、兄文之丞はいつしかに、奥づとめの御側玉章といへる、容貌よき女と人しれず、契をこめて語らひしが、日にまし互に思ひつのりて、しのびくの密話に、玉章はいつか只ならぬ、懐姙の身となりけるにぞ、この事今にも現れなば、とても添ふ事なりがたし、とおもへば二人ひそかに語らひ、ある夜館を忍び出で、すこしのしるべを

便にして、難波をさしてのぼりつゝ、彼地此方とさまよひて、おもはしからぬ日を送れば、この地にをりても要なきことと、夫より皇都へおもむきて、三すぢ町のほとりに、さゝやかなる家を借りて、學文劍法の指南をしつ、月日をこゝにおくりしが、もとよりその技に勝れたれば、わづかのうちに弟子の、あまた付いて繁昌しければ、おのづから金銀の、融通もよければ、些づつの金を人に貸しなどして、その利を取りて不足なく、暮す程に月滿ちて、妻はやす〳〵と玉のごとき、男子を産出しければ、名を金五郎とよびなして、蝶よ花よと育つるうち、滿つれば缺くる世のならひ、妻は産後肥立たぬ上に、あしき風を引そへて、醫療手をつくすといへども、その驗更になく、つひに無常の風にさそはれ、冥途の旅におもむきぬ。文之丞はたよりに思ふ、妻に別れて今さらに、かなしみやるかたなしといへども、いかんともすべきやうなければ、泣く〳〵野邊の送をなして、跡ねんごろにとむらひけり。かゝりし程に幼兒を、乳なくてはそだてがたしと、乳母をかゝへ養育させ、只金五郎を手の中の、玉の如くにいとをしみて、光陰の過つをかぞへけり。こゝにまた珠數屋町に、古鐵買の六兵衛とて、夫婦かすかにくらす者あり、年ごろ子の無かりしかば、つねに是をふかくなげき、神佛にいのりしゆゑ、その信心の通じたりけん、妻は今年四十歳にあまりて、はじめて女子を儲けしかば、夫婦のよろこび大かた

ならず、名さへいはうてお鶴と號び、いつくしみそだつるうち、妻はふたゝび妊身になりて、次の年また女子を産みぬ。しかるに今度は養生の、惡しかりしにや四十のうへの、年子の事ゆゑおのづから、血心おとろへ循環せざるや、惡血さへもおりかねて、あと腹のしきりにかぶり、そのなやみの堪へがたきと、心のつかれに養生かなはず、つひに空しくなりにけり。こゝにおいて六兵衛は、子なきを神や佛にいのり、二人まで子をまうけしに、今はた思ひがけもなく、妻は子を捨て亡靈の、數に入りたる身の當惑に、なげくより外なかりしを、近所の者にいさめられ、まづ亡骸は取納めても、をさまりかねし胸のうちに、とやかく思ひつゞくれば、貧しきくらしに男の手一つ、いかゞして二人の子をば、そだてんやうもなかりしゆゑ、心を鬼とも蛇ともなし、藪へなと子を捨てんかと、思ふまでにくるしみて、一日々々とくらしけり。さるを假名家文之丞は、傳へ聞きておのが身に、引くらべては捨置きがたく、今不自由なくくらすゆゑ、當歳の子を親しらずに、もらひうけて育てなば、その親の手もすこしはかろく、なりもやせんと人づてに、この事をいひ入れて、妹娘をもらひうけ、名をお龜となづけ、また幾許の金を六兵衛におくり、姉なる娘をはぐくみ給へ、と情ある深切に、六兵衛はいたくよろこび、むすめが行すゑふかく憑み、これより後、めぐまれし金を少々お鶴に添へて、さる家へ里につ

かはし、あぢきなき世をおくりけり。さればまた吾妻なる、假名家が家には文之丞が、不義なして家出せしかば、文字之進は怒りつくやみつ、にくからぬ悴といへども、世間のおもはく上への聞え、親の名を出す不孝の罪、打捨ててもおかれねば、これ等の趣主君へ達し、文之丞を勘當なし、弟文次郎に家督をゆづり、嫁を迎へて是に娶合せ、その身は隱居し名を白翁と、あらためてくらすうち、文次郎夫婦の中に、一人の女兒を儲けけり。是につけても文字之進は、文之丞のことをりふしは、何かにつけてうち案じ、おもひ出しつゝほのかに聞くに、今は花洛に住馴れて、男子持ちて不足なく、くらすと人の風便ゆゑ、案じの胸もやすまりて、ゆく〳〵は文之丞が子を、文次郎が娘に娶合せ、家をゆづらば血すぢも絶えずと、心に思ひゐたりけり。

第一回

されば月日に關守なくて、文之丞が一子金五郎は、今年十七歳、お龜は十五の春となりしが、二人ともに天性の美男美女にして、華洛廣しといへども、たぐひまれなる容顔は、梅と櫻の婀娜くらべ、おとらずまさぬ風情なり。文之丞はこのとしごろ、古郷をはなれ遠き都に、世をおくるそのうちも、二人まで子をまうけ、何不足なき身のうへにも、十年あまり過ぎしころ、鎌くらの家をぬけ出でて、父のところへ便さへ、ならねばいとどなつかしく、子を持つて知る親の恩、報じがたきをくちをしく、おもふものから考へ見れば、主家の掟をやぶりつゝ、妻と不義して出奔せしかど、今にも詫のかなひなば、ふたゝび主家へ立歸る、こともあらんとゆくすゑを、彼是おもひあはすにぞ、はやくより金五郎には、文學武術を教へしに、もとよりさかしきうまれゆゑ、一を聞いて萬を知る、文武の才に長けたれば、幾程もなく上達して、今ははや金五郎は、武士の道くらからず、殊に和歌、連俳、茶の湯、插花のたぐひまで、人なみ〳〵より勝れたる、よき壯士とはなりにけり。お龜もまた世にめづらしき、發明のうまれにて、文よみ歌よみ手ならふ道はさらなり、物たち縫針の技藝にすぐれ、琴三味せんの調さへ、いとうつくしく何にまれ、女子の道にくらからず、その生立もたのもしく、人もうらやむばかりなれば、文之丞は何とぞして、古郷の父に勘當わびて、子どもの顔を見せまほし、と人を憑みてつど〳〵に、父白翁にわびたりける。鎌倉には白翁も、惣領の文之丞が、身のいたづらから家出して、今は花洛に相應に、文學武藝の師範しつ、不自由なくくらすうへに、孫まで出來しと聞きつるが、いかなるさまに生立つや、尋ねまほしトおもふをりから、人づてにて文之丞より、わび言をいひ入れければ、白翁は、うれしさひとかたならねど、いつたん主君へ勘當と、披露せし身をたやすくは、ゆるす事もならざれば、そのうち首尾を見つくろひ、君へねがひて出入をさせ

ん、文通のみは苦しからず、又孫の金五郎は、罪なき身ゆゑさいはひに、文次郎に男子なければ、迎をつかはしこなたへ引取り、いく〳〵は假名家の家名を、相續さするほどに、支度をとのへ待つべし、と返事に委細を聞くよりも、文之丞は大いによろこび、わが身の出入はかなはずとも、悴を本家へつかはすは、このうへもなき事なりと、金五郎を近くまねき、鎌くらの事くはしくかたり、日あらず迎の來るをまちて、鎌くら表へくだるべし、と聞いて金五郎は今さらに、おもひがけなく本家を繼ぐは、身の本まうトいひながら、一人の親をのこしおき、そのうへ子どもの時よりして、行すゑたがひに夫婦ぞと、胸におもひしお龜にも、わかれんことの心憂苦、いまだ枕はかはさねど、何かにこゝろおくそこも、なくうちとけてにくからぬ、中なるものをうち捨てて、行くことにやとさすがまだ、おぼこそだちの心には、當惑するも理なり。お龜もこの事聞きしより、心細さの案じごと、とやせんかくやと思ふうち、鎌くらより金五郎を、迎の人の著きしかば、今はわかれとなりけるかと、人目の關のしのび泣、ふさぐは女子の常ながら、いとゞに胸もむすぼほれ、部屋に屏風を立まはし、衣引かつぎ打臥して、なみだのひまもなくばかり。をりから障子引あけて、立まはしたる屏風のはしを、折かへしてはいる金五郎「おかめ、けふはどうだ、やつぱり氣色がわるいのか」（トいふ聲におかめは目を見ひらき、につこりわちひまくらをあげ、）「ハイ、いろ〳〵のことを案じますと、こゝろぼそくて氣がふさいで、いつそ頭痛がいたします」（トほろりと落す一トしづくへ、金五郎は見てとりて、）「おほかた今度東の本家へ、おいらが別れてゆくものだから、それでふさぐといふのだらう。マア〳〵何はともかくも、けふは南であつたかいに、こんなに立こめたり引かぶつては、なほのぼせてわるいから、ちつと庭でもながめな」（トびやうぶを片よせ夜著とりのけ、丸まどのしやうじをあける。おかめはやう〳〵おき直り、あたまをおさへてさしろつむく。）金「コウおかめ、つよく頭痛がするなら、なんぞ藥でもやらうか」おかめ「ハイありがたうござります。あんまり氣がふさいで、頭がおもくてなりませんから、今しがた實母散をのみましたヨ」金「さうか、あんまりつまらぬことをくよ〳〵思つて、ほんとうの病氣が出るとわりいから、今日はちやうど天氣はよし、芝居でも行つて見ればいゝ」おかめ「いゝえ、わたくしは、芝居も見たくはござりません」金「ハテこまつたものだ。行つて見ればいゝがのう。團藏だの璃寛だの、國五郎なんぞが大ひやうばんで、それに東からのぼつて來てゐる、路考の門弟の路之助が、又新作のはやりうたを、舞臺でうたつて、三絃の手があるが、いつ見てもまことに妙だヨ」おかめ「さやうでございますとネ。アノいつぞやあなたと御一緒に、浪花へまゐりましたとき、濱芝居で見ました評判のよい、紀伊國屋はどういたしました子」金「源之助か。今は東都へ歸つての、ます〳〵評ばんがよくつて、去年の春向町の芝居で、苅萱の狂言をしたさうだが、近年

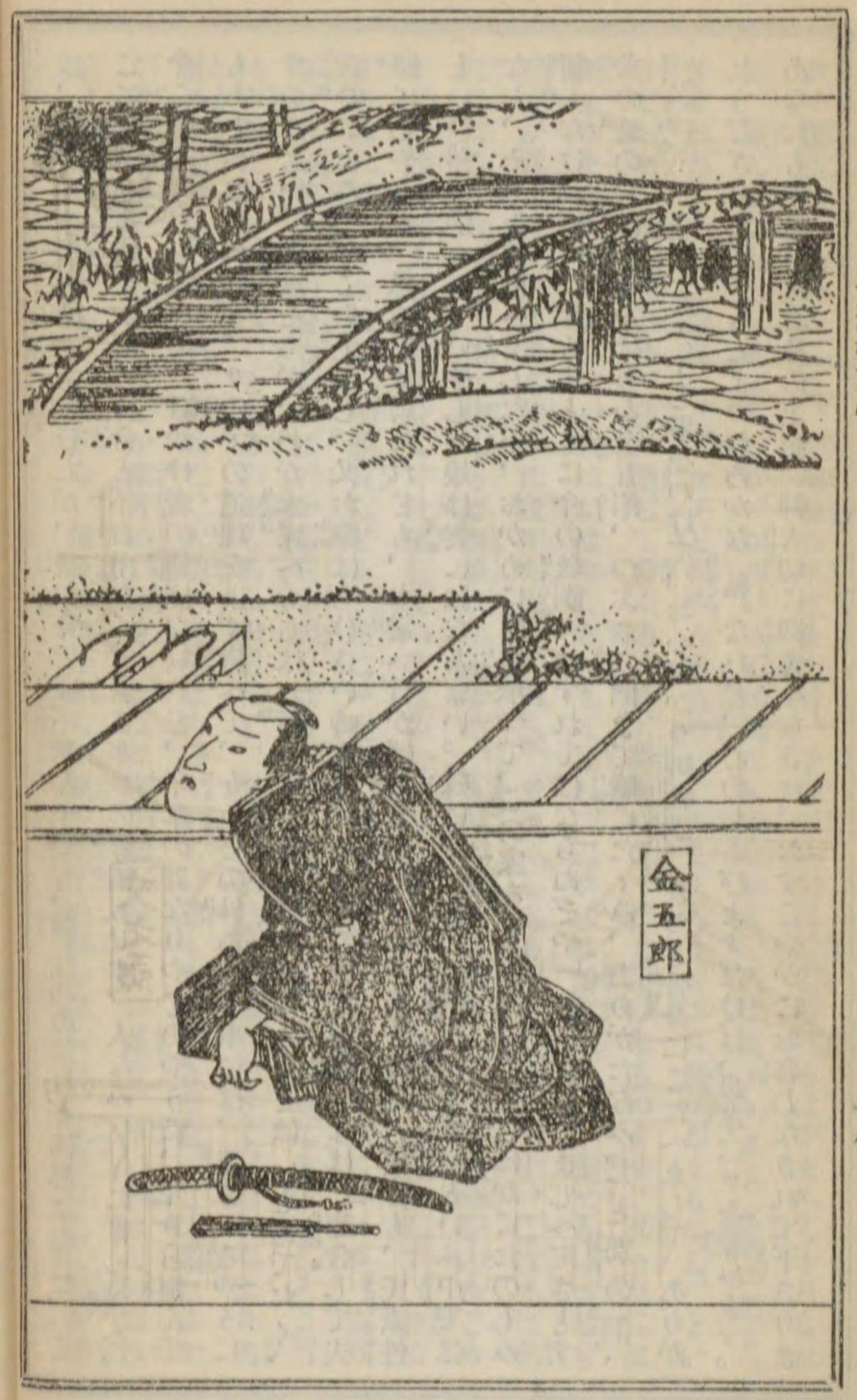
にねへ大あたりで、それからなんでも當りつゞけて、町も屋しきも紀の〳〵と、べたいちめんに女子供が、ひいきすると上がたまで、もつぱらの評判よ」おかめ「そのひいきの多い紀の國屋にも、まさつたお方がまた東へおくだりあそばしたら、マアどんなでござりませう」金「紀の國屋よりいゝ男とは、そりやアどこの人だ」おかめ「どこのお人か御存じでありながら、目もとから口元まで、音羽やに紀の國屋を、一ッにしたよりよい御容貌と、學文のけいこにお出なさる、みなさんが常不斷、さういつておほめなさいますよ」金「なんのこつたかさつぱり解せねへ」おかめ「わかりませんかえ、あなたの事さ」ト、につこりわらひ、顔をかくす。金「何をいふかと思つたら、おいらが顔の棚おろしか、いゝかげんにおひやるものだ」おかめ「アレ本當でござりますよ。それだから私は、いちばい苦勞になりまして、いろ〳〵な事を案じますと、胸がいつぱいになりますよ」金「なんのこつたな、をかしくもねへ。戯談はじやうだんだが、ほんにあんまり案じなさんな。迎と一緒にあしたの朝、鎌倉へ立つて行つても、落ついたら早速に、お前を迎へによこすから、ちつとの中だ、待つてゐな。しかし末しじうは、親父がおめへとおいらをば、夫婦にすると豫ての料簡、なれど今までつひしかに、親の目をしのんだり、なまめいた事もしねへから、そこがおめへの料簡一ッで、もしおいらに遠ざかつて、呼によこすが待遠なら、緣づくともどうなりと、

それはマア勝手次第。おほかたモウ東へ行くから、いやになつた時分だらう。のうおかめ、いやか」おかめ「いゝえ、なんのいやでござりませう。心にもないことばつかり。たとへどの樣な所でも、あなたが呼んで下さいますなら、私はうれしうございますが、あなたは東へお出あそばしたら、あづまの女中は上人品で、まことに意氣だと申しますに、私の樣なものは、とてもモウ、お捨てなさるは知れてをりますもの、末々の事を考へますと、寢ても夜の目もあひませず。そのうへ實の父さんは、お顔さへ見ぬその中に、三年あとにお果てなされ、跡に殘るは姉さんひとり、里に行つてお出なされば、いつぞや逢うて名告あひ、便になつたりなられたり、致しませうと存じましたに、そのかひもなく里親に、だまされて身を河竹に、おしづめなさりしといふ事ゆゑ、今は杖にもはしらにも、力に思ふはおとつさんばかり。末を憑みしあなたにまで、おもひがけないこん度のおわかれ、心ぼそい身になりました」ト。いひつゝなみだをそでにのごへやりつゝ、なでおろし、むね　ば、金五郎もそのこゝろねをおもひ「なんのこつたな。そんなに末の末までを、案じるから氣がふさぐ。なるほど兩親に早くわかれ、姉さんにも生わかれては、心細いももつともだが、人間は老少不定、さだめないのが世のならひ、命ばかりは神佛の、力づくにもゆかぬのは、みな定まれる身の宿世、それをくよ〳〵氣にしても、役にもたゝぬ事ぢやアねへか。又たとへわかれ〳〵に、遠く隔つて行

けばとて、おめへに此家をゆづりでもすると、ぜひ聟をとらねばならぬが、さういふ時は、マアどうする心だ」「そりやモウあなたがおつしやらずとも、海より山より御恩の深い、おとつさんのおつしやることを、背く心はございませんが、この事ばかりは背きます。たとひ妹伏のおゆるしをうけずとも、あなたをのけて餘の人に、添ひます心はございません。あなたが東へお下りあそばして、問音信もございませんと、わたくしはその時は、とても生きては居りません。死ぬる心でございます」金「馬鹿な事をいひな。それはほんの短氣といふもの、死ぬくれへなら何も苦勞をするにはあたらず、添ひたいと思へばこそ、いろ〳〵に氣をもむぢやアねへか。ほんに惡い事はいはねへから、すこしのうち辛抱して、便をするのを待つてゐな。コレサおかめ、なぜそんなに泣きなさる。子供かなんぞの樣に、別れて一生あはぬといふ事ぢやアなし、ちつと氣をしつかりもちな」ト、いはるゝほどなほおかめは、うれしさかなしさやるせなく、しくおつしやつてくださるほど、猶悲しくなりまする。考へて見れば見ますほど、しきりに心細くなりまして、あなたがお宿にお出あそばすうち、いつそ死んでしまいたくなりました」ト、金五郎のひざにとりつき、なげくこゝろをくみとりて、金「エヽ、おめへもマア心の弱い。なんぞといふと死ぬ〳〵と、譯もないその繰言。マアよくものをつもつて見な、こんなことをいふと年寄めくが、今世の中が靜だから

らよけれ、昔の亂世の時で見な、なんぼおいらの樣なちよろつかな者でも、武士の種だから、軍のところへ、是非出なけりやアならぬわ。よしか、出れば敵の首を取るやら、こつちの首を取らるゝやら、二ツに一ツ命がけ、親を捨て子を捨てて、戰場へ出るは武士のならひよ。むかしと今と比べて見な、まことに樂なこの世の中、そんな危い狂言もなく、武士の身に取つては本意ぢやなけれど、實に今は極樂世界。こゝの道理を考へると、三年や五年遠ざかつても、苦にするほどのこともねへが、そこがやつぱり自己勝手で、十分でも不足におもふは、人情のあたりめへさの。それだからかならずとも、きな〳〵思はず時節を俟ちなよ。短氣を出したそのあとでは、後悔してもはじまらねへから、心を大きく持つがいゝよ」ト、としわかなれど金五郎、さかしき言葉に事をわけて、さとすをりから下女來り、「若旦那さまえ、旦那さまがちよつと入らつしやいましと」トいふに金五郎は、「ヂイ〳〵」トおかめの部屋を出でてゆく。父文之丞は一間の内に、煙草くゆらし文よみ居る。金五郎はしとやかに、父の傍にかしこまる。文「オヽ、金五郎か。さてモウ鎌くらへ下るのも明日なれば、旅の調度を、落なく用意するがよいぞや。それにつけてもくど〳〵と、いひきかすまでもなけれど、獅子はわが子を谷へ投げ、其生立を見て安堵して手ばなすと、燒野の雉子夜の鶴、子ゆゑにまよふは親の常、鳥獸でさへそのやうなるを、況て人間は猶さらに、子を見ること親にしか

ず、譬高貴縉紳をはじめ、稲刈漁る下ざままで、子を思ふのは同じ事。もはやそちも十八なれば、案じるほどのことはないが、かういうては異なものなれど、人なみ〳〵より文武の道も、すぐれたといふではないが、マアどのやうな人中へ、出してもまんざら恥かしくもなし、というておのが智にほこり、藝に慢じて多くの人を、眼下に見くだしてはならぬぞや。又一ッには祖父さまを大事にかけ、われにかはりて孝行してくれ。二ッには弟文次郎は、養父といへども其方が爲には、いはずと知れた血すぢの叔父ゆゑ、ずゐぶんともに心にそむかず、これまた孝行せにやならぬぞ。また鎌くらは繁華の土地ゆゑ、人氣が都と違ふから、よく風俗をのみこめよ。仲間の付あひそのほかも、仕儀によつてはのつぴきならねど、物事萬うちばにして、花にさそはれ月にうかれて、女郎買なども三度に一度は、はづされなけりや行くがよいわさ。さりながら傾城傾國の譬もあれば、かならず深くはまらぬやう、心にこゝろを亂しちやならぬぞ。只忠孝に心を勵まば、その身の末もあしからねど、兎角に酒色は染まりやすく、むかしより名將勇士も、色に迷ひ酒に溺れて、大切の身をほろぼす例も、まゝあることゆゑ、この道はふかく耽らずつゝしめよ。こゝが常言の、恥をいはねば理が知れぬといふ通り、早い例はこのおれが、若氣のいたりといひながら、無分別な心から、親を捨て故郷をはなれ、家出なして暫が中は、住居もさだめずさまよひしが、親の身では不孝な子でも、憎し罰あたれとは思はぬにつ、ここに住居を定めてから、仕合と不自由なく、暑さ寒さの難儀もせず、人なみ〳〵に世を送る。今このくらしも浪々の、日かげ者の望はなけれど、不孝の罪なりやどのやうに、今さら悔んでもあとへはかへらず。サこゝの道理をよく辨へて、女色その外あしき事には、遠ざかるやうにするがよい。今度そちが、わが本家へもらはれ行きて、御主君へ事ゆることはいとめでたく、我身のよろこびこの上なし。又お龜はちひさい時より、そちにこの家を讓りなば、娶合して夫婦にしやうと、思うては居たれども、本家へ行かば何として、わが手で育てし娘でも、氏素性といひ弟の手まへ、いやしい娘は妻にはなるまい。殊にかための盃を、させたといふ中ではなし、そちを彼地へ下した上、おかめには婚取つて、この家をゆづらば我は又、ほかにたのしみ望もなければ、かならずともに今の教訓、わすれてはならぬぞや」ト、わが身のこと世の事をまじへてさとす言の葉の、はじめをはりを金五郎、つぶさに聞きて胸にたゝみ、ありがたなみだと別の泪、目にうかめてつをのみこみ、金「だん〳〵と事をわけて、お心ふかき御教訓、きつと骨身にこたへまして、ありがたうござります。もとよりおろかな私なれど、心のおよびますだけは、忠孝二ッを勵みます。あなたもずゐぶんお身の上を、御大切に御養生なされ、おすこやかにお暮しなされて下さりま。


金五郎

文之丞

し」トレとやかゝるあいさつに、文「イヤそれはかくべつ。おかめもそちと同じやうに、ちひさい時から共に育ちて、兄弟同様にくらしたから、今別るゝも悲しかろが、これも定まる約束事、無分別の出ぬやうに、よく暇乞したがよい」トすいもあまいも嚙みわけた、ことばをしほに金五郎は、父の前を退きて、おのが部屋へ入り、翌日出立のことなれば、何くれ彼くれそれ〴〵に、旅の準備を落もなく、とゝのへて夕餉をしまひ、楊枝をつかひながらおかめの部屋へそつと來り、金「どうだお龜、ちつとは氣色が直つたかの」おかめ「ハイなんだかどうも鬱塞ぎつゞけで、やつぱり頭痛がいたします。アノあなたはどうでもあしたの朝、お立ち遊ばすのでござりますかえ」金「さうさ、モウ迎が來て居るから、どうも延されもしねへのさ。それだからおめへの顏を、見るのも今夜かぎりゆゑ、忘れぬため見をさめに、能く見て置かうと思つて來たよ」ト笑ひながら顏を見れば、おかめは恥かしげに顏をあかめ、おかめ「またそんな虛ばつかり、それはほんの氣やすめでござりませう」金「さうさ、いづれおいらの言ふことは虛さのう。どうでモウ明日から、居ねへのだから、本當にやァしねへ筈だ。さつきおとつさんが言ひなすつた事を、おめへも大かた聞いたらうが、おいらが行つたその跡では、おかめに才子をとつてやつて、この家を讓るとおつしやつたヨ。のう、もしその聟が色男なら、首つたけはまりこんで、おいらのやうな者は、うしろ

むきで唾だらう」おかめ「なんのマアもつたいない、夢にもそんな心は持ちません。たとひ業平さんが生れかはつてまゐりましても、私はあなたに見かへる心は、爪の垢ほどもござりませんヨ」金「いゝかげんな事をいふ、見かへるこゝろは富士の山ほどあるだらう」おかめ「モウ〳〵あなたはなぜそのやうに、わたくしが申すことを、お疑ひあそばしますえ」金「うたぐりやァしねへけれど、虛らしい言ひやうだから。それが信實まことなら、かならず短氣を出さねへで、便をするのを俟つてゐなよ」ト背をさすればお龜はうれしく、おかめ「私はどのやうにも、俟つてをる氣でござりますから、どうぞきつとお便を、早くなすつてくださりまし」ト互につきぬ名殘のなみだ、いとしかはいもまだ知らぬ、明のからすのなく〳〵も、おかめは金五郎が支度する、かたへに持ものなど取そろへるうち、用意こと〴〵く整ひしかば、いざ出立とざゝめくを、金五郎はさすがにも、跡に心の殘れども、せんかたなければ氣をとりなほし、父とおかめに別をつげて、迎の者ともろ共に、心づよくも旅立つを、今が名殘と文之丞、おかめも共に門邊まで、おくり出でつゝ金五郎の、蔭見ゆるまで見送れば、あなたも見かへる別の泪、たがひに胸の憂也霧に、かくれて姿はみえずなりぬ。

前編中卷

第二回

在然程に、お龜は金五郎が鎌倉へ下りし後は、いとど心もむすぼれて、とかく浮立つ事もなく、今日や便のありもやせん、あすや音信あらんかと、あだに過つ日を指をりかぞへ、一日々々とくらすうち、早くも半年あまりも過ちて、彌生の末になりにけり。されどもいかなる事にやありけん、金五郎の方より音信の、文さへ來ねばひとしほに、おかめはおもひいやましして、ほのかに聞けば鎌倉には、お雪といへる娘ありて、ゆく〳〵は金五郎に、娶合する約束なるよし、きいて猶さら胸つぶれ、さうとは知らずうか〳〵と、たよりの文をたのしみに、待ちし心のおろかさよ、殊に妹伏のかたらひも、せぬ中なればなか〳〵に、いつの世にかは添ふ事ならず、といふて今さらよそほかの、男持つ氣はさら〳〵なし、今は日頃のたのしみの、かひさへ泣いてくらすのかと、おもへば千々に胸くるしく、あるにもあられぬせつなさを、父文之丞にもかたられず、ひとり心をいためしが、只その事のみ思ふものから、うつら〳〵と床病の、朝な夕なの食事さへ、ろく〳〵すゝまずうち臥しぬれど、もとより妬む心なければ、あぢきなき世と

うちかこち、一日二日と送れども、夜の目もあはさで案じ事、行するこしかた思うてみれば、よく〳〵幸なきうまれにて、親にはおくれ姉にはわかれ、便さへなき身の因果、こゝろの願もかなはねば、生ながらへても樂からず、いつそ淵川へ身を沈めて、果てなん事こそましならめと、戀に心もみだれ髪、なであぐる氣もなか〳〵に、泣しづみたる閨の戸を、ふけゆく夜半の風ならで、ほと〳〵とうち敲き、「おかめ〳〵」とよぶ聲に、驚かされて立あがり、そつと戸を開けうかゞへど、人もあらねばさてはわが、心のまよひに風の音を、もしや戀しきその人の、來給ひしとや思ひしゆゑ、あなあさましき心かなと、わが身のほどをかへりみて、またうち臥すにふたゝび三たび、「おかめ〳〵」といふ聲の、耳に入るこそいぶかしく、もしやと惑ひて出て見れば、影さへもなしうち臥せば、またよぶ聲のするゆゑに、おかめは夢歟うつゝかと、そのまどひさへ解けがたく、心亂れて立つたり居たり。こは生存へても添はれねば、思ひあきらめ死ねかしと、父母の呼び給ふならん、オヽそれ〳〵と娘氣の、よしなき迷にひかされて、死する覺悟に裾はしをり、幸ひ誰も見しらぬ樣子ト裏口より脱出でて、いづくともなく急ぎ行きぬ。其明の朝おかめの居ざるを、見つけて驚く文之丞、家内の男女もおどろきて、其所此所と搜せども、その行方知れざりければ、文之丞はつく〴〵思ふに、日ごろより金五郎を、夫

の如くおもひおもはれ、たがひに憎からぬ中なりしを、いつぞや別れしその日より、たどうつら〳〵として、東の空のみ打詠め、娘心に添はれぬ事と、思ひあまりの胸に絶えずや、夜もをり〳〵うなされては、淵川へなと身を沈めんと、うつゝの如くにいひけるが、さては入水やなしたりけんと、猶人を出し水邊を、落なく尋ねさがしけれど、その死骸さへ知れざれば、今は文之丞も定業ならんと、やうやくあきらめ、家出せし日を忌日として、七日々々の訪とむらひもねんごろに、泪ながらにいとなみつ、文之丞はこの事を、くはしく狀にしたゝめて、鎌くらの金五郎かたへ、人を下して知らせけり。されば又金五郎は、本家の叔父文次郎の家に、養子にもらはれ來りけるが、おもひきやお雪というて、容貌のうるはしき、娘のあるに驚きしが、今さらにせん方なく、父の教にしたがひて、養父母に孝をつくし、くらすうちも都に殘せし、おかめの事のみ氣にかゝり、末は女夫と約束して、別れて此地に落著きしなら、便をなして呼迎へんと、思ひし事もくひちがひ、お雪のあればこなたの父に、おかめの事をうちあけて、迎へたしとも言ひがたく、殊に實父文之丞が、おかめは素生もいやしければ、本家の厠にはなりがたしと、いひたる言のかれこれを、思ひ合せばゆく〳〵は、とてもおかめと添ふ事ならず、一旦約束したれども、かゝる譯ゆゑおもひきれと、言送らんもさすがにて、又遠ごかりゐるこ

となれば、なま中たよりをするならば、思のたねをいやます道理、音信せぬこそ互のため、いつか忘るゝこともあらんと、あきらめては見るものの、愛敬づきて憎からぬ、おかめを今さら餘の人の、手活の花になすことも、いと口惜しき事なりと、日々に胸のみ苦しめけり。かゝるところに實父の方より、しか〴〵の事により、おかめが家出し行方知れずと、いひこしければ金五郎は、駭くこと大かたならず、掌中の玉を、うしなひし、心地にあきれ胸つぶれ、氣ぬけするまで惑ひしが、さすが男の事なれば、やうやくに心取直し、つく〴〵おもへば緣なきむかしと、あきらめては見るものの、もしやおかめの心かはり、我のみ深くおもひゐるのも、知らずに男をこしらへて、家出せしにはあらざるか・又は狹き心から、添はれぬ事を苦に病みて、入水などせしにやト、さま〴〵に思ひとりて、心に囘向したりけり。是より後は金五郎も、おかめが死せしと思ふものから、家の娘お雪の姿も、十人なみには勝れたれど、見かへる心もなき故に、世にたのしき事もなく、おもしろからぬ日を過すうち、夏去り秋も文月の、中旬にいたれど暑さはさらず。ある日金五郎は、醉狂といふ友達にさそはれて、大磯の燈籠を見物せんと、打連れてたそがれより、廓へ至りなじみの茶や、守多屋へゆきて酒宴をまうけ、歌妓牽頭なんど相手にして、ざゝめきわたつて大さわぎ。「コウ〳〵おたこさん〳〵、コ

屋

レサおたこばう、ちよつとこつちを向き給へ」（トげいしやの袖をむしやうに引ぱる）おたこ「アレいやだヨ、よしておくれ。そんなに引ぱると著物がきれるはチ。すかねへのう」（ほ吉「オヤ氣がつかねへ、堪忍しておくれようッ。コウおたさん、いゝ子だからちよつとうしろを彈いておくれ。無類飛切大極上、せり賣卸仕らずといふ聲色をつかふから」おたこ「オヤ〳〵おつな藥のいひ立だねえ」

（ほ「まねまするは、エヘン〳〵エヘン、エヘヘンノ、エヘン、エヘエヘンノ、エヘン〳〵エヘン〳〵」（たいこ目八「なんだ〳〵、コレどうしたのだ。そこへ小間物見せを出しちやア眞平だぜ」（ほ「なぜ〳〵。こりやア聲色だ」目八「エヘン〳〵、エヘンノヘンツ、なんのこつた」（ほ「ハテやほな事を聞き給ふな。よく考へて御覽じろ。即ち咳が三十らうサの」（醉狂）おきやアがれ。アハヽヽヽ」目八「モシ旦那、妙な事がごぜえます。誠にどうも、どうも誠に、實に妙々妙でごぜえす」（醉）「何だやかましい、何をいふのだ」目八「イエサあなたが誠にどうも」（醉）「己がどうした。女が惚れるで羨しいか」目八「いかなこつても御挨拶。オホヽヽツ。エモシ、お前さんはお目が二ツあつてよく見えますチ。實にうら目しいたアこのこつた」（醉）「ハヽヽヽ、何をいふかと思つたら、足下は目が一ツだつけの。をしい男だが、あつたら玉に疵だのう」（ほ吉「さやうさねえ。モシ旦那、よく御覽じまし。顔の丸みあんばい肉合なんどは、てもなく珊瑚珠の緒〆の再來、モシ鼻筋が横の方へぐつと通つて、眉毛がによつくりと蛞蝓の樣で、鼻は獅子でもねへが赤くむくれて、口は錢湯のざくろ口だが、流し男の給金が安いかして、齒は一向に磨上げず、匂のあしき事いはん方なし。譬へていはゞてんぐ〳〵むき〳〵の、寄合世帶といふ顔構サ。ア、なげかはしいが愛敬のねへ、女緣のなささうな御面相だぞ」目八「こう〳〵貴さまは、何の遺恨があつて、おれが顔の棚おろしをするのだ。隣の寶をかぞへるやうに、人の疵氣を頭痛に病むとは、よつほどおめへも苦勞性だぜ。アヽとかく男のいゝものは、そねまれるのでうるとえぞ。オホン〳〵」（ほ「ヘン、おつうとまりたがる奴だの。コウ戲談はおどけだが、足下料間をさらけやめねえ。いゝ金まうけの筋があるぜ、九月になると」目八「なぜ〳〵」（ほ「よく考へて見さつし。容貌といひ口前といひ」目八「ハテナ、富でもとるといふ事かノ」（ほ「ヘン押の強え、神明の祭だからよ」目八「ナニ〳〵、神明のまつり、フウめつかち生姜か。ヤいま〳〵しい事をぬかしやアがる。コレそんなに難非を付けて惡くいつても、是でも女にやア憎がられねへ男だよ」（ほ「そのかはりかはいがられた事もあるめへ、その顔ぢやア」目八「そねめ〳〵。顔にや迷はぬ姿にやほれぬと」（ほ「フウたつたひとつの目に惚れるか。フハヽヽヽヽ」おたこ「オ

ヤ〳〵目八さん、今日はまことに閉口だねえ」目八「ナニサ〳〵、こんな理も非も辨へねへ、田夫野人と論は無益だ」（ト）「ナニ、己が田夫野人なら、足下は牛房にんじんだ」みな〳〵「ハ、、、、ハ」目八「時にモシ、金さんとおつしやいました子、ちよいと一ッけんじ天皇あきの田のといたしませう」金五郎「こりやァ一ッお押へだ」目八「ナアル、そこもあれば蓋もあるか。モシ旦那、實に妙といふことがござえますトいふ來歴は、モシ、千年屋のかゝへの子で、このごろまで引込んでをりましたのが、けふ突出しの眞名鶴といつて、ぶつつけ然のお職さ子。その容貌といつぱ、天人は羽衣をかぶり、辨天さまは冠を落し、拙者がお宿の山の神も、尻をまくつて逃出すばかり」（ト）「ヘンがうぎに山の神をあがめたの」目八「大きにス。エヽとまづこの天盃は、そちらの旦那へさゝげて置きのト。そこでモシ旦那、今にモウこゝへ眞名鶴さんがめえりますから、よくお拜みなせえ。實にびつくりおいたちこ、ねずみこつこは痴話のはじまり、とけつこつこは鷄よ、はとつぽつぽにや豆をやれ、すてつぽうには油斷をするな、ふてえ奴なら打のめせ、じたいわれらは都のうまれ、色にそやされ、こんな割間になられたァ。ハァどんどことん、どんどこどんッ。アヽせつねへ、いきがはづむ。アッハッハ、、、、、ハ」醉狂「エヽやかましい、よくしやべるぞ。そんなにどなると、天井の煤が神事舞をして、疊の芥がをどり出すだらう」目八「違えごぜせん。酒呑猪口がきやりをいつて、銚子の引物を引出すと、吸物膳の箸が突立つて、硯ぶたの慈姑をおつちらかしやせう。とんだ化物屋しきのやうだ。アハ、、、、、。旦那おどけはのけて、モシ、噂をすれば影ぢやあねへ、正眞正銘本家元祖、まじりなし、外八文字でしよなり〳〵。アレ〳〵、あの挑灯がそでごぜえます」醉「ほんにのう、金さんおめへもよく目利をして、もし無疵で氣に入つたら、今夜の花にしなさるがいゝ」金五郎「ちげえねへ、なんならお前ともやひにしませう」（ト、おどけをいふうち、千とせやのつき出し女郎まな鶴は、新造かぶろをひきつれて、いろ〳〵ぜんとあゆみくるを、金五郎はひとみをさだめて、みればふしぎやゆく〳〵の知れぬ）おかめの姿に生うつし。もしやそれかとつく〴〵見れば、劣はせねどどこやらだ、違ふ樣には思はれても、目もと口もと愛敬ある、品かたちのよく似たれば、胸とどろきて心まどひ、わが身の迷か、醉うたる故かと、しばし見とれて詞なきを、見てとる割間醉狂も（金五郎の肩をたゝいて笑ひながら）女郎もげいしやも地者もいやだと、だゝつ子がすねるやうに、いやだ〳〵といひなすつたが、なんと今の花魁はどうだエ」金「さうさ子、なか〳〵美しい子」醉「よつぽどさそふ水あらばだ子」金「ナニ、さういふ理窟でもねへけれど」醉「けれどがをかしい。あながち氣がないでもあるめえ」金「ハ、ハ、、、、マアなんでもいゝから、わたしやァあの子にきめやう」醉「それがいゝ〳〵。そんなら

己も行つて、誰ぞ見立てやう」ト、二人はたいこげいしやをひきつれ、ちとせやゝをどりこみ、醉狂もあひかたをさだめ、りあげ床へまはれば、藝者牽頭は、「御機嫌よう」ト、みな〳〵どやどや下へゆく。金五郎は初會の事ゆゑ、羽織は枕元にぬぎ捨てて、横になつて寐てゐるところへ、相方の眞名鶴は、藍御納戸の唐縮緬、裾に光琳の鶴の染出し、緋ぢりめんの裏襟つきし、ひとへものについたけの襦絆、黑の紋天に緋のごろふくりんの、腹あはせの帶をだらしなく結び、鼻紙を持添へて褄をとり、いそ〳〵しながち金五郎のそばへ來り、顏をさしのぞいて眞名鶴「もしえ、モウおやすみなんしたかえ。なぜ起きてゐておくんなんせぬえ。サア目よりかゝり、ト、ゆすりおこせば金五郎は、わざと目のさめたふりにて、金「オヤおいらん、いつの間にマア來なすつた、くるなをお覺しなんし」ら來ると前びろに、鳥渡人でもよこしなさればいゝ、出しぬけに起されちやア蟲が動じるから」まなづる「オヤ〳〵いやでおすよ」金「さうだらう子。いづれ私のやうなへうたんは、可愛がられねへのはあたりめへさ」まなづる「アレさうぢやアおざりいせん。お氣にさはつたらお容しなんし」ト、たばこをすひつけていだす。金五郎はひとひきひいて、金「これは御馳走」ト、まなづるにわたし、顏をしげ〳〵見てゐる。「オヤなんざんすえ。ぬしやアなぜそんなに顏ばかり見なんすえ。ぬしにそんなに見られえすと、恥しくなりいすヨ」ト、につこり金「まことに不思議。どうも生うつし。こんなにもよく似るものか」ト、われをわすれてはつといき。まなづる「オヤなんでおすえ。似いしたとは、そりやア誰さんに似いしたえ」ト、につこりわらふ金「ソレ、その笑ふ顏つきから、物ごし恰好、似たとはおろか、瓜を二ツにわらずとその儘」まなづる「オホ、〻、〻、ばからしうおすヨ。似たく〳〵とおつせえすが、誰に似申したのか、話してお聞かせなんしな」金「話しませう〳〵。その似たといふ仔細は、マア聞いておくれ、かういふ譯さ。わたしが幼い時分から、行すゑかけていひかはし、女房にせうと思つた女にサ。ほんに野暮な野郎だと、わらつてくんなさんな」まな鶴「なんのマア笑ひんせう。そんならモウぬしは御新造さんがおざりいす子」金「ナニサその女はモウとつくに死んでしまつたのサ」鶴「うそ〳〵。そんなにお隱しなんせずとよいぢやアおつせんかえ」金「うそぢやアなしサ、實に死んでしまつたよ」鶴「ほんざんすかえ、ソリヤアマア、さぞお力がお落ちなんしたらう子。譬また虛いつはりにも、ぬしに思はれてお出なんした、そのお方に似たと思つておくんなんすりや、わたくしが身に取りいしちやア、眞實嬉しうおざりいすヨ」金「なんの、うれしい事はありやすめえ。そりやアほんのつとめの手くだ、實は七里けつぱいだらう」鶴「オヤ勿體ない、なんでいつはりを申しいせう。初會からこんなことを申しいしたら、おさげすみなんせうが、ぬしのためなら都合しても、呼び申したうおざりいすが、ぬしやア大かた通り一遍で、もうお出なんすこつちやアおざりいすめえ」金「そりやアみんなこつちで言ふ事、一河の流一樹の蔭、他生の縁があればこそ、かうしてわざ〳〵來ると

いふもの。おめへがさういふ心なら、わたしも根かぎり通ふ氣だが、いゝ時分に突出しちやアつたい何所の生れか、なじみがひに咄してきかせな」鶴「そりやアぬしのことざんすから、おはなし申しもいたしいせうが、身の上をあかしいしたら、ぬしに愛想をつかされいせう」金「さうおもふも尤だが、いづれこの廓へ身を沈めるには、仕合がよくつて來たものはねへから、なに恥といふではなし、咄して聞かせてもいゝぢやアねへか」鶴「ほんにそれもさうでおすヲ、そんならおはなし申しいせう。アノ私はまことに〳〵遠くの國でおざりいすよ」金「ハテヲ、それぢやア蝦夷松前か、紅毛の果からでも來たのかえ」鶴「オホ、、、、ばからしうおすヨ。アノ上方でおざりいすからさ」金「フウ、アノ上方、ハテナ本當にか」鶴「アイ、それだから遠くだと申しいすのさ」金「なんの上方の生れなら、遠くなことがあるものか。ハテ緣といふものはおつなものだヲ。わたしもやつぱり上方ぜえろくさ」鶴「オヤ虛をおつきなんし、なんのマアぬしなんぞが、上方だとおつせえしても、上方にやアぬしのやうな、いきなお方はおざりませんよ」金「さうさ、わたしの樣な不意氣な野郎は、どこの國にあるものか。そしておめへは上方の、もし珠數屋町の邊ぢやアねへかえ」鶴「エ、ほんにさうでおざりいすヨ。よくぬしは知つてお出なんすヲ。その珠數屋町の六兵衞と申しいすまづしい者のむすめ」金「ヤ、そんならアノ珠數屋町の、古鐵買の六兵衞どのの、娘であつたか、アノおめへが」ト、眞名鶴は何かは知らねば、わが身の上はをさなき時より、母にわかれ家まづしきゆゑ、さるかたへ里にゆきて、やうやく成人なしたるところ、里親にだまされて、過ぎし年この大磯の苦界に沈み、父六兵衞は夫より先に、亡靈の數に入り、たつた一人の妹は、藁の上から情ある、お方にもらはれ育つと聞けど、つひに一度逢ひもせず、便なき身はつねぐ〳〵から、妹ばかりがゆく〳〵の、力とおもへどかひなきつとめ、まめで居るやらどうしたやらと、案じるのみと身の素生を、かたるをきいて金五郎は、驚くことひとかたならず、我こそそなたが妹の親の、文之丞が男子なるが、をさなき時より妹おかめは、吾身と共に人と成りて、いまだ枕はかはさねども、行すゑ女夫の約束して、中よくくらすその中に、われは此地の叔父の家へ、もらはれ來りしその後にて、おかめは家出し果てたるにや、行方の知れぬその處に、今また思ひがけなくも、姉のおん身にめぐり〳〵て、今宵名のりあふといふも、やつぱりつながる血すぢの糸、あやしき緣なりけりと、いちぶしじうを物語れば、ます〳〵駭く眞名鶴は、便にせんと樂しみ俟ちし、只ひとりの妹よで、世になき人と

聞くからに、悲しさいとどいやまさり、しばし泪にくれにけり。かゝるえにしの淺からぬ、中なればなほさまぐに、身のうへの事かたりあかしぬ。されどもたがひに一ッに寢ず、一旦金五郎も妹お龜に、女夫の約束せしことなれば、今さらその血すぢの姉が、流の身とても枕かはすは、さすがにうしろめたく思へば、眞名鶴もまたその心ゆゑ、すいた男とにくからねど、帶紐解いては死したる妹の、供養にならずと心につゝしみ、いやらしきことさへ言はず。さりながら金五郎は、この儘にもふり捨てられねば、是より常の客のごとく、をり〳〵眞名鶴の所へ通へど、決して枕をかはすことなく、酒などのみては憂さをかたりぬ。かくてその月もくれ、八月のはじめになりけるに、例のごとく思ひ〳〵の、俄狂言をどりなど、さまぐあるその中に、額俵屋といふ茶屋の、今度かゝへの藝者の小三、品かたちといひとりなりまで、五町にまれなる容貌ゆゑ、淺間のをどりにこの小さんを、傾城奥州に仕立て、衣裝著つけも美をつくし、淨瑠璃は登見本阿輪太夫にて、人の耳目をおどろかす踊ゆゑ、廓中での大評判、をりふし金五郎は、待宵の月をながめつゝ、俄を見物なすべしと、例のごとく守多屋の二階にて、眞名鶴と共に酒くみかはし、今や來ると待居るところへ、程なく來る淺間の踊、節おもしろき太夫の淨瑠璃、

あさい心としら糸の、染めてくやしきなれ衣、ありしながらの一ッまへ、小づま揃へてしどけなく、風に柳の吹くまゝに、まかせるはずのつとめぢやとても、いやな客にも比翼ざ、思ふ男の山鳥の、

トかたる文句につれて踊る小さんを、金五郎は、何心なく、見ればふしぎやすぎし頃、家出して死したるおかめに、寸分違はぬ顔かたち、これは不思議とまたゝきもせず、見れば見るほど違はねば、是もわが身の迷かと、思ひ直して見るものの、外の女と思はれねば、もしや浮氣なこゝろを出し、男をこしらへこの廓へ、逃けて來てゐることにやと、まはり氣すれば腹立しく、さりとて人に問ふも異なもの、とつくり樣子を見きはめんと、そしらぬふりにて見てゐれば、幫間のへほ吉見とれつゝ、（匠「イヨ〳〵、濱の本店、小さん大明神さま〳〵、外には決してごぜえせん、三千世界にたつた一人」目八「イヤ有がたし、妙でごぜえす。濱むらや丸むき、額俵屋の大黑柱、ありがたいの天上め、唉耶姫の再來か、三國一の無類々々」金「たいさうほめるのう、賄賂でももらやアしねへか」目八「モシ旦那、賄賂どころか、けふもきのふも昨日も今日も、文玉章の數々は、ヤモシ、あんなうつつい美婦人だ、つけ文をするのでのほせやすのさ」女げいしやもとわ「オヤ目八さんきついこつた子。十九文やの店さきのやうに、うぬぼれ鏡が澤

山だヨ。オホ、、、、、」日八「ヘンやつかましい、妬くな〳〵。おとわばうは氣めへはいゝか
とかく妬くのでおそれるのッ」もと吉「オヤよしておくれ、お前のおかみさんとはちつと違ふにより。
モシ旦那え、アノ小三さんはチ、上がたから此頃まゐりましたさうでございますが、よく早く
呑込みましたぢやアございませんか」金「さうか、とんだ遠くから賣られて來たの。大かた男と
駈落でもして、其男に賣られたのだらう」日八「旦那きついもの、お前さんの判斷の通り、男と
はる〴〵にげて來たが、その男にたぶらかされて、泥水へ沈んだのでごぜえますッサ」まなづる「オ
ヤ〳〵アノ子がかえ、どうもさういふ樣子には見えいせんねえ。もしえ、さうぢやアおつせ
んかえ」金「おいらんはさういふけれど、そこが譬の小袋と小娘、沮斷のならねへ世の中さの」
へぼ吉「ナニ〳〵旦那、さういふ譯ぢやアごぜえせんッサ。わたくしがこのあひだ額重へめえつた
時、よく氣をつけて見ましたが、それは〳〵起居ふるまひの物しづやかさ、音聲はさわやかに
して鶯のさへづる如く、多辯でなく、はすはでなく、意氣でしやんとして程がよく、鴨川の
水を產湯にあびて、京おしろいを糠袋に入れて、みがきあげた眞の美女さチ」（トはなす處へあるじ庄吉いできたりて、）
庄「モシ旦那、額重の小さんをごらうじましたか」金「フウ何だかろく〳〵見なんだが、よつほど
美婦人ださうだの」庄「さやうでございます、まづ此頃での藝者だと申します。いゝ金筥をか

（トとりあへずひやうばんのそのうちも、金五郎はむねに手をおき、）アノ小さんこそ面ざしといひ、上方から來たといへば、おか
めによも相違はあるまじ。眞名鶴にもうち明けて、やうすを聞かんと思ひしが、なま中あから
さまに語りても、健で彼してゐるからは、心がはりて男のために、身を沈めしもはかりがたし
と、さま〴〵に思案して、今宵は去りがたき用ありとて、そこ〳〵に座敷もきりあげ、眞名鶴
に別れて大門を出でしが、忽ち又取つて返し、私に額俵屋重兵衛の所へゆき、彼の小さんに口
をかけて、二かいへあがり酒のみながら、今や來ると待つところに、程なく小さんは俄をしま
ひ、うかぬ顏にて何氣なく、二階のはしごをとん〳〵と、上り來りて金五郎の、側へ立寄り顏
見合せ、ハツとばかりに驚きあわて、立たんとするを金五郎は、（目をつりあげ、）「コウ小さんさん
とやら、なぜ逃げる。氣障な客だから氣に入らねへか。きざならきざでいゝけれど、物もいは
ずにそしらぬふりは、見わすれたのか見くびつたか。よもや忘れはしめへがの。未練が殘つて
來たのぢやねへ、聞く事があるから下にゐろ」（トいはれて小さんはむねにくぎ、なんといらへんことばもなく、うん
ぼくなげにひれふして、只さめ〴〵となきゐたり。金五郎はなほと為
げ、）「コレ、あいさつしねへは面目ねへのか。エ、そのざまはマア誰ゆゑだ。定めしかはいゝ男の
ために、心がらのこのつとめ歟。よく物をつもつて見ろよ。犬猫でもそれ相應に、恩といふこ
とは知つてゐるぞ。それになんだ、己の顏を踏つけにするはおろかな事、わらの上から育られ

た、産の親より恩の深い、養親の情をわすれ、恩を仇の犬畜生、ぎりある親の名をけがし、恥をはぢとも思はぬ狸め。よくマア面もかぶらずに、のけ〳〵と出てうせたナ。いかに遠路をへだつるとも、多くの人のいりこむ廓、この鏃くらにもおれが親父の、文武の弟子はいくらもあれば、この街へもみないりこむわ。それに面を合しても、恥ぢやァあるめへ恥でもなからう。さういふ事とはつゆ知らず、親父は直なこゝろから、神かくしにでもなつたのか、又は身をなげて死んだかと、心を盡して尋ねさせ、うらなひ八卦御圖にも、生死の程もわからぬから、家で出した日を忌日として、佛事供養も懇にすると、くはしい書狀が來たゆゑに、子供の時より一ッに育ちし、馴染がひに朝な夕な、念佛申してやらうとおもへど、今は養子の身の上なれば、兩親の前へも遠慮がちで、心にはまかせねど、合間を見ては回向して、抹香くさい佛いぢりも、萬一たつしやで居るならば、身の祈禱にもならうかと、心づくしに引かへて、生根のくさつた恩しらず、大切な親をふり捨てて、この土地へ來て泥水活業。オヽ、貞女だ、節義ものだ。髪のかざりの櫛笄、はでな衣裝に浮氣なとりなり、長唄豐後はやり唄や、一中ぶしをうなつたり、是見よがしに踊を踊つて、客のきげんをとる事ゆゑ、人も迷はう惚れもしやう。惡性ものの天上め。モウ〳〵愛想のつかしをさめだ。顔を見るのもいま〳〵しい。ものをいふのも是ぎりだから、勝手次第に浮氣をしをれ」（トいひすてて立たんとするを、小さんはしじういひわけなさに、只なきしづみゐたりしが、こゝぞ大事とあわててとりつき、）小三「サヽヽみな御尤でござりますが、マア〳〵俟つて下さいまし。くはしい樣子を御ぞんじないから、お腹をお立ち遊ばすも、すこしも御無理はござりませんが、是にはいろ〳〵ふかい譯が」金「ヲヽ、譯もあらうし義理もあらう。けれどもそりやァ聞く耳やもたねへ。エヽいけふざけた、はなさねへか」小三「いゝえ放しはいたしません。言がひのない心から、思ひもよらぬおうたがひ、死なうと覺悟極めしは、今日の今まで日にいくたび、やつぱり死なれぬ身の因果、どうなりとして今一度、あなたのお顔を見たうへにと、あまたの人の入りこむこの花街、そればつかりをたのしみに、つらい苦界に身を沈めて、恥や人めに氣もつかず」金「エヽやかましい、よしにしろ。どゝいつの文句めいた、そんなせりふはをかしくねへ。流行言に道理をつけたり、間に合ひの口ぼこでも、モウその手ぢやァばかされねへわ」小三「左樣ではござりませうが、どうぞ情とおぼしめして、たつた一言申す事を、お聞きなすつてくださいまし。その上にてはともかくも、殺してなりとお腹いせ、御勝手しだいになされまし」ト身をなげかけてすがりとめ、泪ながらにわびるにぞ、金五郎もさすがまた、心づよくはいふものの、にくからぬ小三のことゆゑ、すげなく立つても歸られねば、袖ふりはらひ身をそむけ、銚子の酒を手酌にして、茶碗にうけて

ぐいと呑み、手まくらをして寐ころびゐる。

前編　下卷

第三回

當下小三は胸なでおろし、泪を袖にぬぐひつゝ、金五郎の側へさしより、小三「今さら實を申しましても、一旦お疑ひを受けましたれば、誠とは思召すまいが、あなたにお別れ申してより、一日片時わすれませず、泣いてはあかし哭いてはくらし、もう〳〵悲しい日を送るも、やがて東へ落ついたら、呼によこすとおつしやつた、そのおことばを力にして、今日か明日かと指をりて、まてば一日も十日の思、明けても暮れてもお便なく、一と月たち二月過ぎ、三月四月と日は立てども、風のたよりのお文さへ、ないてくらして居るうちに、この春の彌生のころ、日さへ忘れはいたしません、上の八日の夜もふけて、みな家内は寐しづまつても、わたくしばかり目も合はず、こしかた行すゑどうかうと、思ひまはせばいとゞしく、たよりなき身にあなたにまで、捨てられては世に頼なく、いつそ死なうか果てやうかと、案じすごして居ります折から、閨の戸とん〳〵うちたゝき、おかめ〳〵とあなたのお聲、さてはと嬉しく戸をあけて、見ればなんにも眞の闇、これも心のまよひかと、また寐まするとまた又とん〳〵、おかめ〳〵とよぶ

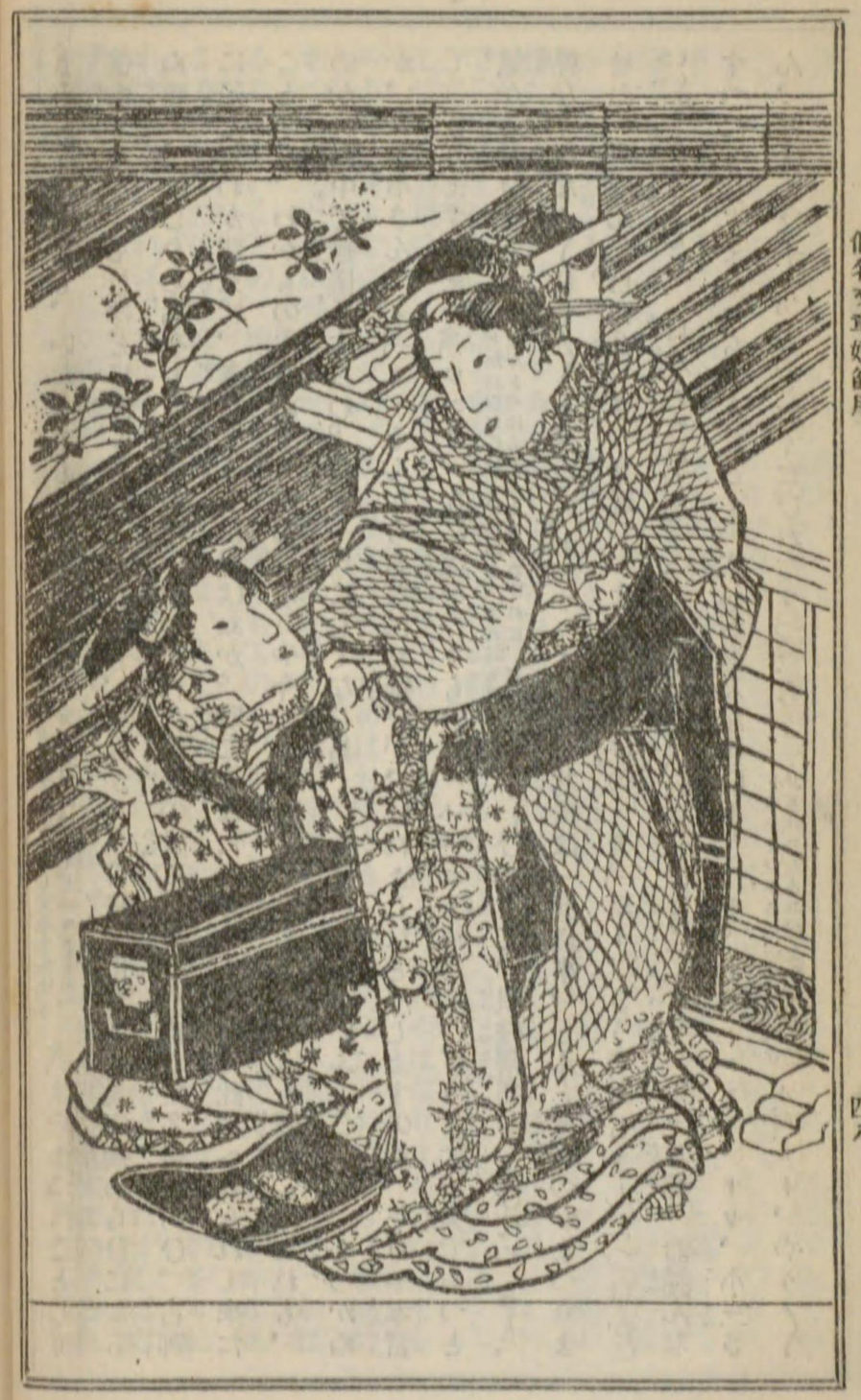
聲の、三度四たびと聞ゆるゆゑ、また出て見れば物もなし。われとわが身で合點もゆかず、途方にくるれば寺々に、ひどく夜中の鐘の音の、あはれ無常を告げるかと、ながらへ難く胸せまり、物うき月日を送りますのも、心ぐるしく苦患になり、いつそ死んだがましであらうと、おもへばしきりにぞく〳〵と、首すぢもとから身の毛だち、死ねよ〳〵と死神の、ついて死ぬのを勸めますのか、立つても居ても落つかず、我を忘れてふら〳〵と、家をぬけ出で走りましたが、その後の事はさつぱり知らず、どうして身を投げしやら、加茂河へながれ著いたを、近所の者に引上げられ、息ふき返して見ましたところが、顔も見しらぬこはい男が、ぜげんとやら人買とやらいふ男とふたりで、いろ〳〵な、あだいやらしい事をいうて、抱かれて寢るか言ふこと聞くかと、いはれて怖さおそろしさ、いろ〳〵にわび言しても、こはい目ばかりいたしまして、聞入のない無理非道、というて身を汚すくらゐなら、舌を喰つてなと果てませうと存じましたが、身を投げてさへ助かるものを、まだ命の盡きぬ事なら、どうぞして東へ下り、あなたのお顔をもう一度、見ましたうへで死にたいものと、おもうた心の通じましたか、その惡棍が、いふことをきかずば、遠い大磯へ賣こかし、金にするとやら申します故、とても運わるく死におくれ、惡者の手に捕へられては、おとつさんのところへ直ぐすなほには、返す事もありますまいし、どうで憂目を見る位なら、大磯の廓は朝暮に、人の入りこむ所といへば、そこへ身を沈めたなら、あなたにめぐり逢はれうかと、はかないことを便にして、御恩の深いおとつさんを、お見棄申す心はなけれど、心一ツにせんかたなく、とう〳〵この額俵屋へ、歌妓に賣られてまゐりましたが、思ひもよらずたつた今、あなたにお目にかゝりまして、あまりの事の嬉しさに、ものさへいはずに立ちましたは、私が前後の考なく、不調法でござりますから、おゆるしなされてくださりまし。殊にあなたに逢ひたいばかりに、覺期いたしてこの苦界へ、身を沈めは沈めましたが、今さらお目にかゝりますと、まことに身のほどが恥かしく、消えてなくなりたうござります。どうで大切のおとつさんを捨て、道ならぬことに身を墮し、御苦勞かけてあなたには、御憎しみをうけたこの身、いつまでながらへ居られませう。どうぞこの世の思出には、今までのお疑ひを、おはらしなされてくださりまし」

（びることばのせつなるを、聞けばさすがに金五郎も、いつたん腹はたちけれども、人のきこえをはゞかりて、わ）

かくまでわが身を深く思うて、この泥水に身をしづめても、蓮に似たる心の潔白、苦勞さするもわれゆゑか、不便のものやと心には、おもへど男の事なれば、そのまゝ心もをれかねて、返事もせずに空睡。（小さんはなはもすりよつて、顔さしのぞきく〳〵、）「もしあなた、是ほどまで申しますのに、お疑ひがはれませぬか。エ、エ、金五郎さんえ、どうぞ御堪忍あそばして、お心を

直してくださりまし。もしお疑ひがはれましたら、たつた一言いつものやうに、堪忍するとやさしいお詞、お聞かせなすつて下さりまし。よ、よ」とぢがねあちはすむすめ氣の、金五郎にとりつきて、しばし泪にくれけるが、こゝろづきて泪をはらひ、あたり見まはし金五郎の、側に置きたる指添を、音せぬやうにそろりと拔くを、見るより金五郎ははねおきて、その手をしつかりおさへつけ、金「コレ何をする、あぶねへわ。人おどしの刃物三味か」見て、泪はらり、小さん「エ、お情ないそのおことば。女子だてらに人おどしの、こはい刃物が持たれませうか。そりやあんまりでございます。なんぼあなたが男でも、お情ないおどうよくでございませう。是ほど事をわけまして、お詫言を申しますに、たつた一言のおへんじもなく、しばらくお目にかゝらぬとて、そんなにマアわたくしが、憎くておいやになりましたか。そりやあなたでもございませぬ。たとひ女夫のかためはせずとも、一旦あなたのお口から、戯談におつしやつたかは存じませぬが、行すゑかけて女房にするの、二年や三年遠ざかつても、かはる心はないことの、短氣を出さずに便をまてのと、人ばつかりを嬉しがらせて、わづか半年あまりのあひだに、左樣お心の變りますは、あんまりきこえぬあなたのお心、どうでそのやうにおきらひなされば、なにを樂しみに今日が日から、むだに命をながらへませう。わたくしがなき後で、せめて一遍の御回向をと、申した處がおいやの私、とても夫も叶ひますまい。これ

もみんな約束ごと、いたし方もございませぬ」を、金五郎はさしぞへもぎとり、金「はやまつたことして後悔するな。それほどに深く思つてゐるなら、生ながらへて後の世まで、人の物わらひにならぬ樣に、にごりし名をもすゝぎあげ、生わかれた眞身の姉に、めぐりあうて名告りあひ、古郷に殘したわが親父に、孝行せうとは思はぬか。殊にそなたの身のうへは、此家へ賣られて來たことゆゑ、わがものならぬ主人の體、なりや今こゝで死んで見ると、主人も難儀このおれも、のがれぬ中で難儀をするわ。死は一旦にしてなし易く、生はかたしといふところへ、心づかぬか、コレ小さん」小三「エ、そんならあなたお疑ひが、はれましたと申しますのか。そりや本當でございますかえ」金「ウンヨ、なに虛をつくものか」小三「エ、嬉しうございます。夫でちつと氣が落付きました」たがひに心はとけながら、金五郎も男のいぢ、又酒肴をなんとやはちぐことばもなければいひつけて、唄妓幇間をよびにやると、程なくみな〳〵どや〳〵と來る。日八「へイ旦那、其後は一別以來、とんと見參つかまつりませぬ」金「ほんに目八公、さつき逢つたまんまだつけの」日八「ホイ、さうでありましたつけか」たいこ持「大しくじり、目八公それじやア、先刻以來といひてえのう」げいしやもとわ「オヤ旦那、お歸んなすつたと存じましたら、またこゝの穴へお這入なさいました子。オホ、、、、。オヤ、小三さん、是はおはやう。さぞおくたびれなすつたらう」とあいさつするに、小さんはけどちれじとなみだをかくし、小三「アイ、やう〳〵



今しまひましたヨ。まことに〳〵暑くつて、ぴつちより汗になりましたよ」トいひまぎらせどとかくにむねのどうきのをさまちねば、さしうつむいもく薫「ときにおいらんはまだ御入内がごぜえませんね。モシ旦那、やつがれがちよと、勅使に立ちませうか」トいふに金五郎わちひながち「ナアニ、足下の足を勞すまでもなしさ。ちつと見かけた山があるから、おいらんの處へ勅使もたてず御内意もしねへのよ」まとわ「オヤ〳〵旦那はおいらんに、かたい約束をなすつたぢやアありませんかえ。夫にマアそんな事を」傘「ナニサ、今に容子がわかりせえすりやア、眞名鶴も呼びにやるのす。まア〳〵そんな事は偖置として、諸事酒だ。唄へ〳〵」トぎよいにしたがふげいしやの長うた、

さうした黄菊としらぎくの、おなじつとめのその中に、外の客しのは捨小船、トうたいはやしで賑しく、しだいに銚子の數もかはれば、はやことくぜりのはやり唄、上がたうたで騒ぎ立つれど、とかく小三ばうきく〳〵せず。日八は小三の肩をたゝき、日八「コレ女房ども、なぜマアそのよに鬱塞いでをる。ちと浮々しやいのう。イヨ成田屋ア」小三「アレモウいやだヨ。おふざけでない」日八「コレサなぜそんなに、ぴんしやんぴんするのだ。人目が多くてはづかしいか。さうか〳〵。ハテさて初心な子ではあるぞ。おまへとわたしのその中は、知らねへものは、チエもし旦那」傘「大きにサの。左右この子は男が嫌えださうで、なんほ馴染のねへおれでも、ちつと

かそつとは何とか彼とか、のうおとわ」とわ「さやうさねえ、今日はどうかおしださうで、まことにふさいでお出なさるが、こりやァ何か譯がありませう」金五郎はわざとまぎらし、金「さうヨ、大かた色男が、俟つてゐるのをこつちへ呼んだで、それできつく鬱塞ぐだらう。どうで己がやうなのつぺらぼんは、女にやァ縁遠いから、兄弟分になるつもりだ。ちひせへもんぢやァ面倒だから、サァ〳〵是へついでくんな」ト大きなゆのみ（酒をつがせみにかゝると小さんはおさへて、）の「モシあなた、夫ではあんまり過ぎますぞえ」金五郎「なぜ、酒がすぎちやァわりいのか」小さん「わるいと申すぢやござりませんが、あんまりあがるとお身の毒、わたしがすけてあげませう。是もやつぱり勤の一ッ、みなさんわらつておくんなさんなよ」トぐつとのみほし、もく藏「イヨ濱々、ありがたし。玉藻前の再來め。これらがほんの、よしこの〳〵」日八「モシ旦那、わたくしが目のわりいせえか、小三さんはどうも、おいらんに似てゐなさるぢやァごぜえませんか」トいはれてふたりはむねにぎつくり、金五郎はわざとそらとぼけ、金「ナニ小三がカ、どれ〳〵」トわらひながら、小三の顔をさしのぞけば、小三はうれしさ恥かしさに、はながみでかほをかくす。金「ほんにのう、足下の目のせえでもねへ、己にもさう見えるやつヨ。他人のそら似とやらだ。のう小三」トいはるたびにわれどき〳〵。小三「どうでございますか、私なんぞが」金「ア、なんだかひどく醉がまはつた。ゲエイ引。コウ小三、水を一ぱいもつて來てくんな」トそのまゝそこへうちふすに、小三は下へおりてゆく。もく「旦那もし、モウたぬきでお逃げなさるチ。そりやァ近ごろあなたでも御ぜえません。モウ一ッ獻じませう。モシ旦那、およつちやァいけません。モシ旦那。これはしたり、モウおよつたさうな」日八「そんならモウそろ〳〵軍勢は、この陣を退かう。のうおとわさん」おとわ「さうさねえ」トいふところへ、小三はちやわんに水をくみきたり、小三「オヤ、旦那はおよつたかえ」日八「さやうさ、あんまりあがりつゞけだから、ちつとおよるがようごぜえやせう。そんなら小三さんおゆるりと」もく藏「しかし旦那と小三さんとさしむかひぢやァ、猫に鰹節泣子に乳で、ちつとあぶねへものだテチ」小三「オヤいやよ。わたしも今に下へ行くがチ。アノおとわさん、はゞかりながら、枕と搔卷をちよつと下へさういつておくんなさいな」もとわ「アイ〳〵合點でございますヨ」下へゆく。引ちがへて下女、かいまきと枕を持來り、下女「モシ枕をおさせ申しませうかえ」金五郎は、小三の膝をそつとつく。小三はこよろを呑こんで、小三「ナニ私が今、お起し申して上げるから、そこへ置いていつておくれ」下女「ハイ〳〵かしこまりました」下へ枕をおいて行く。金五郎は目を開いて、あたり見廻しまくらを取つて又ねころび、金「七段目の由良といふ計略だ。サアもつとこつちへよんな」ト小三の手をとり引よせる。小三「また誰かまゐりますよ」金「なんのこつたな、そんな野暮な者が居るものか。但しはいやか、嬉しくねへか」小三「あなたのお心がとけまして、嬉しいことはうれしいと、思ふにつけて又一ッ、心がかりが出來ま

した」金「そりやアマア何が。やつぱり誰にか義理だて歟」小三「人の事よりあなたのことさ。聞けば千年屋の眞名鶴さんと、深い中とおつしやること。眞名鶴さんは情を賣るが、勤のならひに引かへて、わたくしは又座敷ばかりの、はかない歌妓の身のうへゆゑ、たとひどのやうな譯あつても、彈妓は抱の女郎衆には、勝たれぬが廓のならはし。それゆゑなま中お目にかゝつても、今日より末はどのやうな、つらい憂目を見ませうか。知らねば知らぬで心はすめど、あなたと眞名鶴さんとの譯もあれば、やつぱり焔をもやすたね。悋氣は女子の嗜なれど、さすが女の淺はかに、よい貌ばかりはして居られず、どのよな事であなたのお名まで、出るやうな事でもありませうかと、今からそれがさきだつ劬勞、思へば悲しうござります」金「なんのこつたな、こりやアをかしい。そんな劬勞を今からすると、天井で鼠が笑ふによ。この廓の立だといつても、思ひこんだが男の意氣地、廓の掟をやぶつて見せう、といふはまことの意氣張づく。だが眞名鶴とおれが中も、ふかい馴染であらうかと、一寸聞いても腹が立つ筈、牽頭歌妓もくはしい事は、たがひに顔に出さぬから、惚れて通ふとおもつてゐれど、これにやァ深い樣子があるのヨ。といふ譯は外でもねへが、おめへが家出をしたことを、しらせの狀にがつかりして、この世に望も絶えたから、ながらへて居やうとも思はなんだが、又よく〳〵考へて見ると、實

に死んだか壯健でゐるか、又は外にいひかはした、男があつて逃げたのか、取とめた事もわからぬのに、己ばかり心中立てるも、あんまり愚痴な穿鑿で、末代人の物わらひ、殊に上方の親父をはじめ、此地の養父や養母に、苦勞をかけるは大不孝と、心で心を取直しても、おめへのことが忘られねへから、他の女にや心もうつらず、一日々々とくらすうち、友達にさそはれて、いや〳〵燈籠を見物に、來た日が丁度眞名鶴の、突出しの日でとり〴〵に、美くしいと評判するゆゑ、もしや少しも似てゐるかと、見れば迷かそなたにその儘、ハテ似た者もあるものと、客になつてよそながら、聞けばやつぱり都といふから、心ゆかしくなつかしく、初會の晩からうちとけて、たがひに身の上あかした處、似たのも道理、お鶴といつて、里にやられた六兵衞殿の、總領娘と聞いてびつくり、妹のお龜は斯々と、はなせばお鶴も共に驚き、泣きつかこちつ哀なはなしで、一ツに寐るは偖おいて、妹のそなたに心中立、帶紐とかぬさすがの氣性、おれとても又おめへの生死が、知れぬからとてその姉の、眞名鶴を抱いても寐られず、というて見捨るも本意でねへから、妹のよしみに客になつて、末ながく力にならうと、約束をして通ふゆゑ、深い樣子のあることを、誰一人知る者もなく、今日まで義理であそびに來たのヨ。ところが今度額重で、かゝへの藝者の小三といふが、淺間の踊ををどるといふが、廓中での隨一と、

とり〳〵に評判するを、守多屋の二階で眞名鶴と共に、見ればそなたに違はねば、どういふ事でこの廓へ、遠路を隔てて來てゐるかと、不審に思へば割間共が、男のために身を賣つたの、男と逃げたのなんの彼のと、いふを聞いてはこの胸が、はりさくばかりに腹が立つて、心の腐つた女の事、ふりむいて見るもいまゝしいと、あきらめて見ても凡夫のことゆゑ、やつぱり迷ふ心の愚痴から、なんでも實否を糺したうへ、ともかくもしやうとおもつて、みんなに知らせず歸つたふりで、取つてかへしてこゝへ來て、見ればそなたに違はねへが、顔を見るより物をもいはずに、逃げるから猶腹が立つて、今の樣にいつたのも、なんと無理ぢやアあるめえがの。かう心がとけるからは、眞名鶴を爰へ呼んで、姉妹の名のりをさせてやるぜ」大きにおどろきて小三は「エ、そんならアノ眞名鶴さんは、わたくしの姉さんでござりましたかえ。アノ姉さんで」金「さうヨ、正眞正銘のおめへの姉よ」小三「エ、そりやマア嬉しうござります。さうとは微塵もぞんじませんで、淺い女のこゝろから、いろ〳〵愚痴な恨ごとは、もつたいないとも、恥かしいとも、又嬉しいもやま〳〵なれど、なんの因果でこのやうに、姉妹ふたりが揃ひもそろつて、つらひつとめの流の身、はかないなりで名のりあひ、つもるはなしのうき事も、亡兩親が草葉のかげから、御聞きなすつたら、うかばれますまい。同じつとめのその中でも、騙されしとはいひながら、眞名鶴さんは親のため、苦界にしづむも恥でもない。それに引かへわたくしは、いたづら事の心から、御おんの深いおとつさんを、都に殘して此つとめ、我身でわが身の愛想もこそも、つき果てて恥かしい、面目もない身でござります」金「なるほど夫ももつともだが、ハテ何事もみんな約束、どうするものか、仕方がねへわな。そんな事を苦にやまねへで、久しぶりだから浮き〳〵して、ちつとにつこりして見せな。一體のろけるやうだが、眞名鶴とおめへと、よく似てゐるが、ならべて見たら又いちだん、おめへの方が美しからう」小三「オホ、、ホ、、そんな事をおつしやるけれど、姉さんとおまへさんは、どうも知れませんヨ」とにつこり笑つてよりかゝる。金「こいつァをかしい。姉さんとおれがどうしたと」小三「オホ、、、、、、どうもなさりはしますまいが、わたくしはどうも」金「なんのこつた、四字節略、といふとか」小三「ハイ」金「ハテおめへも疑ひぶかい。今もくどくいふ通り、ちひさい時からひとつに育つて、あんまりかはいがられもしなんだが、憎がられもしねへ中だに、おめへをすてて眞名鶴に、見かへる心があるものか」小三「それでも戀は思案の外、をとこの心は秋の空とやら、お疑ひまうすではござりませんが、アノ芝居でもいたします、お半長右衛門を見るやうに、思案の外の不義いたづら、長右衛門は年といひ、お絹といふおかみさんのある身分で、ひとり娘のおはんをば、身おもにさせたいた

づら者」金「コウ〳〵なにをいふ、そりやァほんの狂言だ。よし又實說のことにもしろ、なんのおれが水くさい、そんな心をもつものかな。朱にまじはれば赤くなると、おめへも僅なあひだ泥水をのんだら、たいさう手も見え足もはえたの。モウいよ加減にやきもちをやいて、久しぶりだから、もつとこつちらへ寄んねえョ」ト（十二字節略）八三「私はモウ、あんまり嬉しくつて、夢ぢやァないかと思ひますョ」金「ヘン、夢なら大方、はやく覺めればいよと思ふだらう」小三「又そんな憎いことを。夢ならどうぞ、いつまでも覺めずにをれば、ようござります」金「うそ〳〵。そしてモシ夢ならどうする氣だ」小三「どうもいたしませんが、お側にゐて」金「それから」小三「オホ、、、、、いやでございますョ」金「（三字節略）がいやか」小三「どうだかぞんじません」ト顏をあかくしてうつむく。金「ナニ知らねへ事があるものか、（二十八字節略）ト（二字節略）心もうちとけて、契りそめたる湯帷子、（十一字節略）かくて是より金五郎は、千年屋へ人を走らせ、眞名鶴を招寄せて、小三に對面させしかば、眞名鶴も頻に驚き、生れてはじめて姉妹の、まめで逢うたるよろこびに、嬉しさ餘る悲しさは、身儘にならぬ勤と勤、あぢきなき世とうちかこち、泣きつ笑ひつ夜と共に、互に憂さをかたりける。かくまで小三と金五郎は、淺からぬ中なるゆゑ、眞名鶴は小三の事、いふまではなけれども、千世に八千世も末かけて、不便と思ひ憐みて、お情かけて下されかしと、いと懇にたのみ

ける。偖も金五郎は、小三と契を込めしより、たがひにつのる戀中に、一日逢はねば氣にかより、二日も顏を見ぬ時は、心もすまず苦になるまで、一トとせあまり通ひけり。ころしも師走の半にて、雪は木ずゑの花とちり、寒さいとはぬ若い同士、雪見の船を堀へつけ、連をはづして金五郎は、ほろゑひ機嫌に只ひとり、額俵屋へ入り來れば、それと見るより若い者、「これは旦那、だいぶお遲うこの大雪に、よい御きげんで」金「雪のふる夜も雨の夜も、かよひくるわの大門をか。ハ、、、、。めつぱう寒くつてげん氣なしョ。十公いつものとほり飲込んだらうの」十吉「オツト合點承知之助、モシ今夜らはしつかりおあつたまんなせいまし。サァお二階へ」（いに金五郎は、はしごとん〳〵）奥の小座敷へうち通れば、（娘分のおきく茶たばこぼんをもち來りて）「オヤ金さん、よくいらつしやいました。お珍らしいものが澤山ふりましたねえ」金「さうサ、夫だから一ばい寒いの」お菊「よくこのマァおさむいに、あなたもよつぽど小三さんにやァ御信仰でございます子」金「御推察のとほりス。しかしおめへなんぞも容貌はよし、氣めへといひ、しん心をする男が多からう」おきく「オヤよろしく申しておくんなさい。なんの私のやうな者を、つめつてくれる人もございませんョ」金「うまくいふぜ。しつぽりと、しんねこではまぐりのお吸物をくてる人が、のうお菊さん」おきく「オホ、、、、、あんな、にくらしいことを、小さんさんにいつつけますよ」金「ハ、、コウお菊さ

ん、おめへに獻上しやうと思つて、持つて來た物があつたつけ」（とふところから、本べつかふのくわんぎくのくしを出してやる。）きく「オヤ〳〵およしなさればよいに、毎度どうもお氣の毒さまで」金「なんの、マアだまつて取つて置きなナ。お前のすきな、紀の國やのだから」きく「誠に有難うございます。ほんに釟菊がた、源之助のでございますヲ。どうも誠に風といひ、甲といひ、いつそ、好いた形でございますヨ」金「コウときに、小三は都合は能いかの。どこぞ、座敷へ出てゐるかえ」きく「イヽエ、なんでございますヨ、方々から口がかゝりましたが、なんだか氣色が惡いとやらで、みんなおざしきをことわつて、引こんでゐなさいますよ」金「さうか、どうしたの。又れいの癪だらう」きく「ナニ癪ではありますまいが、大かた此雪に、あたんなすつたので、ありませう。小三さんの氣色のわるいは、おまへさんの、お藥が、いつち、よくきゝますから、はやくしらせて參りませう」金「何のかんのと、嬉しがらせるのか。おめへもよつぽどさるものだヨ」（トきせるでしりをちよいとたゝく。）きく「オホヽヽヽ有がたうございます」（程なく小三はしづ〳〵と、梯子をあがつて出來るすがたは、何かなやましげに顔色さへも常ならず、あらひ髪なる島田髷、鬢のおくれ毛寐みだれしを、黄楊の小櫛にかきあげつゝ、おもき顔にもにつこりと、笑をふくむあいきやうは、俗に所謂いのち取、男ころしといふべけれ。金五郎は、あんかへあたり、寐ころびてゐる側へ、小三はよりそひ、さ

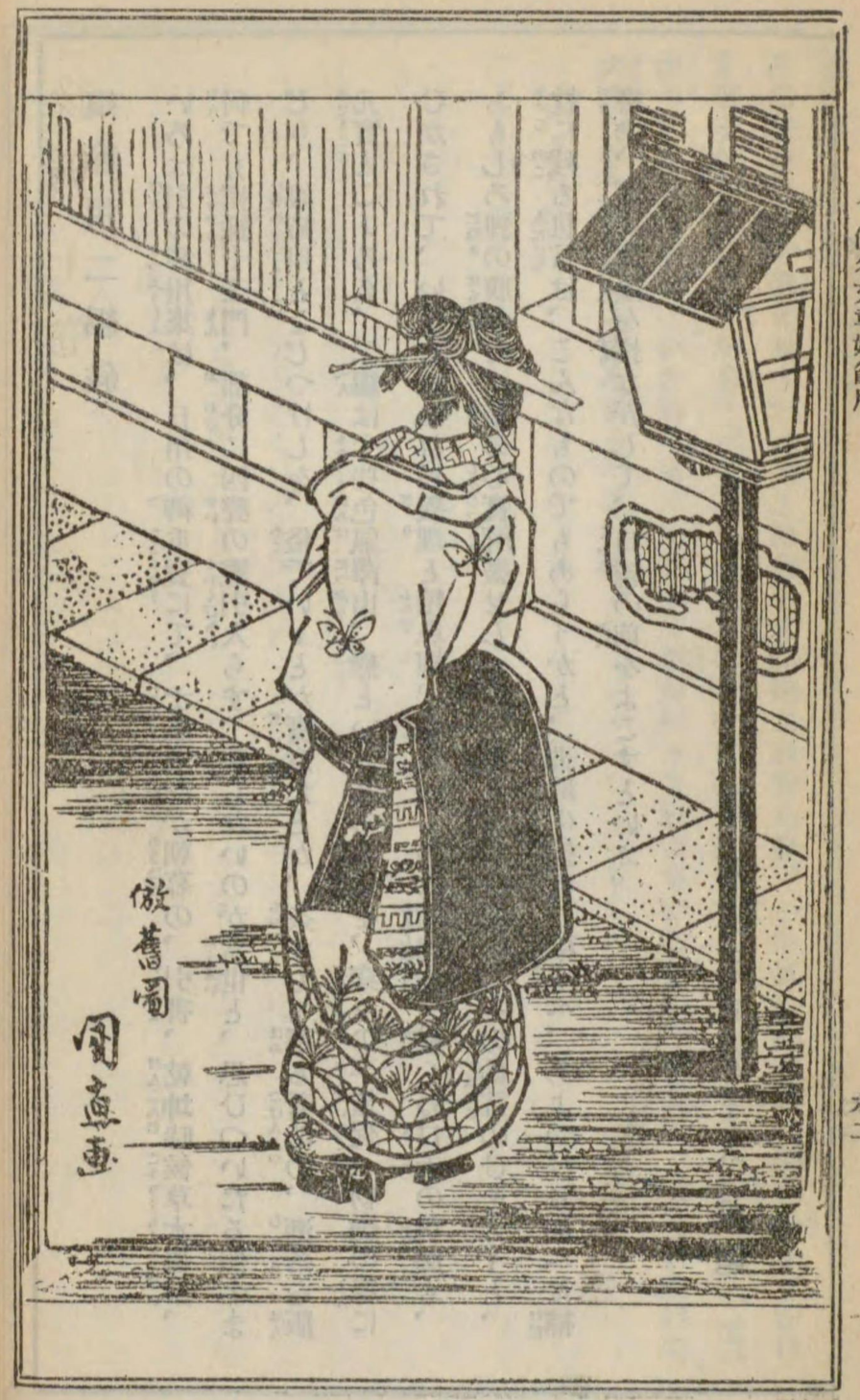
しうつむくを、（さしのぞきつゝ、）金「どうした、ひどくふさぐのう。雪の寒さにあたつたか、風でも引きアしねへかの」小三「風もちつとは引きましたが、そればかりではありません」金「フウ、夫ぢやアいつもの持病の癪か」小三「持病や酒の二日醉なら、ふさいでゐてもあなたのお顔、見れば直るは常の事、そんなことではござりません」金「ハテおつなことをいふもんだの。そうしてマアどういふことだ」小三「なんだかいつそ苦になつて、人にも言はれぬ心の苦勞」金「ナニ、人にいはれぬ苦勞が出來た。ハテナ、ハヽア、それぢやア大かた、なじみの客が身うけをするといふ事か」小三「なんのマア、そんなことが。アノなんでございます」金「なんだとは」小三「アノ、是でございます」（トはちへゆびをさしてはづかしさうにかほをかくす。）金「ハヽアそんなら、とまつたのか。アノ夜食のかたまりが出來たといふのか」小三「ハイ、それだからモウ、まことに苦勞でなりません」金「なんのことかとおもつたに、どうでかういふなかだもの、子の出來るのは覺悟のうへ、なにも苦にすることはねへ。さうしてとまつたのは、いつからだ」小三「モウ三月ほどになりますヨ」金「そりやア大さうはやかつたの。しかし身おもになるからは、いつまでつとめもなるめえから、追つけ春になつたらどうなりと、重兵衛に懸合つて、つがふして勤をひかせるから、必ずあんじることはねへヨ。マア〳〵何はともかくも、實をむすぶ目出たいことだ。こゝろ祝ひにこれからわつさり、

みんなをよんで酒とせう」小三「とは言ふもののこれからは、一チばいあなたに御苦勞を、かけませうかとそれが今から」金「くらうになるとは金ばかりの苦勞、つまらぬことを案じ立して、煩つてくれちやァ、いかねへゼ。サァ〳〵酒だ」トこれよりいつもの幇間藝者、大ぜいあげて大さわぎ、酒筵にときをやうつしけん。

娘節用二編敍

いろは引の節用集は、日用の御重寶にて、士農工商が朝暮の、引書、乾坤時候草木器財、何でも撰採十三門、部分に四聲の畫引入らず、和らかいのが當世と、思ひついたる假名まじり、娘節用とこじつけしを、俗でいゝとか實意だとか、茶かして稱る看的の、洒落を版元實とこゝろえ、二編は今些色氣澤山、戀といふ字の趣意を、穿々の平催促、初編の緣にひかされて、いやといはれぬ義理と犢鼻褌、書れぬものは新趣向、變らぬ口舌の魂膽も、おもしろ狸の腹合せ、帶の心實解盡せし、小三金五郎が偕老の、その約言のひそ〳〵と、枕に殘る仇言は、こんなものでもあらうかと、書肆の携せし稿本へ、ちよつぴり加へた補書の、序に朱墨を摺ながして、口繪の前をよごすといふ。

江戸　三文舍主人　戲題



後編上卷

第四回

こゝに又、千歳屋の眞名鶴は、妹の小さんに名のりあひてより、力になりつなられつして、いとむつましく萬の事をかたらひて暮せしが、かねてつき出しの時分より、さる有徳の商賈の、隱居がふかくなじみきつ、何くれとなく深切に、よく世話をなしたりしが、其年の暮眞名鶴は、かの隱居に請出され、向じまの邊に樂々と、世を送る身となりにける。されば月日の過つこと速にて、明る二月のころには、小さんははや五ッ月になりしかば、座敷へ出れば夜もふける、又は無理なる酒も呑むゆゑ、身のためにあしかるべしと、金五郎は額俵屋のあるじにかけ合ひ、些の手付の金をつかはして、ちかきうちには請出すほどに、夜の座しきへ出さぬやうにと、たのみにあるじ重兵衛も、さすがはすいな男ゆゑ、早速に承知して、いと深切にいたはりけり。かくて金五郎は、小さんを身請の金とゝのへんと、さまゞに思案したりしが、もとより大金の事なれば、養父文次郎へ、うち明けていふべきやうもなかりしゆゑ、いかにやせんと左や右に、ひとり胸のみ苦しめしが、やうゝに思案をめぐらして、京師の父文之丞かたへ、ひそかに言

送りけるは、この程三條の小鍛冶宗近の銘作にて、大小のはらひものあり、殊に燒刃世にすぐれし、わざものにて其價は、一包との事なるが、もとより兩刀は武士のたしなみ、何とぞ是を手に入れたきまゝ、内々にて右の金子、御かし被下候やうにと、ひたすらに懇望の文面ゆゑ、文之丞もいと祕藏なる、一人の子の望なれば、いつはりなりとは露しらず、まことと思へばわが子ながら、よき心がけ末たのもしく、本家を繼げども、兩親のあるゆゑ萬事身まゝにもならで、心にまかせぬがち、さこそあらんと子をおもふ、なさけある親心に、故なく百金の金をとのへ、爲替にて、ひそかに金五郎のかたへ送りけり。偖も金五郎はげいしやの小さんが、只ならぬ身となりしより、猶さらに可愛さいやまし、はやく勤をひかせんと、おもへど身請の金とゝのはねば、是非なくみやこの父のかたへ、刀もとむる金なりとて、いつはりて書狀を送りしかど、かの地で金とゝのふや、それさへ恃にならざれば、とにかくに心安からず、みやこの便を俟つうちに、しだい〳〵に月かさなりて、小さんははやこの月が臨月になりしかば、額俵屋の重兵衛夫婦も、深切なる心から、欲をはなれて、小さんをいたはり、殊に金五郎の親もとも、ゆたかなること知るゆゑに、手付の金を取りしのみにて、殘の金はうけ取らねど、さらに危むこともなく、産の手當を何くれと、のこる方なくまめだちて、安産をこそいのりける。金

五郎はかくまでも、額重夫婦の深切の、ひとかたならねば少しもはやく、身請の金をわたしたく、おもへどそれも自由ならず、ひとり胸をぞ苦しめける。はや月みちて小さんは、玉のやうなる男子を産みしかば、金五郎はさらなり、額重夫婦も、よろこぶこと大かたならず、その名を金之助と名づけしが、兩親に似てうつくしければ、金五郎は日ごろにまして、小三金之助の愛にひかされ、とかくそは〳〵氣もおちつかず、内に居ることは稀にして、額重へのみ行くものから、白翁は惣領の、文之丞が不身持にて、大かたならぬ苦勞をしつれば、祕藏孫の金五郎、いたづら者になりもやせんかと、はら〳〵思ひゐたりしに、近きころは外を内、内を外と居つかぬも、はじめのほどは若ものの、ならひとさのみ咎めもせず、打捨てておきけるに、漸々につのるゆゑ、かくては身の爲あしかるべしと、おもうてある日わが居間に、孫娘のお雪に琴を彈かせ、たばこくゆらし聞きゐたるが、きせるをはたいて、ゆきにむかひ、「コリヤお雪よ、モウ琴もよいにしやれ。この頃は大ぶん上達したが、ずゐぶん身にしみてならうたがよい。わしもおのしが琴をきいて、大きにうさをはらしました。年がよるとおつなもので、外に何もたのしみがないから、お念佛でも申したり、おのしが琴や三味線を、きくのが何よりよいなぐさみぢや。イヤそれはさうと、アノ金五郎は内にゐるのかの」トとはれてゆきは琴のつめをはづしながちにこやかに、「ハイ お兄さんは、お部屋にお出あそばし

ました。なんぞ御用でございますか」白「ヲヽ、さしたる用もなけれど、私が今茶を入れるから、ちとはなしに來いと呼んで來やれ」ゆき「ハイ〳〵かしこまりました、お呼び申して參りませう」

ト琴をかたよせ出て行く。引ちがへて金五郎は、ぢゝの白翁が居間に來れば、「オヽ、金五郎か。サア〳〵もつとこつちへ來て、茶が出來たから一ツ呑みやれ。茶菓子はさいはひ御前から頂戴したのをとつてある」ト いつにかはちぬまめ〳〵しさに、金五郎も茶をのみつゝよもやまのはなしのついで、白「コレ金五郎、おぬしも今が血氣のさかり、老人のいふことは面白うあるまいが、マアよう聞きやれ。おつなもので、子をおもふは親の常で、貴い賤いの差別はないもの。さきだつていつの頃でかあつたか、上方から狀が來た時、あちらは一統風がはやると、さういうてよこしたも、やつぱりおぬしを案じるゆゑ、氣をつけてくれとの事であらう。もとよりおぬしもひとりの親、又兄弟とても外にはなし、もちろん文之丞はじめおぬしまでも、隱してはゐるなれど、お龜とやらいふ容貌よき娘を、親知らずにもらうて育てあげ、たがひに兄弟のやうにして、憎からぬ中であつたとやら。そのお龜でも側にゐたら、又まぎれにもならうけれど、それとても行がた知れず、生死のほどもわからぬと、サ、ちらりとおりや聞いたぞや。何をいうてもこちらのお雪は、まだ一向の子どもなり、内にゐても面白くあるまいが、今では文之丞もおぬしをば、こちらへ貰ひうけてからは、お龜も居ぬゆゑたのしみに、おもふはコレ、そちばかりぢやから、わるい耳をきかせぬやうに、せにやならぬが若いうちは、利發なものでも些づつは、身にあやまりの出來るもの。もつともはや遊びなどは、めん〳〵の得手勝手ゆゑ、暑さ寒さも何ともおもふまいが、また内ではさうはない。アこの寒いに出てゆきをつたが、風でもひきそへねばよいが。夜がふけてかへらねば、寐てゐてもろく〳〵ねられず、人の足音のするたびたびに、歸つたか〳〵、門をしめたで這入られぬのかと、引立耳をして聽いてゐるぞや。ずるぶん折ふしは付あひなどで、あそびにも行くがよンサ。若いうちの事なれば、なんでもするなでは無いけれど、此頃はあまりに嵩じたぞや。それがつのると、はて〳〵は、モウどうなつてもまゝの川と、身のをさまりもつかぬやうに、なるものだからたま〳〵は、内にゐてみんなの氣も、ちつとは休めるやうにしやれ。このくらゐな事はいはずとも、承知してゐるであらうが、募らぬやうにしたがよい」ゐ丸あたま、なでつゝことばやはらかきト かたいやうでもどこやらにかどのとれた意見に金五郎は一言半句の、かへす言葉もなかりしが、金「だん〳〵の御意見心魂に徹しまして、申し上ることばも御座りません。これまで種々に御苦勞を、かけましたは、重々身のあやまり、おゆるしなされてくださりまし」トあやまり入りたるをりかちに、おゆきはまたもいできたり、ゆき「モシ、おあにいさまへ、アノ上方からお使がまゐりましたヨ」ト聞くより金五郎は俟かねたる、便にとびたつ嬉しさを、知られじと胸におしかくし、金「ナニ上が

たから人が來たかえ」トいふに白翁も「オヽなんぢや、上がたから便があるか。今も今とてうはさをした處、早う金五郎行つて見やれ」トすくむることばに、金五郎はいそ〳〵として玄關に立出で、使に逢うて狀うけ取り、ひらきて見れば、刀をもとむる金一包は、使のものに、持たせつかはし候へば、あらためてうけ取申すべしと、こま〴〵といひ送りつ。猶其書狀の封じの奥より、隱居白翁への書簡も出しかば、その狀は白翁のところへさし出し、かの一封の金をうけ取り、おのが部屋に入りて返書をしたゝめ、使の者はかへしけり。金五郎はかの一封の金を得しかば、飛たつばかりによろこびて、すぐに懷中し、立出んとして、中の間をみれば、お雪はひとり一心に、人形の著物を縫ひ居るすがたは、今年十四になりけれど、よろづ内端にしてあどけなく、容貌かたちも美くしく、心だてさへ優しけれど、小さんに比べては劣るなるべし。金「コウお雪ばう、それはこのあひだの人形に、きせる著物か」トとはれておゆきはるみをふくみ、ゆき「ハイ、あなたにいたどきました、人形のでございます」金「それはいゝがの、おれは今出て行くから、おぢいさんやおつかさんがお聞きなすつたら、今仲間からよびに來て、まゐりましたと、いゝ子だからさういつてくんなよ」トいへばおゆきは笑ひながら、「ハイ〳〵、かしこまりました」金「なぜそんなに、笑ふのだ」ゆき「それでもお仲間へお出あそばしたと申しましても、おかへりがお遲いと、うそだとお思ひあそばしませう」

金「なにさ、あとでは又どうでも、言ひやうがあるからいゝわな。案じずにさういひなよ」ゆき「ハイ、さやうならおはやく、お歸りあそばしまし」トいふに金五郎は出てゆく。ちがへてお雪のうばは立いでて、引うば「おぢやうさん、何をあそばしますの」ゆき「これかえ、これは此あひだおあにいさんに、いたどいた、人形の著物だよ」うば「もういゝかげんにねゝ樣いぢりもあそばしまし。いつまでもそのやうに、ねゝ樣ばかりかはいがつて、どうしたものでございます。今に若旦那さまの奥さまに、おなりあそばすお年でから」ゆき「オヤ、乳母はいやなことをおいひだよ。あれはおあにいさんだものを、そんな事はなりません。さうしてもう何所にか、奥さまがお出だよ」うば「それだからあのやうに、お内にとては片時も、お出あそばす空はなく、それといふもおまへさまが、もうちつとおとならしくあそばせばよいに、ほんのねゝさまで、若旦那の女ぐるひをあそばすを、知らぬ顔でお出あそばすから、私はもうじれつたくつてなりません」トいはれてお雪は氣の毒さうに顔をあかめて猶あばひ、ゆき「それでもアノおあにいさんは、おぢいさんや皆さんに、まことにお心づかひをあそばすから、おかはいさうだものを、ちつとは御保養のおあそびを、あそばしてもよいではないかえ」うば「それは又しれた事。あなたはお家のお娘さま、若旦那さまはお血すぢでも、御養子でございますもの、お心づかひもあそばす筈を」トお主おもひの岡燒もち、おゆきはにこ〳〵

わらひながら、「オヤ〳〵、そんな事をいふと叱られるよ。上がたの伯父さんの、まことのお宿は爰だから、おとつさんよりお兄さんが、大切だとつねぐ〵から、おつかさんがおつしやつたよ」ト子ども心にも金五郎を、大事にするぞいぢらしょ。さても金五郎は、件の金をたづさへて、飛ぶがごとくに額俵屋へ至りて、あるじ重兵衛に逢うて、小さんの身の代をわたして、これまでひとかたならず、世話になりしを厚く報い、夫よりたどちに青柳橋のほとりなる、粂川といふ、料理屋の裏に家をもとめ、造作までも綺麗にして、この家に小さん金之助をひきとり、乳母をかゝへ婢女をおきて住まはせけるに、小さんはゆゑなく、産後すら〳〵肥立つものから、小さんはつくぐ〵行すゑを、考へ見れば金五郎も、養子の身にて、この身をはじめ、金之助や乳母下女まで、はぐくまんこと大ていならず、所詮わが身はおちぶれて、一旦廓の藝者して、人にも顔を見しられたれば、今さら斯してくらすとも、誰知らぬものもなければ、女の手わざにはかばかしき事も出來ねば、またもとの藝者となれば馴れし事ゆゑ、さのみに氣ほねもをれぬわざ、三筋の糸の世わたりも、藝は身を助くると、たとへのふしも金五郎が、せめては心やすめなりと、思へば金五郎へ我胸を、うちあけてものがたれば、今更一旦うけ出せし、小さんをふたゝび容へ出さんは、人のおもはく世のそしりも、口惜しくはおもへども、萬事心にまかせぬゆゑ、せん方なくて承引きければ、小三は是より又もとの、かへり花さく唄妓となりて、客の相手に出しかば、容貌もすぐれ、座もちなれば、引手あまたにいよ〳〵はやり、内に居る間はなかりけり。頃しも霜月のすゑつかた、小さんは金之助をかきいだき、その身もこたつへ横になり、出もせぬ乳をふくませて、ねんころ〳〵と鼻うたを、うたうて寢かしつけてゐる。そのかたはらに乳母のおちゝは、火鉢に煮花をこしらへながら、金之助の頭巾を縫つてゐる。

（かゝるところへ金五郎は、しやうじをあけて入りきたるを、小さんは見てかほをあげ、）

「オヤ入らつしやいましたか、さぞお寒うござりましたらう」

金「さうよ、なんだかひどく冷えるのう。ばうずめは又ひる寐か」

（トいひながちは火燵へあたりて寐ころべば、小さんはかた手にて煙草をすひつけ、金五郎に田しなが、小三「もしおまへさんエ、アノ廓から、最中のもらつたのがありますが、アノお雪さんにあげましては惡うございますかえ」

金「ナニわるくもねへが、あんな大きな者にやるよりは、取つておいて坊にやるがいゝ」小三「それでもこの子には、あんまり甘くつて惡うございます。ほんに甘露梅もありましたから一緒にして、おぢいさんの所へでもあげませうか」金「ばかァいひねえ。石部金吉鐵かぶとといふかたい内へ、花街から貰つたものが出されるものかな」（トいはれて小三）「オホ、、、ほんにさうでありましたね。それはさうとアノ、お雪さんは、さぞお美しくおなりなさいましたらうね」金「さう

さ、まんざらではねへけれど、まだ一向のねゝさまなり、どこのか人とくらべては、とても及ばねへ論なしよ」（トゆびのさきで小さんの顔をちよいとつく。小さんは笑ひながら、）「またそんな憎らしいことを。それでもモウ女といふものは、子もちになると色氣もなくなり、つまらぬものでありますねえ」金「ちけえねへ。色氣がなくつても、汁氣があれば澤山だ。のうばゝア」（トこえをかくればうばもふきだし、）うば「オホヽヽヽ、ほんにさやうでございます。私の樣になつてはいけませんが、御新造さんなどはこれからが肝心でございます」小「オヤいやよ。それでもおつなもので、子どもにかまけると、いくぢなくじゝむさくつて、わが身ならら婆アじみたと思ふやうだよ。それだから座敷へ出ても、お客がみんなわたしの事を、子もち山姥だなんのといふから、わたしもそれをやつぱり通して、かういふ唄をうたつてやるよ。

わかい時は二度はない、有頂天までのぼりつめて、親に苦勞をかけるはばかよ。子をもつて知る親の恩ほど深いものはないわいな。

たとへ金銀で、富士の山つむとも、子にや易られぬ。ほんに世の中に、子ほどかはゆいものはない。

と唄ふゆゑ、中にはむねきなお客は、てめへのやうな者にやア、ろくな子は出來やァしめえ。

子といふものは屁をひつても、できるのなんのと、ぢらす人があるから、わたしも又まけぬ氣で、味噌をあげるぢやァないけれど、かはいゝ人と大骨を折つてこしらへた子だから、出來合の子とはちつと違ひますといひますから、色氣がなくつていゝといつて、呼んでくださるからをかしいのサ」金「ヘンとんだからくりのいひ立だ。ほんに此頃ぢやァ、めつさう口が達者になつたよ。道理でおれも言ひまくられる」（トいひつゝねてゐる金之助が、みゝをひき鼻をつまむゆゑ、金之助は顔をしかめながら目をさます。）小三「アレまたそんな惡戯ばつかり。とう〳〵起して、おしまひなすつた。せつかくよく寐かしつけましたものを」金「いゝわな、あんまりひる寐をすると、夜になつて目をさますから、やかましくつて寐られねへ」小三「おまへさんではあるまいし」金「ナゼ〳〵」小三「なぜもよくできました。あなたはいつでも午時までづつおよつてはお起きなすつて、宵ッぱりをなさるものを」金「ナンノ、むりに起しても、もう寐あきた時分だから、アレ機嫌のいゝ事を見な。己が顔を見ちやァ、にこ〳〵わらふぜ。いゝ子か〳〵、いゝ坊ちやんだぞ」（ト金之助の顔をなでて、）「こりや、おつかァのやうに、うは氣になつちやァいかねへぞ」小三「オヤ、けしからねへ。私よりあなたに似たら、親に世話ばかりやかせませう」（トいひながらだいどころのかたをむいて、）「お竹や、何をしてゐるか。坊が起きたから、ちつと抱いておくれよ」下女「ハイ〳〵。サア〳〵坊さんお出なさいまし。アノお乳母どん、わたしやァ今お坊さん

をつれ申して、惠迎院へ行つて遊ばせ申すから、アノ歯入やが來たら、ながしの下駄の歯を入れさせておくんなさいま」うば「アイ〳〵。夫はいゝが、お泣きなすつたら早くお歸りよ。お怪我をさせ申さねへやうにおしよ」下女「アイ。そんなら行つて參りませう」（トお竹はそと〳〵出て行く。引ちがへて女がみゆひあらひがみのおたぼが來るを見て、）小三「オヤおたぼさん、丁度よい間だよ。サアおあがり。坊を今あそびに出したから、この間にちよつと結つておくれな」たぼ「それは丁度ようございますね。オヤ、旦那お出なさいまし。この間は間ちがひまして、さつぱりお目にかゝりません」金「ほんにサウサ。なんだか急に寒くなつたね。モウこんなに火燵と首つぴきをするやうになつちやアいけねへのサ」たぼ「オヤおまへさん、そんな事をおつしやるが、こたつといふものは能いもので、ちよんの間のたのしみがありますよ。ねえ小三さん」小三「なんだねおたぼさん、おつな事をおいひでない、人の鼻をこするやうな。わたしらアそんな事はきらひサ」金「コウおたぼさん、おまへもよつぽど好物家だね。なるほど烏渡いちやつくには、まんざら悪くねへやつさ。（九字節略）出來るやつがいくらもあるものさ」小三「もし、をかしくもないそんナはなしは、もうおよしなさい、氣障でありますわね。サアおたぼさん、今に煮花ができるから、その中結つておくれなねえ」（トこれよりおたぼは、小三のかみをゆひながら、）たぼ「小三さん、昨日はアノ、どこへお出なすつたえ」小三「きのふかえ、きのふは舟で酉の町へ行つたわね。夫だからいつもより髪がだいなしになつたのサ」金「ナニ、昨日は舟へ行つたから髪がこはれたと。そいつはちとあやしい」おたぼ「オヤ〳〵、旦那が何かおつしやるよ」小三「又おやきがはじまりさ。めづらしくもございません」金「これがやけねへでどうするものか。番人のねへ生寶だもの、どんな人が釣るか知れやアしねへ」小三「オヤ、とんだ寃をうけるもんだ。たとひどんな釣人があつて、餌をどん〳〵まけばとて、曲つた針にやアかゝりませんよ。はゞかりながらわたくしは」金「ヘン、とんだ所でりきむやつよ。あかえが芝居をするやうに」小三「ばアやア、お茶はまだ出來ぬかえ」うば「ハイ、やう〳〵できました」小三「そんなら一ッあげやう」（ト金五郎のはつぽをとりて、おたぼにもついで出す。）たぼ「是ははゞかりさま。モウおかまひなさいますな。ほんに旦那え、このごろに顔みせはどうでございます」金「わたしも此間からさう言つてゐるのサ。小三も見てえといふから、一緒にお出な、四五日のうちに」たぼ「それはありがたうございます。たのしみにいたして居りますよ」（トいふところへくめ川のわかいもの入り來り、）「モシ小三さんえ、このぢうのお留守居衆が、夕方行くから口をかけて置いてくれろ、といつてめえりましたよ」小三「オヤさうかえ。けふはお店の衆のやくそくもあるが、こつちは夜がふけるから斷つて、おまへの方へまゐらうよ」わかいもの「そんならのちほど、御案内をいたしませう」（トわかいものはたちかへる。）たぼ「どれ、わたくしもまゐり

ませう。さやうなら小三さん、又明日」トあいさつして、髪ゆひおたほは歸りけり。

後編中卷

第五回

小三は粂川より口がかゝりしゆゑ、鏡臺取出し身まじひの、紅粉おしろいも深くはせず、ちよつと化粧ひて櫛笄、前ざし一本うしろへは、銀の細打ばかりさして、いきな粧飾のいやみなし。金五郎は手枕して、こたつにあたり寐いりし樣子に、小さんは戸棚よりかいまきを出しそつとかけて、枕をあてがひ、そこらをかたづけ金五郎の、羽織をたゝんで戸棚へしまひ、火鉢のそばへすわり、煙草を一ぷくのみ、そばにある淨るり本を手にとりあげ、讀みながら乳母とはなし、小三「コウばアやよ、こんなことを言つたらまた、つまらぬ事とわらふだらうがの、水のながれと人の行すゑ程、定めないものはないよ。この淨るり本の三勝を見るやうなわたしの身のうへ、よく似てゐるが若しひよつと、浮世の義理にからめられ、どんな別にならうも知れず。マアさうなつたらどうしやうと、外に苦勞はないけれど、そればつかりが案じられて、人の知らぬ胸をいためるよ」（ト身の行すゑをくりかへし、ほろりとおとす。トしづく、乳母はそばから打けして、）「アレ、またしても〳〵、そんな役にもたゝぬ事を、おつしやるものではござりません。その三かつの身のうへは、それはほんの戯作

もの、今時縁切だのなんのかのと、芝居かしやれ本ではあるまいし、どうしてそんな事がありますものか。たわいもない事ばつかり」小さんも胸をなでおろし、「ほんにさう言へばそんなもの、作物とは知りつゝも、身につまされて繰言いふも、やつぱり女のあさはかゆゑ。金坊といふ子まであるものを、御本妻にはなられずとも、末のすゑまで添とげやうと、思はないでなんとせう。もしもの事があつたらば、それは又その時のこと。もう〳〵案じまい〳〵」トはなしなかばへ絲川より、むかひの人がきたるに、「夫ならばァやァ、行つて來るから氣をつけておくれよ」トいひながら、ほんにアノ、坊が歸つて、わたしが居なかつたら、又おとつさんをいびるだらうから、アノ、蠅帳にうづら燒があるから、あれをやつてだましておくれ。わたしが又かへりに、何ぞお土産を買つて來るから。そして若旦那がお目がさめたら、大方お茶漬を上らうから、鍋燒でも取つてあげておくれ」トなべやきとりぬけ目なき、女房かたぎぞぁちはれける。かくまで夫やわが子をば、大事にかける心から、座しきへ出てもとにかくに、内の事のみ案じらるれど、勤といふ字は是非なくも、いやな客にも機げんとる、心の中ぞつらからめ。かくて小さん金五郎は、たゞ金之助の愛におぼれ、他事なく暮すその年も、くれて又來る春がすみ、たなびく空もうらゝかな、彌生なかばの事なるが、金五郎は仲間の者にさそはれて、向が岡の花見もどりのほろ醉に、みな〳〵舟にうちのりて、青柳橋まで來りしが、こゝより上

りて金五郎は、人々にわかれて、可助といふ供の男を引つれて、粂川の前へ來れば、乳母は金之助をいだきつゝ、かくと見るより遠くから、うば「オヤ〳〵おばうさん、アレ、おとつさんが入らつしやいましたよ」金五郎「オヽ坊か、ばゝァにだつこしていゝのう。おつかァは内にかえ」うば「ハイ、お宿でござります。サァおばうさん、おとつさんにおじぎはえ。ヘイ御機げんようと。オホヽ、イエ〳〵、おとつさんにだつこはなりません。もうまつくになりますから、お寐んねがようござります」金五郎「金坊や、おとつさんはおつかさんのとこへ行つてお乳をのむよ。あばあばだよ」トいふに金之助は顔を見て、「おとつちやん、いや〳〵。おつかちやんのちゝ、いや〳〵」うば「ヲヽさやう〳〵、おつかさんのお乳はお坊さんの。おとつさんのではござりませんねえ。おとつさんは御きげんゆゑ、おじらしなすつていけません」金五郎「ハヽヽヽヽ、坊やのばかや〳〵」トからかひながら内へゆき、見れば小さんは、今座敷よりかへりしまゝ、三味線筥によりかゝり、物思はしげなる顔つきに、金五郎はそばへより、「小さん、どうぞしたのか、おつな顔をしてゐるのう」トいはれてにつこり笑ひながら、小三「いゝえ、どうもいたしませんが、今座敷から歸りましたのサ。そしてあなたは、どこのお歸りでござりますえ」金「ナニおれか、拙者めは今日仲間の者の付あひにて、よんどころなく向島へ御遊覽と出かけて、鯛七へおしかけた處が、女子どもが大勢出て、ソレお手をとれ足を取れと、めつたむしやうに

そやしたて、それからなんでも大ざかもり、さいつおさへつ唄へや彈けや、
じれて迷うて、まようてじれて、くぜつも痴話も屏風の外へ、はふり出したる一ッ夜著。はやしさつさおせ〳〵堀までつけろ。あとは野となれ山となれ。床とつたら寐てかへろ。雨ふつたら居つゞけだ。などと唱ふからたまらぬて」小三「道理こそ、マアきつい御機嫌。それはさうと、あなたは京を御立の時、おとつさんのおつしやつた事を、覺えて御出あそばしますかえ」
金「是はまた改つたおたづね、親父のをしへを守れば、外の女に目もふらず、たつた一人を守つてゐるから、何もハヤお案じなさる事はござなく候サ」小三「オホヽヽヽ、そのおほしめしなら嬉しいけれど、今では日かげのこの身ゆゑ、おぢいさんや皆さんが、このやうな事とは御存じなく、只あなたがわがまゝで、放蕩をあそばす事と、思召すでござりませうから、お宿のお首尾がお大事ゆゑ、あんまり御酒をあがりますと、あなたのお爲になりますまいかと、それが苦勞でなりません」ト思ひにあまるしんみのいけん、心に憎しとおもはねど、一盃きげんの金五郎、「ア、百も承知二百もがつてん、お爲ごかしのその意見、聞きたくもねへ、耳がけがれる。酒をあんまりあがりますと、あなたのお爲になりますまいッ。ヘン酒を呑まうがのむめえが、己が口だから勝手だによ。大キにお世話お茶でもあがれッ。そんな理くつらしい意見をいふのは、おほか

た外におつりきな、面白えはなしでもあるからだらう」小三「オヤ、久しいものでありますよ」
金「ナニ、久しいなじみがあると。それだからなんのかのといつて、はやく歸さうと思ふのだな。よし〳〵、そんなに邪魔になるなら、歸つてやらう、とめるな」トしれるかんしやくはひふきへ、きせるとん〳〵八ッあたり。小三はいつもの事と思へば、わざとそしらぬ顏をして、「お腹が立つならどうでもなさい。たま〳〵はお早くお歸りなさるも、御孝行でござりませう。オヤ、何だか風が變つたやうだ。ア、雨がふらねばよいが」トさからはぬゆゑ金五郎はひ立あがり、金「ナニ、御孝行でござりませう。お香々でお茶づけがきいてあきれらア。雨が降らうが降るめえが、歸るに四も五もいるものか」トむりなくぜつも酒のわざ、我儘氣まゝをいひちらし、じれつゝ内へ歸りけり。乳母はこの時金之助をつれて、歸りかゝれど、金五郎が不機嫌ゆゑに、次の間にてあそばせて居たりしが、やう〳〵こなたへ出來り、「御新造さまえ、今日はおとつさまの御機げんが、お惡うございましたねえ。何のお腹だちであのやうに、お怒りなすつたのでございますえ」トいへば小さんは「ナニサ、いつでもあゝだわな。御酒をあがるとなんだの彼だのと、わたしに無理ばつかりおつしやるのサ。たまにははやくお歸し申さないと、あなたもいろいろ譯あるお身ゆゑ、おやどの御首尾が大事だからさ。お内では心づかひもなさるだらうし、私にはわがまゝの、いひどころだとお思ひなすつて、いつでも〳〵あの通り。それに此ごろで

は日にまして、だん〳〵御酒が上るから、まことに苦勞でならないよ。わたしは何といはれても、つねから御氣性を知つてゐるゆゑ、御酒をあがつて御きげんの時は、その氣でゐるからよいけれど、やつぱりお雪さんにもあの通りに、無理ばつかりおつしやるかと、蔭ながらそれが案じられるよ。わたしも女の情だもの、いとしとおもふお方をば、つれなく言ひておかへし申すも、浮世の義理や二つには、お身のためを思ふゆゑ、心にもない事などを、いひ出すまでの胸のせつなさ、すゐりやうして」トなみだぐむ。こそと目をしばたゝき、うば「御尤でござります。譬にもいふ通り、一ッかなへば又二ッと、何をいうてもまかせぬうき世、十分な事はござりませぬもの。いろいろ御苦勞あそばすも、因緣とやらでござりませう」トしめりがちなるはなしなかば、へ、くめ川のれうりばん表より、「オイお竹殿、ちよつと爰をあけてくんな」下女「アイ〳〵、佐介どんかえ」トしやうじあければ、佐介はひろぶたへ、いろ〳〵酒のさかなをのせ、くちこみて、「モシ旦那はどうなさいました」小三「オヤ佐介どん、旦那はもうおかへりだよ」佐介「ホイ、そいつは大しくじり。けふはなぜ早くお歸んなすつたヲ。さつきお出なすつたのを見とどけたから、せつかく、くめん十めんして、旦那のお好な一口ものを、仕込んで持つてめえつたのに」小三「オヤさうかえ、それはマアよく忙がしいのに、氣をつけておくれだ。うれしいヲ」佐「なんにしても旦那がお出なさらねへぢやアはじまらねへ。そんなら此鉢のものや何かは、旦那へのこゝろ

ざしだから、置いて參りませう」トさかなを置いていでてゆく。さても金五郎は、酒がいはする癇積の、腹立まぎれとがもなき、小三につらくあたりちらして歸りしが、根もなきくぜつの事なれば、又あはねば氣になるゆゑ、四五日たちて晝すぐるころ、小三のもとへいたりしに、小三は留守にて乳母ばかり、針仕事をしてゐたりしが、「オヤ若旦那さま、此ごろはまことに〳〵お遠々しうござります」金五郎「さうサ、此間はちつと用が多くつて、さつぱり出られねへやつよ」うば「アノ、あなたがいつそこのあひだ、お腹をお立ちあそばして、お歸りなすつたから御新造さまが、まことにお案じなすつてお出なさります」金「ハヽヽヽヽ、さうだつたかの。おれはさつぱり知らなんだ。アノ、今日はどこぞへ行つたか」うば「ハイ、今日は鮫清に、なんとやらの會がござりまして」金「フウ、坊はどうした」うば「お坊さんは今、お竹がどこへかおつれ申してまゐりました」金「さうか。おれを忘れはしねへかのう」うば「オヤ、とんだ事をおつしやいましな。三日や四日お出なさらぬとて、お忘れなさるものでございませうか。今朝なども、いつそおとつちやん〳〵と、あなたの事をおつしやいました」金「ハヽア、子どもといふものは、どうも憎くねへものだの。アノ、この間來たとき、ちつと頭にふき出がしたやうだつけが、そんなに殖えもしねへかえ」うば「ハイ、お頭のでござりますかえ。そのやうに殖えもなさりません。それはさうと若旦那さまえ、こんな

事は申すまでもござりませんが、御新造さまが明けても暮れても、あなたの事のみお案じなすつて、それは〳〵御苦勞のやすまる間とてはござりませんから、その御心根をおもひやつて、あなたもどうぞ、あんまりお氣をおもませあそばさぬやうに、なすつてくださりまし」金「イヤモウおれとても、憎しとおもふ小三ではなし、殊に子まで出來たのに、少しはおれの手だすけと、いやな座しきの勤をするのは、なみ大ていの女などは、なか〳〵及ばぬ心だてとおもへば、一日片時も勤をさせる氣はねへが、足らはぬがちゆゑ是非もなく、苦勞をさせるが可愛さうだ」（トほろりとぬとす男泣、うばも泪にくれにけり。）折から粂川のわかいもの清介、料理ばん佐介入り來り、「ヘイ旦那、このあひだは」金「オイ清介に佐介公か。さアあがんねえ」用人「ヘイ御めんなせえ」（トふたりながらそば〳〵來り、）清「もし旦那、此間はねから入らつしやいませんね。きついお見かぎり。又外に何か、おもしろい世界でも出來ましたか」金「とんだ事をいふ。おもしろい世界どころか、いつも眞面目でさえねへやつよ。ちつとおもしろい世界へ、案内してもらひてえのう」清「是はまためいわく千萬。ハ、、、、」佐介「旦那、この間ヲ、あなたがお出なすつたのを見とどけまして、ちよつぴり趣向してめえりましたら、もうあとのお祭で、大きに鼻をあきましたのさ」金「ハ、アさうだつたか。そいつア殘念だつけの。しかしその心意氣がありがてえ。そんなら今からはじめやう」（ト是よりいろ〳〵看をとりよせ、）

大酒もりとなるまゝに、互にさいつおさへつして、いと賑しくなりにけり。（金五郎はとこの間の柱によりかゝりて、）金「なんと清公や佐介公なんぞは、いつも〳〵忙がしいから、女の所へ行くひまはあるめへのう」清「サア、そこがもし、おつなもので、是でもずゐぶん女ゆゑにやア、相應に謀計もいたしますのサ。まづ女に逢はうといふ晩にやア、内を都合してはやくきりあげ、おたしなみの藏衣裳を引かけの、親かたの目をしのび足、こそ〳〵〳〵とぬけがけの、逸足出して阿多氣へおしかけ、ろぢ四ツ限も目にかけず、たゞきおこして上りの天神。サアそれからが口説のこんたん、おもしろ狸の腹つづみ」（トのりぞではなそのところへ、）座敷をしまひ歸り來る、小さんのあとより箱まはしの仁介、三味せん箱を背負ひ、ちやうちんをかた手に引さげ、供をして來る。（小三は上へあがりながら、）「仁介どん、大きに御苦勞。そんならまた明日來ておくれ」（紙にちよいとひねつて、）「サア是で一つ呑んでお寐よ」（トわたせば箱まはしはいたゞきて、仁介「ヘイ、これはありがたうございます。さやうなら明日。ヘイお休みなさいまし」（ト三味せん箱をかき、）かへり行く。小三は金五郎のそばへすわり、小三「オヤ、よくお出なすつてくださいました。此間はなぜ、さつぱりお出なさいませんえ」（ト顔を見てうれしさうに笑ふ。）金「ヘン、あんまりよくも來ねへのよ。來るなといふから來ずに居れば、又うらむのか、あきれるのう。四五日おれが來なかつたから、煩くなくつて好かつたらう。あんまり邪魔にされるから、呼によこすまでふつつり

とも、來めえと思つてあきらめて居たが、逢はずに行んではぢやァなくつて、逢はずに居ると氣になるから、顔が見たさについうかく、やつぱり迷つて又こゝへ」小三「オヤばからしい、なんでありますえ。清どんや佐介どんが聞いてるるのに、そんな事を」　金「ハテ、人が聞いても大事ないての。コウ小三、こんな馬鹿にやァ誰がしたらう。おれも生れつき是ほどの、阿房ではなかつたつけ。のう佐介公。楊貴妃や玉もの前のためしもあるから、さのみ恥かしいとも思はねへの」佐介「こりやァ旦那のが御尤だ。惚れてもりきむのは野暮の至りサ。小三さんはやつぱりおほこ氣がぬけませんね」金「なんのく、おほこどころか、ほらが變じて古狸とはなりにけりだ。アヽ化されるくと、知りつゝやつぱり化されるは、おれが一生のあやまりだ」小三「オヤ、よろしく申しておくんなさい。あなたこそわたしを、お化しなすつたのでございます」金「そりやァまたなぜだ」小三「それでも、唄にもうたふ通り、心からとて古郷をはなれ、知らぬ此地で苦勞するとは、よくわたしの身の上に、かなつた唄でございますよ」清介「モシ、ホトゴロウタ、

苦勞するのもおまはんをたより、それに邪見な事ばかり。

モシ旦那、小三さんの心は、このうたの文句の通りでございますよ。ねえ小三さん。一ッ心意氣が承りてえもんでございます子」小三「なんだね、をかしくもない。娘子供ぢやァあるまいし、心意氣なんぞはいやだわね」佐介「そんな事をおいひなさらずと、ちよつと一ッおやんなせえ。ソレ、どゝいつどいく、なだべこ、ちやらく、どんぶり鉢ァういたく」金「アヽ、やかましい、何をいふのだ」佐介「ハアヽ、サアく小三さん、サア一ッ」トいはれて小三はせんかたなく、とこの間にある三味せん手にとり、

うたなまじなま中ほれたがうらみ、ほれざ苦勞もせまいもの。

清「ハ、妙だくくくく」小三「モウ是でかんにんしておくれ」金「コウ、おつなものでの、おれも實は上がたぜえろくだが、都といへば聞えがいゝが、上がたぜえろく、上がた猿といはれては、一句もねへのす」佐介「その上がたにも、お前さんのやうな通人がありやすから、東ッ子は一句も出ません。全體は旦那がわるいのさ。おめへさんがあんまり程がいゝから、やぼなら斯したうき目はせまいと、小三さんがこれくで、氣がもめるでごぜえませう」トひたひにつののはえるまねする。

金「そんな口説はむかしの事よ。コウ、それよりやァ清公、今の阿多氣の物語の二段目狂言をはなさねへか。後學のために聞きてえのう」清「ナニもう跡ははなしますめえ」金「なぜ」清「小三さんに叱られます」小三「清どん何だえ、おもしろい話かえ」清「なァに、わつちが色の戀ばな

しさ」（トいふところへ　くめ川の小女。）「清介どん、佐介どん、お客があるよウ」佐介「ヲイ〳〵、そいつは斯しては居られねへ」金「小三、そこにある紙入を清公にやつてくんな。そして此一ッ提は、佐介、貴公に譲つてやらう」（トふたりになる。）兩人「へイ、是は有難うございます」（トいたゞきながら）出でて行く。金「ア、醉つた〳〵、けふはどうしたか誠に醉つた」（トそのまゝそこへうちふして、ぜんごも知らぬ大いびき、）小三「お竹や、もうこゝを片づけておくれよ」下女「ハイ〳〵、もう宜しうございますかえ」小三「ア、いゝのさ。乳母や、今夜は若旦那は、よつほどあがつたかえ」うば「いゝえ、そんなにお過し遊ばした樣子でもございませんが、いつたい御酒がおよわいから」小三「さうサ、全體あがりはなさらなんだが、近頃はよくあがるよ」うば「さやうでございます。若旦那さまもお宿では、萬事おぼしめすやうにもいかず、お心づかひもあそばしますから、ちつとづつ御酒をあがらずは、お氣のはれやうがございますまい。ほんにお坊さんもよくおよつたから、若旦那のお床をのべさせうか」小三「そんなら其子を、わたしが抱いて居やうから、お床をとつて上げておくれ」ト金之助を抱きあぐるにぞ、乳母はこの内、六疊の座しきへ、床をとり夜著を出して、うば「モシ、若旦那さまえ、サアおよりまし」（トゆりおこされて、）金五郎「ナイ〳〵。ア、いゝ心もちだぞ」（ト立あがりて上著をぬぎ、下著ばかりになりて床へ入り）金「サア、おつかアも寐ねえか。坊主はおれが抱いて寐やう」小三「あなたが抱いておよつたら、それこそ潰しておしまひなさるだらう」金「いゝわな、潰してもおれの子だから、だれも何ともいひ人はねへ。萬一おれがつぶしたら、又いゝのをこしらへるわ」（ト金之助の手をとり引ぱる。）小三「すきな事をおつしやるよ。アレ、およしなさい、そんなに引ぱると目をさまします。起しちやア惡うございます」金「ナニ起しやアしねへ。ちよつと貸してくれ」（トむりに金之助をだきとりて、）「エ、よく寐る坊主だぞ。コレ、ちつと目をさましてあすばねへか。こちよく〳〵〳〵〳〵」（トくすぐりさうにする。）小三「アレ、およしなさいといふのに。寐るさきへ立つて起しちやアいけませんよ」金「ハ、、、、、、そんなら乳母の處へ行つて寐ろ。今目をさまして泣出すと、おつかアの邪魔になるさうだ」（ト手へわたせば、）乳母は金之助をかき抱きて、次の間へ入りてうち臥しける。

後編下卷

第六回

小三は乳母や下女を臥さしめ、行燈の側につくねんと、ひとり何やら物案じの、顔うちながめながら金五郎、「コウ小三、何をしてゐるのだ。なぜ寐ねへ。又持病でも發つたか」トとはれて小三はほつといき、「イヽエ、持病ではありませんが、つく〴〵思ひまはしますと、あなたの事が苦勞になつて」金五郎「なぜ、おれがどうした」小三「もとより御好でなかつた御酒を、此頃のやうにあがりますから、しみ〴〵夫がわたくしは」金「フウ、わかつた。おれがあんまり酒を呑んだり、身もちがわるいから、行すゑこしかたを思ひまはすと、つまらねへものだと愛想がつきて、それが苦勞になるのだらう。ウヽさうだらう〳〵。いやになつたら厭だといへ。おれも男だ、切れてやるわ」小三「ソレ、そんな無理をおつしやるから、それが苦勞で片時も、氣のやすむ間はござりません。大かたお宿のお雪さんにも、やつぱり御無理をおつしやりませうが、それでは悪うござります」金「なんの事だ、をかしくもねへ。そんなつまらねへ事を案じずと、サアもう寐ねへか。寐るがいゝ」ト手をのばして小三「アレ、まだ著ものを著かへませんよ」金「いゝわな、著ものはそれ

でも大事ねへ」小三「ハつ〳〵」帶をとけば、うれしげに上著をぬぎ、下著のまゝに寄添うて、顔みあはせて互にこり。金「コレ小三、そなたもかねて知る通り、心にそまぬお雪の事、とやかく内でいふゆゑに、のつぴきならぬ義理づめで、しぶ〳〵請けはうけたれど、松に櫻は見かへられず、そなたに勝つた花があらうか。かならずそれを苦にしねへがいゝ。しかし親を捨て、兩刀を捨てて、矢立をさして町人にならうと思へば、一も二もねへ心やすい世界だのう」小三「サア、それがいやさに苦勞になります。只あなたが全うに、お宿のお首尾のよいやうに、お雪さんともお中よく、みなさまに御安堵させて、わたくしをも見捨ててさへくださらねば、どのやうなせつない暮しをしても、少しもいとひはいたしません」トしんじつ見えし女のみさを、金五郎もおもひやりて、金「おれもその實心を見ぬいたゆゑに世間はれて、内へ入れてえと思ふけれど、何をいつても養子のかなしさ。むかしの身ならいさくさなしに、おつけはれて夫婦だが、かへつて今の身の上が、思ひまはせばつまらねへ」トぐちなくりごとくりかへせしが、「アヽおれとした事が、つい胸におもつてゐるゆゑ、女のやうな愚癡ばつかり、儘になるのもならぬのも、みんな約束、仕方がねへ。これも浮世だ、どうなるものか。のう小三、床へ這入つて、又いゝ夢でも結ばう」ト〔十一〕〔字節略〕いかなる事や契るらん。在斯程に、隱居白翁は、金五郎が日にまし放蕩募りて、家にとては居らざるゆゑ、養父文次郎はじめ家内

のものに、一ばい氣がねを爲たりしが、お雪もはや、十五にもなりたれば、金五郎と婚姻を結ばんには、すこしは足も止らんと、頻に是をすゝめしかば、金五郎は心ならずも、婚禮はしつれども、お雪はまだ年もゆかず、殊に手のなきおほこ氣なれば、とにかく而白からぬゆゑ、さまざまこしらへ騙しては、小さんが許へのみ通ふものから、はやくも二とせばかり立てども、猶不身持の止まざりけり。隱居白翁は是を愁ひ、文次郎夫婦もお雪の仕かたの、あしきゆゑに金五郎が、内に居つかぬと口にはいへど、心には眞實わが子の可愛さに、金五郎に愛相やつきん。我あるうちは善惡とも、金五郎の爲をおもへども、いくほどもなく吾齡、はてにし後やいかならんと、老の心をいためつゝ、おもひあまりて、手をまはし、小さんの名所聞たゞし、心の中をさぐりしうへ、理を說きて緣切らせ、事に由らば金を出し、支度して何方へなりとも、片付やらんと思案しつ、金五郎が當番にて、詰所へ出でて留守の日に、小三が許へぞ尋ね行きぬ。頃しも文月上旬、小三ははでな中形の、ゆかたに藤色のうらえりかけ、黑繻子の帶しどけなく〳〵、あらひ髮をうしろへさげ、緣側へ出て金之助の、腹がけを縫うて居たりける。折から表に人ありて、賴む〳〵と案內を乞ふに、小三は「ハイ」といらへつゝ、立出れば隱居白翁が、「卒爾ながら小三どのの、お宿は爰でござりまするかな」小三「ハイ、その小三は私でござりますが、あなたはつ

ひに見なれぬお方、どちらからお出なされました」白翁「ハア、そんなら此方さまが小三どのか。わしはこなさまに、ちと內々咄しがあつて、わざ〳〵來ました。ゆるさつしやれ」上へあがればいぶかしながら、小三「何はともあれそこは端ぢか、マア〳〵こちらへお通りなさいまし」ト奥へ通せば座になほりて、白「扨こなさまの名はかねてより、聞いては居れど逢ふははじめて、わしは金五郎の祖父白翁といふものでござるが、今日わざ〳〵來ましたのも、外の事ではござらぬが、アノ、孫の金五郎めが事。イヤもう、見るかげもないあのやうな者を、ようマア可愛がつてやつてくださる。眞身にとつては嬉しいとも、かたじけないとも、禮は詞に盡きませぬ。その深切な心を見込んで、ちと賴みたい事がござる」ト聞くより小三は胸に釘、はつと心に當惑し、いかゞはせんと思ひしが、今さらおどろく事にもあらず、かねての覺期はこゝぞとおもひ、胸なでおろし氣をとり直し、茶烟草盆を出しつゝ、しとやかに手をつかへ、小三「ほんにわたくしも、若旦那さまのお咄しにて、つねぐ〳〵から、御噂を承りましたあなたの事、お目にかゝりますは始てでござりますれど、眞身の親に訪はれた心、おうれしうござります。ようマアお出あそばしました」ト叮ふかほつく、白翁「イヤ、あまりよくも參らぬて。アヽ物ごしといひ取まはし、容貌まで高位の、奥方とても恥しからぬ、人にすぐれた生れつき、いかなる人の身の果か、見れば見るほど美くしい。アヽ、若い者

の迷ふはもつともかい。こなさんを内へ入れたなら、孫めが尻も落つくであらうけれど、上へのきこえ世間のおもはく、義理と人目のせんかたなさ、たのみといふは茲の事、知つてるかは知らねども、金五郎はわしがためには、惣領むすこの一人孫、世が世であるなら、無理わがまも爲次第だが、だん〳〵深いやうすがあつて、あれが親は家出なし、其弟が今での家督、その養子となりし金五郎、あかの他人といふではなけれど、養子と名のつく悲しさは、おもふにまかせぬ世間の人目、家の娘のお雪といへるを、娶合せねばならぬゆゑ、金五郎もふしようぶしよう、やうやく此頃婚禮しても、お雪はまだ子供同然で、おもしろくないから片時も、内に居つかぬはもつともかい。わしが孫でいふではないが、世間の人にほめられて、それほどの事わきまへぬやうな氣性でもなかつたが、今に夜どまりはなほ止まず、女房はほんのすもり同樣。それは誰ゆゑこなさんゆゑ、わしが命のあるうちは、内外の者もわしにめんじて、金五郎がわるいとは言はねども、見らるゝ通りわしも老人、今をも知れぬ身のうへゆゑ、わがなき後は金五郎の、身のためにならぬ事もあらうかと、案じ過せば夜の間も寐られず、苦勞で壽命も縮まるやうぢや。こんな事いうたら、鬼とも蛇とも、慈悲なさけのない心と思はつしやらうが、眞實あれが憎くもなくば、内の娘のお雪の中に、子どもの一人も出來るまで、遠ざかつてもら

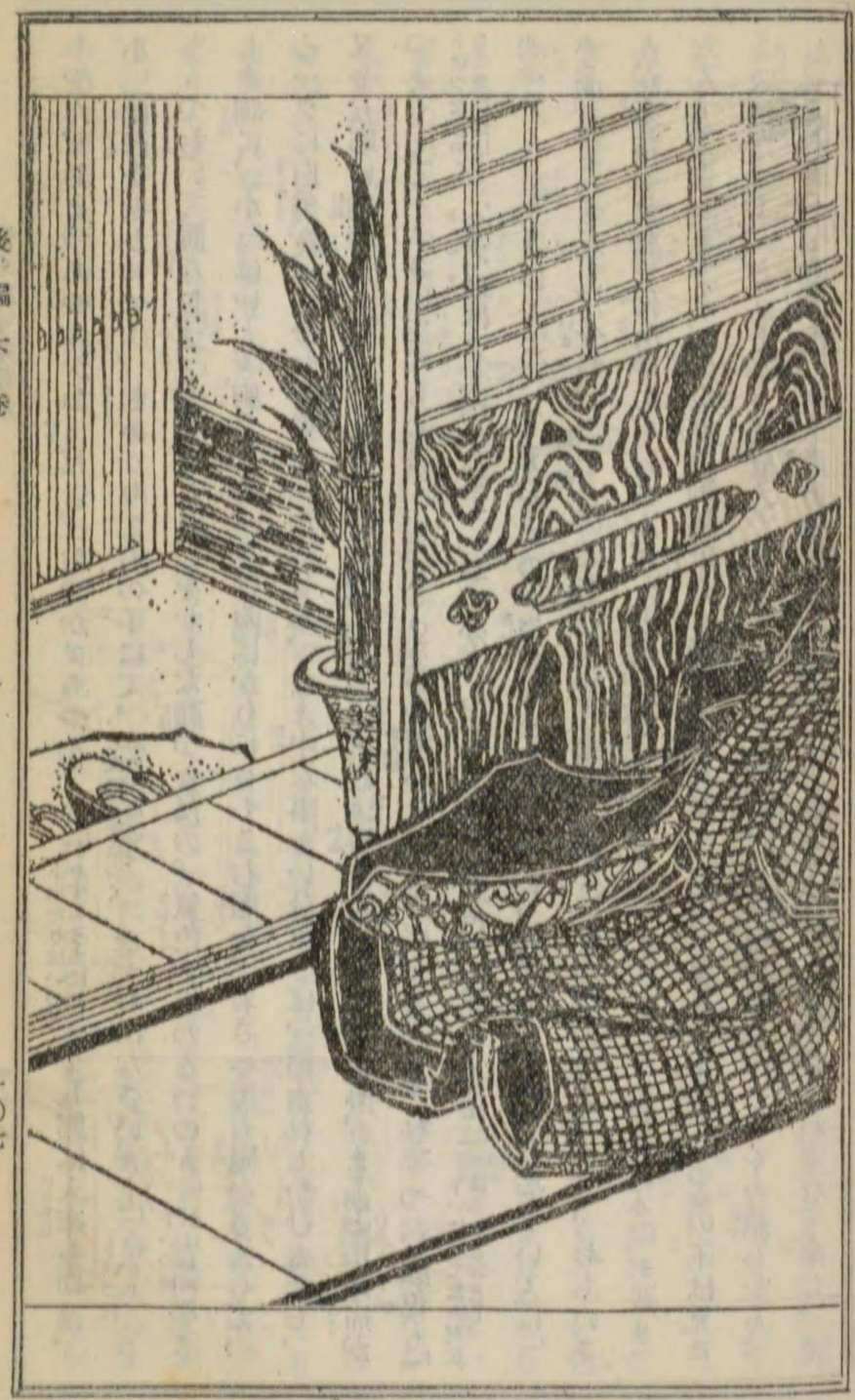
ひたい。さすれば世間のおもはくもよし、又子どもでも出來てからは、こなさんを内へ入れても大事ない。今金五郎が義理のある身で、こなたを内へよぶときは、部屋住の事ゆゑ世けんへすまず。こゝをとつくり合點して、しばしのうちを辛抱して、思ひきつて見てくだされ。もしその内が待遠なら、こなさんの心にかなふやうな、身の爲によい所を見たて、この爺が支度して、緣付けて進ぜませう。さうすりや此方の身も落つき、おほくの人のきげんきづまを攪るにも及ばず。せめてはわしが禮心、氣樂にして進ぜたい」　のつぴきならぬ義理づめの、賴にいやとはいはれねば、いつそわが身の成行を、うち明けんとは思ひしが、今さら素性を明しなば、見さげられもし殊に又、金五郎の爲あしからん　小三「だん〳〵のお賴うけたまはり、何と申さんやうもなく、大事の大事の若旦那さまを、人にわるく言はせたり、あなた方へいろ〳〵な、御苦勞をかけましたも、みんな私がいたづらから、つくつた罪でございます。お赦しなされて下さいまし。それをマア、憎いともおほしめさず、氣樂にさせてやりたいと、かへつてやさしいそのお言葉、もつたいないとも有がたいとも、申さうやうはございませぬ。さりながら私は、たとひ外にどのやうな、けつこうな所がございませうとも、樂みのぞみはございませぬ。只若旦那やみなさまの、おためになります事ならば、たとへこがれて

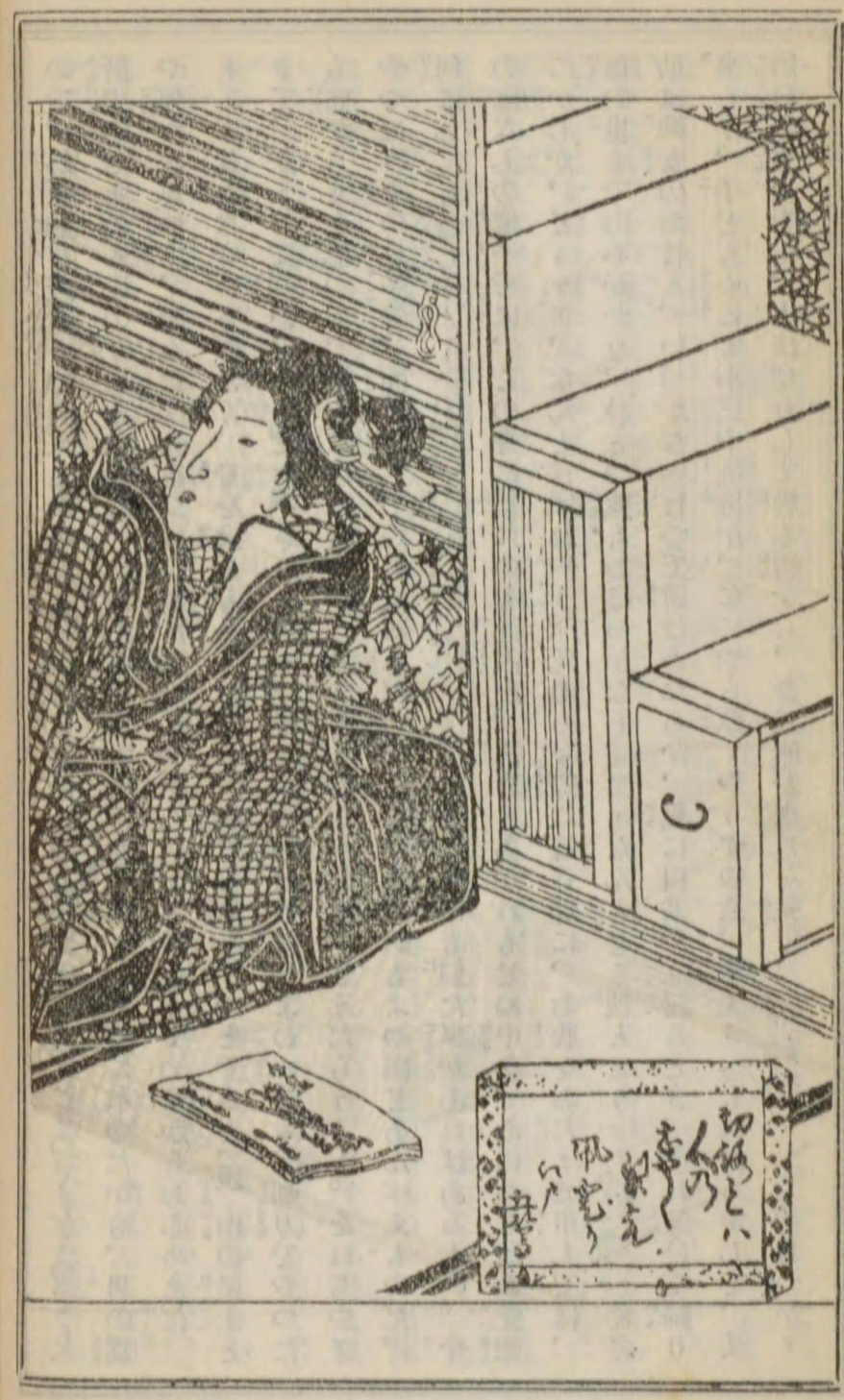
死すまでも、ふつつり思切りませう」トいふも涙だのうるみ聲、わつとばかりにせきあげて、正體もなく泣きゐたる、心のうちぞいかならん。白翁もともによろこびなみだ、「ヤレ〳〵マア、よく思切つてくださつた。かたじけないぞや小三どの。そのかなしさを見るがいやさに、今日行つてたのまうか、明日行つていはうかと、一日々々と見合せても、どうでいひ出さねば果しがつかねば、心を鬼にしてわざ〳〵來たが、さぞ憎からうが是も身のため、うき世の義理のせんかたなさ。老の身に後生は願はず、緣切に來た罪つくり、わしが胸のせつなさも、すゐりやうしてくだされよ。この事とくと承知なら、けふあすというでもない。心まかせにいつなりと、こなたの身にも怪我のないやう、手ぎはよくやつてくだされ」て出てながら、「金五郎とは緣切つても、わしはやつぱり孫娘のこゝろ、この後なんぞ不自由あらば、かならず〳〵遠慮なう、なんなりとさう言うてよこさつしやれ。こなさんの身の落付くまでは、いつまでもわしが貢ぎますぞや」ト他人と思はぬ白翁が、やさしき言葉にうれしさあまり、悲しさやるせなきまゝに、とかくのいらへさへもせず、只うつ臥して泣き居たる、その心根の不便さを、おもひやりつゝ白翁も、老のなみだにかきくれしが、心よわくてかなはじと、思ひ直してかへりける。小三はもとよりお雪の事を、聞いてゐたゆゑ末々は、中を折かれんは必定なり、もし緣切らるゝ事とならば、生きて居たとてかひなき

身の、別れてつらき日を送らんより、死して苦患をまぬかれんと、こゝに覺悟をきはめしも、せまき女子の心から、嗚呼是非もなき事にこそ。かゝりしほどに乳母のお乳は、最前よりの一五一什を、次の間にて聞くものから、小三の胸のせつなさを、さこそとおもひやる程に、おのれも共に胸のうち、はりさくばかりの苦しさを、こらへてしのび泣きゐたるが、今はなか〳〵悚へかねて、わつとばかりに走出で、小三のそばへすわりながら、「もしあなた、とんだ事になりましたねえ。あのやうにマアうつくしく、おいそれと、お請合なすつたは、どういふお心か合點がまるでありません。おばうさんのある事を、なぜうち明けてかう〳〵だと、おつしやらぬのでございます。子までなしたる戀中と、お聞きなすつたらお祖父さまも、無理に切れろとはおつしやるまいに、今若旦那と御緣を斷つて、どうなさる思召でございます。お坊さんが可愛くはございませんか。あのお子さんの事はお案じなさらぬか。マアどういふお心でございます」ト只ひとすぢに金之助や小三を、大事とおもふゆゑ、心を付けるこは意見、乳母はかくこそありたけれ。小三はなみだのかほをあげ、「ほんにそなたのいふ通り、子まである身を折かれる事、せつないとも悲しいとも、胸の中ははりさくやうで、そのくるしさは譬へられうか。それゆゑ金ばうのある事を、うち明けやうとおもうたが、男の子は緣切らるゝ時、男親に附くがならひ。なま中な事いひ出して、あの子まであちらへ引

とられては、若旦那も今までよりは、なほ〳〵御苦勞が增すであらうし、二つには又わたしも、あの子を手ばなしては樂みもなく、さぞ日にまし淋しからうと、未練らしいがいひ出さぬも、やつぱりたがひの爲ばかり。又若旦那と緣切つても、わたしや外にどのやうな、男があらうと二人とは、馴染をかさぬる氣はないから、いつがいつまでも今の通りに、斯してくらす心ゆゑ、そなたもやつぱり今までのとほりに、金坊の世話をしておくれよ」のあとやさき、乳母も目をこすりながら、うぱ「まことにあなたのお心の中を、推量いたせばいたすほど、わたくしの胸もはりさくやう。なる程おばうさんのある事を、おかくしなすつたは深いお心、たとひ今日が日御緣がきれても、一生別れきりというではなし、ほんの人目や浮世の義理と、お祖父さまの先刻のおことば、すこしの御辛抱でござりませう。又お坊さんの事はおつしやるまでもなく、ばゝアばゝアとお馴染なすつたもの、なんで他人と思ひませう。もつたいないが私が、產み申したお子だと存じますもの。たとひどのやうな苦勞をいたしても、お育て申す氣でござりますから、ちつともお案じなさいますな。しかし是から若旦那の、お手がきれたら猶あなたは、いろ〳〵御苦勞あそばすだらうと、それがおいたはしうござります」とあとをためなみだ、小三も浴衣の袖を目にあて、小三「わたしも今度の緣切が、一生の身の大事だから、只何事も神まかせ、わるい工をしたのぢやァなし、天道さまも見とほしゆゑ、今日はけふ、明日はあすと、その日の風に任するばかり。せつぱつまつたその時は、又外に思案もあらうから、それを案じてくんなさんな。今にも若旦那がお出なすつても、かならずわるい顏をしないで、今お祖父さんのお出なすつた事も、おしらせ申しちやァわるいよ」うぱ「それは呑こんで居りますが、なんぼお祖父さまのおたのみで、お家の爲や若旦那の、おためとは申しながら、常にかはつてあなたの氣づよさ、お思ひきりのよさといふものは、あんまり見事でござりますから、どうも合點がまゐりませぬ」トいはれて小三はは〳〵と當惑、死する覺悟をさとられじと、わざとまぎらす小三「アイタ、、、、今のもや〳〵で持病の癇が、どうやら頭痛もするやうな」てよこになる。乳母はせん方なく〳〵も、次の間へ立つて行きて、金之助のゆかたびらを、縫ふもなみだで果取らじ。小三はしばし氣をやすめんと、横に寢ても眠られず、只胸さきのみとどろきて、とやせんかくやとさま〴〵に、思ひなやみし折からに、隣れる家にて若者ども、二三人にて聲高に、浮世ばなしのいろ〳〵なる、中に一人がい　圖「コウ八さん、おめへ、己がむかうにゐた、つとめあがりの女を見たか」▲「フウ見た〳〵。二十三四のいゝ女だつけ。あれがどうした、文でもよこしたか」圖「ばかァいひねえ、アノ女で此間大騷動があつたァな」▲「ハテノ。又逃げでもしたのか」「どうして〳〵、逃げたぐらゐならばい

いけれど、首をくゝつて往生したァな」△「エ、縊つたか。ヤレ〳〵とんだ事をやらかしたの。そりやァマァどういふ譯だ」■「聞きねえ。アノ女はの、婦多川の女郎だがの、さる所の息子に惚れて〳〵ほれぬいて、互に心をあかし合つて、末は女夫だ、夫婦にならうと約束をしたが、聞きねえ、その息子がおめへ、内にやァの、いゝ嫁があるんだァな。それを何でも深くかくして、まだ女房は持たねへから、請出す〳〵とだまかしたが、大ふでかしよ。それからおめへ、相應に金まはりもいゝもんだから、親父の金をひん盗んで、身請をして己が長屋へ、連れて來て圍つて置いての、女房はたゝき出しの、から、手におえねへから、親父はおほおこりで、上がたへやるの、田舍へやるのと、大もんちやくよ。した處があの女は、女郎に似あはぬよく出來た者で、嫁が出されたり、親父がおこつたのを聞くと、サア氣をもんで〳〵、息子が不埒とはいふものの、嫁を出したり内がもめるも、みんな私があやまりと、ひどく嫁に氣がねをして、生きてゐちやァ、四方八方、丸くいかねへと思つたさうで、とう〳〵書置をして、首をくゝつて死んでしまつたから、嫁も歸るし、息子もそれから、しかたがねへから穩順しくなつたが、なんとその女郎は、よつぽど氣めへもので胸がいゝに、第一、貞女といふ女だ」▲「ほんに女のかゞみだのう。水滸傳一百八人の中に、どうかありそうな豪傑な女だの。なるほど女は魔のもので、外面如菩薩内心如夜叉とかなんとか、佛さまがいはしつた通り、顏はうつくしくつても、肝魂のおそろしいのがあるものだ。しかしあの女もその息子の、一旦恩になつたから、男の爲や何かを思つて、死んだのはあつぱれ名が殘るが、をしいかな首をくゝつたからおしめえだ。とても死ぬならいさぎよく、身を投るもちうだから、剃刀で咽をぐつとやると、鏡山の尾上ときて、がうぎに利いてゐるぜ」■「さうよのう。そこがやつぱり氣がよわいから、剃刀でやつたら痛からうと思つて、縊つたのだらうが、見つともなかつた」▲「さうだらう〳〵。それぢやァやつぱりその息子の、面よごしでわらはれ草だの。ほんに死ぬのもよつぽどあんべえものだ。何にしても恐しや〳〵」（トはなすを小三はきゝすまし、つくづく思ふひとりごと、）「ハテ、世の中にも似た事があればあるもの。今のはなしの樣子では、この身に似たのも辻占か。あきもあかれもせぬ中を、心におもはぬ愛想づかしが、どうマァ、なんと言はれやう。死ぬる今際に若旦那に、お腹をおたゝせ申しては、後の世までの心がかり、ひとつ蓮もおぼつかなし。アヽ、なんとせう彼とせう」（トひとり胸のみ苦しめける。）金之助は婢女のお竹と、いづかたへ行つて遊びゐたるか、曩に白翁が立歸るとき、すれ違ひて歸り來しが、子ども心にも小三や乳母が、なにやら歎くやうすゆゑ、褒美さへもねだらずして、又門口に立出でて、土ほぜりして居る折から、金五郎が來るを見て、（よろこびて内にかけこみ、）金之助「おつかァ





ちやん、おとつちやんがお出だよ。おつかァちやん〳〵」ト出たりはいつたりするうちに。金五郎は入來るゆゑ、小三は顔をしかめつゝ、起あがりて右の手にて、むなさきをきつくおさへながら、小三「お出なさいまし」トいつたばかり、さしうつむいて詞なし。金五郎「どうした、をかしな顔つきだの。氣色でもわるいのか」トいつにかはらぬやさしき詞に、小三はいとゞ胸さきの、さけるばかりにさしこむ癪を、おさへても猶をさまらぬ、心一ツに白翁が、いひたる事をいかにせん、なま中な事をいひ出さば、賴まれしかひもなし、又金五郎に胸のうちをさとられじと、わざとなにげなく、小三「けふ髪をあらひましたら、まことに頭痛がつよくして、ふさいでならぬに、いろ〳〵な事を考へますと心ぼそくて、それでつい顔色も」トいはれてなみだをほろりとおとし、金之助はさしのぞきて「おつかァちやん、もう氣色なほつたかエ」トせつなさかくし一笑ひがほ、小三「アイ、もういゝよ」金五郎「なんの、氣色がわるさうなら、髪を洗はなけりやアいゝに」金之助「おとつちやん、今ね、餘所よしよのおぢいしやん來て、坊こはかつたよ」金五郎「ナニ、おぢいさんが來た。そりや何所のおぢいさんだ」トとはれて小三はは胸とどろくをそらさぬ顔で、小三「ナニサ、なんでござりますよ、矢劍堀の御隱居さんが、御出なすつたのでござりますが、この子は見るとこはがつて、どうもなりません。オホ、〳〵、〳〵」トわらひに一まぎらす心の中、さこそつらくも悲しかるべし。金之助「おとつちやん、お土産あるかえ」金五郎「ホイ、しまつた、ツイ今日はわすれて來た。そ

の代りばゝアと行つて、何ぞいゝ物をとつて來な」金之助「アイチヤウ、ばゝア行かうよう」ト引せたるに次の間より、立田うば「サア お坊さん、まゐりませう」ト金之助をいだき、出てゆくそぶりをつく〳〵と見てふしんがほ、金「なんだ、てん〴〵るる乳母もなみだ顔、にをかしな顔をして、どうもおれにやア合點がいかねへ。なんぞ苦勞な事でも出來たか。コレ、なぜおれをば隔てるのだ。そりやア分らねへと言ふものだぜ」小三「エ、、何も込入つた事もござりませんから、あなたを隔ては致しませんが、餘りうつ〳〵として居りましたから、つい色色な事を案じ過して、互にこしかた行末を咄して、果は泪をこぼし、ふさいでなりませぬからとろ〳〵と、少し氣を休めたのでござります。ガ、わたくしよりはあなたのお顔、いつにないお色のわるさ、お心持でもお惡くはござりませぬか」金「ナアニ、おれのはこりやア持めへだから、時々ふさぐが直になほるよ」ト口にはいへど心には、何くれかまくの、苦勞あれども男氣の、それと知らさぬ胸の中、言はぬはいふに彌增して、猶さらつらきものぞかし。小三「あなたちつとお氣ばらしに、御酒でもおあがんなさいませんかエ」金「いや〳〵酒よりはマア、ちつと寐やう。全體けふは番だから、どうも來られねへ處だつけが、きのふもをとゝひも來ねへから、又案じるだらうと、氣になつて、それでやう〳〵ぬけて來たのよ。一ト寐入やつたら直るだらう」ト小三のまくらを引よせて、ねころびながら、「のう小三、實に人のいつ生は、どうなるものか知れねへものだの。今ごろ斯して暮さうとは、おら

ア夢にも氣がつかねへよ。末々かけて夫婦だと、互におもひ思はれたに、お雪といふ惡魔が這入つて、苦勞をさせるせつなさつらさ。夫故にこそ祖父さんや兩親へ、一倍氣がねをするといふも、アヽうるせえ世の中だのう」小三「其樣にマア、お雪さんのことを兎や角とおつしやるが、お雪さんは大事の〳〵、お家のお娘でござりますから、可愛がつてあげてくださいまし。どうで私は日蔭の身ゆゑ、どうなつても宜しうござりますから、そんなにあちこちお氣をつかつて、必ず煩うてくださいますな。それが私は苦勞で〳〵なりません」と、しばし泪にくれ六つの、かねの鳴るまでまどろまんと、金五郎はこゝにうち臥しける。是より小三、金五郎に、あいそづかしをいふや否や、（そは三ぺんを見て知り給ふべし。）

娘節用三編序

器の古きを愛るのは、ひねつた茶人の一癖にして、旨き物を食したがるは、小兒と意地のきたな連中、婦人を視て目のなきは、放蕩家の病なるべし。觀所と趣向のあたらしきを、妙で誤說の咎もなく、ヤンヤと蘭語で贊言は、戲作通の看的、評判よし野の花より高く、部數は春の山ほどに、賣らん事を欲するは、言はねどしるき發客の慾情、活業原より忌敵、速いが勝の新版は、夕河岸の魚を競ふに齊し。近屬娘節用の、刻成つて發市は、近きにあれば序文でも、口上なりと出たらめに、早くく〳〵と書肆より、使をおこして居催促、机下に居眠りし、調市の鼎を聽きながら、筆を採りて斯くばかり、有の儘に記すになん。

甲午の孟春　三文舍主人

三編上卷

第七回

生者必滅會者定離は、浮世のならひと悟つたる、言も今は身のうへに、おもひあたりし憂事と、小三は胸にこたへたる、人に知られぬ心勞も、かねての覺悟といひながら、さすが女のやるせなく、浮氣を捨てて眞實に、二世を三世と契りたる、かはらぬ中の金五郎の、爲とはいへど今さらに、義理といふ字にせめられて、緣を切らんはなか〳〵に、身を裂るゝより苦しくて、とやせんかくと案じれば、案じるほど猶物おもひ、まさる苦勞を胸の中に、置どころさへ泣のたね、心を鬼に持つとても、道に缺けたる愛想づかしは、いふにいはれぬ恩愛と、執著の絆斷難く、ふつ〳〵おもひ惱みしが、左にも右にも來かけて、添はれぬあだな緣ゆゑ、なまじひなことといひ出して、臨終に憎しみ受けんには、女子は罪の深き身に、罪かさなりていつの世に、罪滅さんやうはなし、うすき緣は前の世の、因果と思ひ定めなば、人をうらみ身をうらむ、よしなき罪はなきものをと、あぢきなき世を悟れども、心ほそさのいとどしく、生さきのある子を捨てて、いとしい男のためながら、暗き冥土へ旅立たんは、よく〳〵業の深き身と、又くり

かへす迷の闇に、ひとり胸のみ苦しめつ、年ごろ日ごろの辛勞が、つもり〳〵てこの頃は、うき立たぬ氣のむすぼれて、食事も日々にほそるものから、面もかたちも瘦がれて、うつら〳〵と氣を病むも、ことわりせめて哀なり。かゝりし程に金五郎は、案じること大かたならず、藥よ醫者よとさま〴〵に、心を配り氣をつけて、いたはりやさしくさるゝにつけ、小三はいとどその情の、あつきと恩の深かるを、おもひつゞけ考ふれば、いかに義理でも操でも、いとし可愛の夫と子を、捨てて死すべきやうもなく、いつその事に白翁が、緣きつてくれと賴みたる、事をうちあけ金五郎に、はなして談合したならば、どうかかうかとさま〴〵に、心もみだれ氣をもみて、病はます〳〵重るゆゑ、寐ても起きてものぼせるのみ、頭痛とゆるぐ齒のいたみに、胸のやすまるひまぞなき。金五郎は勤の身ながら、案じることひとかたならず、日毎々々に訪ひ來るが、今日しも例のごとく入來りて、（奥へとはれば小三のそばに金之助は、持あそびを、ところせましとならべたて、餘念もなくあそびゐる。と）金五郎「どうだ小三、けふはちつとも快方かの」（トとはれて小三はくるしき中にも、金五郎のかほを見るより、なやめる顏にいつこりわらひ、）小三「ハイ、やつぱりけふも同じ事で、どうもふさいでなりません」金五郎「さうか、まことにどうも困つたものだ。藥は毎日精出してのむか。ばゝア立つけて呑ましてくんなヨ」（トうしろをむけば、うばは火ばちへ炭をつぎながら、）「ハイ、なるツたけ精出してお呑ませ申して、早くお快くしてあげたいと存じますが、今度のお醫者のお藥は、ま

ことにあがりにくいさうで、ねつからどうも果取りません」金五郎「そりやァわりいのう。どうで藥は呑みにくいから、誰しもすゝんで呑むものはねへが、そんなに無精ぢやァどうもいかねへ。それにあの醫者にかけてから、ねつからはかゞしく無へやうだから、なんなら醫者を取替るが宜からう」小三「ナニあのお醫者さまもお功者だから、轉ますにもおよびますまい。どうでかういふ病氣といふものは、はかゞしい事はないと申しますから、お氣をもんでくださいますな。私がこのわづらひより、あなたに御苦勞かけます事かと、思ひまはしますと、もう〳〵、いつそこの儘死にました方が、はるか優でございませう」トいひつゝなみだはら〳〵。金五郎「またそんな馬鹿なことをいふョ。なに死ぬのが優なものか。病は氣から發るといふから、氣の持ちやうで早く也直り、重くもなるのに、おめへのやうに些と煩ふと、死ぬ方がましだ〳〵と、氣で氣を病むものだから、ちよつとした病氣も埒があかねへのだ」小三「それでもどうも心から、氣で氣を病む氣はございませんが、もとより苦勞性な生れつきゆゑ、つまらない事も氣になつて、あんまり深く考へますから」金五郎「それがわりいナ。寐る目もねずに考へて、氣で氣をもんで苦勞をしても、儘にならねへことが儘になるものかナ。餘計な苦勞で命を削るやうなものだ。勿論平生おれの爲をおもつて、人の知らねへ苦勞をして呉れるのは、眞實うれしいは山々だが、こんな

に煩つてくれちやァ、實にどうも困りきるぜ。是からは考え事はさらりとやめて、苦勞は地獄へでも捨ててしまふがいゝ」小三「あなたはさう一ト口におつしやいますが、とても女は罪が深いから、苦勞は一生放れません。苦勞より此體が、さきへ地獄へ參りませう」トあはれなことをいひ出すにぞ、金五郎もねふさがりて、金「その氣の小せえのが病の原だ。老人かなんぞぢやァあるめえし、是しきな病氣で死ぬものかな。ちつと氣をきりけえて、向島の姉御の所へ、保養にでも行つて見るがいゝ」小三「わたくしも向じまの姉さんに、久しく逢ひませんから、この間からどうぞして、まゐりたいと存じてをりました。老少不定は世のならひ、盛りの花も散るは常、定めなき世と申しますから、あすをも知れぬわたくしが身のうへ、もしもの事があつたらば」トあといひさしてむねせまり、金五郎のかほと金の助の顏を見つめる目になみだ、袖にあぶれて膝のうへに、雫と落つるを子心に、ふしんにおもふ金之助は、のびあがりて小三の顏を、つくゞくと見てひざにとりつき、金の助「おつかちやん、なに泣くのだエ。おとつちやんお呵いか。坊あやまゆから堪忍ちておくえよウ」トいはれて小三はたまりかね、こゑをしのびてなきむせび、金の助をだきあげて、可愛さあまりてせつなさは、胸もはりさくばかりなる。金五郎も男心に、口にはさまゞ〳〵言ひまぎらせど、小三の胸をおしはかり、せまき女のこゝろから、よしなき苦勞に取つめて、もしもの事もあらんかと、おもひ過して胸せまれど、さとられじとて鼻紙に、泪つゝむぞ無理ならず。乳

母のお乳もかたはらに、二人がこゝろを推量して、共になみだに嗚咽びける。小三はやう〳〵なみだをぬぐひ、「この子のまだぐわんぜもなく、わたしが愚痴な心から、つまらぬ事を案じ立して、あんまり悲しくなつたゆゑ、つい泪をこぼしたのを、旦那に呵られる事かとおもひ、あやまる心のしほらしさ。なぜ子どもといふものは、こんなにもマアかはいからう。この子の成人するにつけ、欲にかぎりは無いゆゑに、いつまでもたつしやでゐる氣でも、壽命がなければそれもかなはず。もしあすが日に目を眠つたら、さぞマア後で泣くだらうと、それが今から見らるゝやうで、死ぬ氣はさら〳〵ないけれど、とても長命のできないわたくし、遺言ではございませんが、ひよつとマアさかさまな事で、この儘死にでもいたしましたら、たより少いこの子の身のうへ、佗人の手にかけないやうに、どうぞ向島の姉さんのところへ、お預けなすつてくださいまし。とても日かげで育つたこの子、末始終あなたの御家督を、つぎます事もなりますまいから、養子にやらねばならぬ生さき、今からあんまり他人の中で、いぢめられたり苦勞をさせたら、根がひよわい生れゆゑ、虫もちにでもなりませうから、外へやつてくださいますな。御如才もございますまいが、六ッか七ッにもなりましたら、手ならひや讀書も、教へてやつてくださいまし。又二ッにはお雪さんと、御夫婦中よくおくらしなすつて、御祖父さんはじめ御兩親へも、御苦勞をかけ申さぬやうに、御孝行になすつてくださいますれば、わたくしはモウどのやうな、佛事供養をしてくださるより、思ひ殘す事もなく、うかみます。あなたには子どもの時からおなじみ申シて、ひとかたならぬ御恩をうけましたが、この世の縁が薄いかして、この子ができても末かけて、添ふにそはれぬ身の因果、何のむくいでこのやうに、後生のわるい生れかと、いくたび思ひかへしても、かへらぬ事でございますが、これもやつぱり女の愚痴、このうへのお情には、わたくしのからだは、あなたのお寺へ、どうぞ遣つてくださいまし。さうしたならあの世へ行つて、お側に居られませうかと、儚いやうでございますが、今の身にてはそれがたのしみ、お察しなすつてくださいまし」ト又もなみだとともに、くりかへしてぞ歎きける。金五郎「まだそんなつまらねへ事をいふよ。あんまりくよ〳〵思ふから、ちつと取のぼせたのぢやァ無へかノ。この一日二日は、なんでもおれの顔さへ見ると、あはれつぽい事ばつかりいふから、おれまでどうか氣色がわるくなるやうだ、愚痴なことを考へ立して、氣でも狂ふといかねへから、ほんに氣をしつかり持つがいゝぜ。お雪にひどく氣がねをするから、それでこんな病氣が發るのだらう。あの子の事と祝言したのは、知つてゐる通り、祖父さんや親父の氣やすめの爲だから、何も今更おめへを捨てる心もなし、又金坊ができたから、榮耀榮花こそさせられねへ

が、そんなに不自由もさせめえし、日かげ者でもなんでも、共に心さへ變らねへけりやァいいぢやァねへか。儘にならぬのが浮世だとは、唄にさへうたふから、其處を承知して、なにも時節だと、氣を大きく持つて往生して居なけりやァ、苦の世界が渡られるものかな。ほんに往生するといつちやァ氣がかりだつけ。ァ、鶴魂々々」　ト小三のこころをなぐさむる、ことばのはしにもいまにしき、ことのみいひて氣にかけるも、むしのしらするゆゑなるべし。

この日は金五郎も何となく、小三の身が案じられて、歸る心もなかりしかば、看病がてらこゝに泊りて、夜もすがら沈りがちなる事のみはなして、夜更けてみな〳〵打臥しける。あくる朝金五郎は、早く起出で仕への身なれば、たち歸らんと身じたくするに、小三は心のつかれにや、まだ目覺さぬこなたには、金の助があさぬきにて、うばをあひ手にあそびゐる、そば〳〵來りてあやしながら、　金五郎「ばゝァや、子どもといふものは、まことに朝おきなものだのう。坊ヤのしやべる聲で、おらァ目を覺したやつよ」うば「さやうで御座いますかエ。どう致してもお坊さんは、お晝寢をなさいますから、朝がお早うございますのさ。ほんにおつかさんはまだ、お目ざめがござりませんヲ。旦那さんエ、あなたはさぞモウ御苦勞でございませうが、まことにお困んなすつた事でございますヲエ」　金「さうよ、實に苦勞でならねへ。それになんだか氣にかゝる事ばつかりいふから、どうも案じられて安心ならねへョ。おれは勤の身のことゆゑ、毎日附どほしに附いても居られず、なんでも手前

ひとりが賴だから、ずゐぶん氣をつけてやつてくんな。女といふものは心の狹えものだから、ひよんな事でもしめえかと、夫が一ばい心配だ」　ト いひながら金の助のあたまをもさへて、「こりや金ばうヤ、おつかァはきい〳〵がわりいからの、あんまり世話をやかせずに、おとなしくして居るのだョ。又明日來る時に、お土產をたんと買つて來てやりませう」　ひざにとりつき、　金「おとつちやん、坊おとなちくするかや、うまい物お吳よ。明日おつかちやんきい〳〵まだわゆいかヤ、坊おとなゆョ」金五郎「ヲ、さうだ〳〵。坊は利口ものだからおとなしくするのう。そんならおとつざんはマァ歸りませう。おつかァはまだ日を覺さねえから、靜にしなよ」　ト いふ聲きくつけ小三はもきいで、　小三「オヤモウあなたお歸りなさいますかエ。今日は御番でありますか」金五郎「フウ、モウ四ッだから歸らざアなるめえ。なんぞ用でもあるのか」　小三「さやうさねえ、用と申すのでもございませんが、なんだか今朝は御歸し申すのが」　ト なごり惜しげなやうすゆゑ、　金「又そんなことを言つて、とめるのか。けふは顏ッつきがでえぶいゝやうだぜ。なんにしても歸つて又出直して來やう。主人へつとめの間をかゝぬも、親父や祖父さんへの心やすめだ。マァなんでも精出して藥を呑むがいゝぜ」　小三「それでもあなた、今夜はお出なさりやァしますまいヲ」　金「大抵なら繰合して來る氣だが、あんまり遲ければ、明日の朝は是非來るョ。それとも用でもあるなら、さういつておきねえ」　小三「ほんに

それ〳〵、金ばうの背中の灸がまがつてをりましたから、どうぞ直してやつてくださいまし。そしてまだ疱瘡前でございますから、觀音さまの二王さまの股を潜らせてくださいましょ。此頃はあつちこつちに、だいぶ疱瘡がありますさうだから。それにアノ、モウ獨行をいたして、浮雲くつてなりませんから、轉ばずの玉子守と、水天宮さまのお守を懸けさせてやつてくださいまし。爰らは近所に川が多うございますから、水が怖くつてなりません」（ト萬事につけて子を案じる心のうちぞふびんなり。）

金五郎「なんだな、そんな事はいつでも言はれるものを。あんまりいろ〳〵な事をいふから、おれも歸るのがをかしいやうだ。マア、モウ一ぶく呑んでから歸る事とせう」（ト男心にも氣にかゝれば、わかれのつらきも無理なちず。）小三はたばこを吸付けて出しながら、小三「袖引たばこであなたのお足を、無理にとどめた歌妓の時分は、眞のくらうも苦にならず、はやく身まゝになりたいと、樂み盡きてかなしい今の身、おもへば夢のやうでございますねえ」金五郎「さうよ、この子のできねへ時分が、ほんの色事後生樂、むりな口說にすねたり妬いたり、つらいと思ふは逢はねへ晩、ゆうべの恨は今夜の手くだ、おもしろい事もたのしみも、かんけへて見ると昔のやうだ。爺いじみた言ひぐさだが、ア、年はなんでも重らねえ事た。あの時分のやうな身のうへに、もう一度なつて見てえものだ」（ト、ふさぐ心を子は知らず、金の助はあそびにあきけん、金の「おつかアちやん、坊、ばゝアと遊ぶの、モウいや〳〵だよ。なんじよ旨いものお吳よう」小三「アイ〳〵、モウお遊びはいや〳〵かエ。そんならばゝアや、お菓子でもやつておくれヨ」うば「ハイ〳〵。お坊さん、サア落雁をあげませうヲエ」金の「乳母、坊、落雁いや〳〵だヨ。梨子食べたいよ。おつかちやん、佛ちやんの梨子おくえよう」小三「ナニ佛さんの梨子かエ。坊はこのあひだ、お齒が痛々だつたから、信州の戸隱さんにお願ひ申したから、梨子は食べられないからお菓子におしよ。いゝ子だヲエ坊は」金の「お菓子いや〳〵だもの。佛ちやんにあんがちて居る、梨子おくえよウ」（ト少し泣になる。）金五郎「坊や、なぜ其樣にだゝをいふ。梨子は毒だから惡い〳〵。だゝをいつていびるから、おつかアの病氣がわるくなるのだ。おとなしくしてお菓子をたべな、赤いうまいのがあるから。コレ坊ヤ、なぜそんなに似指をいぢるのだ。似指をいぢると手へ灸すゑるよ」金の助「灸いや〳〵、御めんだよウ。おとつちやん似指いぢやないかヤ、何じよ買つておくえよウ」金五郎「ヲゝ、さうおとなしくするなら、旨い物を買つてやりませう。おとつさんはお屋敷へ歸るから、お竹に抱子して、兩國のお橋の方へ一緒に來な。お菓子と、お手遊と、そして何を買つてやらうのう」金の助「アノウお菓子とおもちやと、そイかヤ、アノウ佛ちやん上げる、花々買つてお吳よウ」（トいはれて小三はむねにぎつくり、金五郎も氣にかゝれば、）金五郎「エ、このばうずは、妙な子だのう。なんだといふと佛さんへ買つて上げやう〳〵といふが、氣になる事をいふ坊主だぞ。

マア何でもいゝから一緒に來いく。そんなら小三大事にしな。婆ア氣を付けてくんなよ」（トいひつゝぶりてざうりをはけば、金の助はお竹にいだかれ、さきへ小三「さやうなら御機げんよう。オヤあなた、て〳〵出てゐる。小三は金五郎のうしろより、著物のえりをなほしながら、トいとまごひにも別を惜しめば、金五郎はふりかへりて、金「ナゼ、己がどうぞしたか」）ちよつとこちらを向いてお見せなさいまし」小三「ハイお頭上に何やら芥が」（トとる手もふるへ壁くもり、これがこの世の見をさめかと、）おもへば心も消えぐに、じつと見つめる目に泪、せきくる胸のせつなさを、咳にまぎらす顔に袖、あてて泣く目をかくすなる、心の中の四苦八苦、思ひやるさへ哀なり。（金の助はわけもなく、）金の助「おとつちやん早くお出よう、坊背負ちて待て居るヨ」（トせたげられて金五郎も、せんかたなさに格子戸を、）跨ぐはずみに門口の、石につまづき〳〵、金五郎「ホイ、こいつアしまつた」小三「オヤ、どうなさいましたエ」金五郎「ナニ、鼻緒を踏切つたのヨ。ハテめんようなきのふ買つた雪踏だから、切れる筈はねへけれど、どうも不思議ぢやアねへかのう」（ト又氣にかけて思案がほ、）小三「そんならアノ、昨日お買ひなすつた、お雪踏の鼻緒が、アノ切れましたかエ」金「フウ、こいつアどうも氣がかりだ」小三「エヽ」（トむねにとたへてはつといき、）「あのそんなら、お雪踏をお竹に持たせて、直しの所へおやんなさいましな」金「なアに、二本鼻緒が一本切れたのだから、履いて行つて橋臺で直させやう。サア金ばう、一緒に來な」（ト心ならずも出行きける。）小三は金五郎の後影、見ゆるまで見送りて、名殘の泪のやるせなく、止めかねしをかくては果てじと、思ひかへして食事をば、やう

やうに食べしまひ、（梟枝をつかひながら、氣のぬけし如く、考へて居たりしが、うばにむかひ、）小三「ばゝアヤ、けふは旦那もいろ〳〵御用があるさうだから、モウ出直してお出なさりもしまひし、わたしも氣分が大きによいから、保養がてら今ツから、向島へ行かうと思ふよ。それに此節はモウ、花屋敷の七草もさかりだらうし、天氣はよし、金ばうをつれて、ぶら〳〵と出かけやうよ」うば「それは宜しうございますが、おあんばいの惡いのに、遠道をお歩きなすつたら、又あとがお惡うございませうヨ」小三「ナニ、爰からはそんなに遠くもないものを、ぶら〳〵と出かけたら、氣がはれて却てよからうヨ。向島の姉さんも、金坊が成人したのを見たがつて、連れて來い〳〵と、お文をたび〳〵およこしだから、マア何にしても出かけやうヨ」（ト是より小三は身じたくして下女のお竹を内にのこし、）乳母に金之助をおぶはせて、向島へと出行きける。小三の姉眞名鶴は、富家の隱居に愛せられて、向島の洲崎村なる、秋葉の社のほとり近くの、別莊に住居して、月雪花を友としつ、いと樂々とくらし居けるが、この春隱居は世を去りて、なき人の數に入りしかば、本家の主人も眞名鶴の、便なき身をあはれみおもひ、殊に壯年のことなれば、いづかたへなりとも支度して、嫁入らせやらんと深切に、情厚くいひけれども、眞名鶴は今更緣付きて、榮耀を望む心もなく、勤の身にて年久しく、つらい苦勞も爲あきたれば、たとひ不自田のくらしをするとも、世を物靜やかに送らんこそ、上もなき樂み

なれば、あはれ尼となり佛門に入りて、隱居をはじめ亡親の、後の世をも弔はんこと、生涯の願なりとて、ひたすらに望みけるゆゑ、本家の主もその心操の、淸らかなるを深く感じて、望に任せて、別莊を眞名鶴にゆづり、その庭の中に庵を造らせ、念佛庵といふ號をつけて、佛事をいとなむ補助とし、日々の雜費は月毎におくり、不自由なく暮させければ、眞名鶴は日ごろの望もかなひ、その恩義の厚きをよろこび、浮世をのがれし心地にて、髮を切り尼となり、名を紫雲とあらため、月々に彼庵にて、百萬遍をいとなみつ、佛に仕ふるを身の業とし、行ひすまして暮しけるは、いと〳〵殊勝の事なりけり。頃しも秋の中なれば、庭面に桔梗、女郎花、なでし子、藤ばかまなど、さまぐ〵秋草の咲みちたるまゝ、紫雲は御佛にまゐらせんと、庭下駄をはき下りたちて、花を手折りて居るをりから、枝折戸の外に人音する故、ふりかへりてひとめ見るより、紫「オヤ〳〵、靑柳橋の姉さんだチ。よくマアお出だねえ。サア〳〵こつちへお上りナ。ヤレ〳〵よくお出だ」トさすがしんみのきやうだいゆゑ、よろこぶこと大方ならず。小三も姉の無事な顏を、見て嬉しさのかぎりなく、乳母の背中に負はれゐる、金之助を抱きおろし、手をひきて座數へ通り、あさだまりの挨拶すみて、みやげ物などいだすとき、紫「ヤレ〳〵まことに久しぶりだチ。オヤ御無用におしならよいに、遠方だのにお土產まで。ほんにこのあひだ人をあげた時、おまへがちつと氣色がわるいと、お返事に書いておよこしだから、どういふ樣子かと、いつそモウ案じくらして、ちよつと見舞にまゐらうと思つてゐたが、あいにく私も時候にあたつて、つい〳〵けふまで出かねてゐたよ。まだおまへも顏の色もわるいが、氣分はだん〳〵よい方かエ。そして舟ででもお出のかエ」小三「イヽエ、あるいて參りましたよ。見かけ程心もちは惡くもございませんが、只ふさぐばかりで御座いますのさ。私はモウ手まへにかまけて、御無沙汰ばかりいたしますから、あなたのおあんばいのお惡かつたのを、ぞんじませんでお尋ね申しもいたしません」紫「ナニサ、わたしのはほんの當分の事、モウさつぱりと快いヨ。ほんに金ばうよくお出だチ。ちつと見ない中に大きくお成りだぞ。目つきや口もとがおとつさんに生だねえ」小三「金ばうや、手をついておばさんに、ハイ御機嫌よんようとお辭義をしなよ」紫「アイ〳〵、よくお辭義ができますぞ、利口ものだぞ。サア〳〵おばさんに抱子をおし、うまいものを御馳走するから。オヽよく言ふことをお肯きだぞ。可愛いいねえ」トこの助をひざの上に、いだきあげながら乳母にむかひ、紫「乳母アお出かエ。ハイしばらく。おたつしやでよいチ」ろば「ヘイありがたうございます。まことに御無沙汰さまをいたします。へヽヽヽ。オヤお坊さん、お嬉しうございますかエ。お抱子でようございますチエ」紫「この子もおまへの丹精で、まことにおとなしく成人したチエ。ほんに氏より育てがらとやら、この末ともどうぞ面倒見てやつて

おくれ」うば「イエモウ、お利口なお生れつきで御座いますから、目からお口へぬけますやうで、よその子供衆より御合點がよくまゐりますのさ」紫「ほんにさうだらうチエ。金ばうヤ、おとつさんは御機嫌よいかエ」金「アイ、おとつちやんお屋敷に、お竹内に居ゆヨ」紫「チヽ、お竹は内におるす番で、おとつさんはお屋敷かエ。よくわかるねえ。お常ヤ、お煮花を早くこしらへて、クシテ今さういつた物を取りにやつておくれかエ」下女「ハイ〳〵、只今お煮花もできますヨ。アノお菓子も、三松どんが取つて參じました」紫「そんなら早く爰へ持つて來て、金坊に上げておくれ。そしての、鯛七へさう言つてやつて、金坊ヤおつかさんのお好な、旨い魚を取つておくれヨ」下女「ハイ〳〵、かしこまりました」トにばなと菓子をもちはこぶ。小三「オヤモウおかまいなさいますな。今日は御馳走をいたどきますより、久しぶりでゆつくりと、むかし咄や、うさばなしで、氣を晴すのが何より御馳走」紫「ほんにさうさねえ。女といふものは久しぶりで逢つても、身の上ばなしかなんぞより、外にはなしは無いものさ。マアお茶ができたからお菓子をおあがり。サア金ばう、好ならたんとおあがりヨ」小三「ハイありがたう。左樣なら坊やいたどきな。オヤ〳〵おめづらしい、お牡丹餅でございますかエ」紫「アイ、富貴牡丹といふ道明寺のおはぎサ。そちらにあるのは都鳥といふお菓子で、兩方ながら向島の名物だから食べて御覽」小三「ほんにさやうで御座いますかエ。サア坊、いたどいておたべ。ばゝアにもお相伴させませう」金「おつかちやん、牡丹餅おいちいヨ。坊たんと食べゆヨ」小三「ほんに誠においしう御座いますチエ。乳母とんだよいお菓子だのう」うば「さやうで御座います。此樣なお菓子を、向島で賣りますのを、さつぱり存じませんチエ」小三「さうさ、モシお姉さんエ、これは御近所で初めましたかエ」紫「アイ、直この秋葉さまの裏門の通で、土手へ出る道サ。松花園といふ家で、ちかごろ賣初めたが、とんだ好くするチエ」小三「さやうで御座います。實に美味ございますから、坊が大悦びで、たんといたどきます」紫「それはよかつたチエ。金ばう、たんとおたべヨ。乳母は酒の方だから、今にお肴が來ると、一ト口あげるヨ」うば「イエ、御酒よりか又、このおはぎと都鳥は、結構でございます。そして手綺麗でございますから、おつかひ物やお土産などには、よろしう御座いますチエ。これは今にはやり出しませう」紫「さうサ。わたしの所の本店なぞでも、人をつかはさる度毎に、いつでも買つて來いとおつしやるさうさ。何所でも評判がよいからはやつて來るのサ」小三「ほんに向島も、今ぢやアも都になりましたチエ」紫「此節はおまへ、梅屋敷の七草が盛だから、たいさう見物の人が出るヨ。それに蓮華寺の大師さまのお庭がよく出來たから、だん〳〵こつちも賑やかになるチ」小三「左樣でございますチエ。私も些休みましたら、坊

を連れて、梅屋敷の七草から、蓮華寺の大師様へお參り申しませう。今年は旦那も前厄でございますから、お身のうへに何事もないやうに、金ばうの行末やわたくしの、後の世の助かるやうに、よく祈つて參りませう」（トほろりと泪こぼすにぞ、紫雲も何とやちあはれになり、）紫雲「ほんにおまへもわたしに似て、後生願ひだと見えるねえ。金ばうは退屈だらうから、三松と一緒に、お庭の池の緋鯉に、お菓子でもやつておあそび」（トいはれて金の助はいそ〳〵よろこび、うばに手をひかれて庭にぞりたち、）丁稚の三松を相手にして、池のほとりをめぐり歩き、緋鯉鮒の子などおひまはし、餘念もなくぞ遊びゐる。

三編中卷

第八回

その時紫雲は長羅宇の、烟管に多葉粉を吸つけて、（小三に出せば、手にとりながら、）小三「ほんにお羨ましいはあなたのお身、うるさい世事の御苦勞もなく、朝夕こんな靜なところに、憂世を捨てての樂なおくらし、わたくしもどうぞ三日なりとも、佛につかへて死にたいと、心に願つて居りますが、身の罪障が深いかして、それさへかなはぬ憂苦勞、なんの因果でござりませう」（ト始終なみだにひせびがち、紫雲も何となくむねせまり、）紫「なんのわたしの身の上が、うらやましいとはおまへの僻事、世に在りてこそ人は花、金ばうといふ實を結んで、苦勞はあらうが又樂み、旦那も人におすぐれなすつた、發明なお方ゆゑ、行末はそれこそ安樂だわヲ。おもしろい事もをかしい事も、たのしみもかなしみも、知らぬこの世の世捨人が、なんの本意であるものかヲ。是も定まる因緣と、思つて居てこそ又安樂、姉妹二人が同じやうに、浮世を捨てては亡親たちの、菩提の爲と思はれやうが、却てそれでは不孝の罪、せめておまへは人なみに、世を過ぎてこそ兩親が、草葉の影からおよろこび、かならず〳〵わたしが身を、うらやまないで金ばうや、旦那を朝暮大切に、うき苦勞をもしん

ばうして、末の榮をたのしみに、時節をまつのが樂の種、すこしの事をきな〳〵思つて、あんまり苦勞ばつかりおしだと、大わづらひにでもならうも知れず、氣をきりかへて私にも、苦勞をさせておくれでない」（トしんみのことば身にしみて、うれしさあまるかなしさの　泪を袖に包みかね、袂をぬらし暫時は、詞さへ泣くばかりなり。紫雲はこれを案じわび、倘や金五郎が小三を見かぎり、お雪にこゝろを移せしゆゑ、胸を苦しめ氣をつかひて、このわづらひの出しかと、おもひすごして　ひざすりよせ、）「おまへのふさぐを見るにつけ、病の根が知れないから、どうもわたしは案じられるよ。癪や血の道でふさぐのなら、案じるほどの事もないが、何やらひどく氣をいため、心の疲のわづらひかと、見たはひが目か知らないが、思案に落ちない事でもあつて、一人で心勞してゐると、ろくなことは考へ付かず、苦勞にくらうを增すやうな、つまらぬ事を考へ出すから、だん〳〵病氣は重るとも、快氣方はすくないものさ。他人は格別眞身のわたし、世を捨てし身といひながら、苦勞な事があるならば、お前の胸を隱さずに、はなして聞かせておくれなら、女の智惠の淺はかでも、そこは膝とも談合づく、へだてぬでこそ實の姉妹。からす啼がわるいにつけ、夢見のわるいや何かにつけ、おまへの事が氣にかゝり、後生を願ふさまたげと、おもへど凡夫のかなしさに、浮世を捨ててもやつぱり苦勞、心の休まる間はないわ子」（トまことをあらはす言葉の中に、なさけと泪をふくみたる、　姉の意見のありがたさに、小三は始終涙にくれ、胸もはりさくばかりにて、顏もえあげず居たりしが、やう〳〵袖になみだをはらひ、小三「眞實眞身の妹と、おほしめしてくださればこそ、お案じなすつての段々のお言葉、うれしいにつけ悲しいにつけ、なんであなたを隔てませう。この世に杖とも柱とも、力に思ふはあなたおひとり、浮世に人は澤山あれど、考へて見るとおまへさんや、わたくしほどな因果者は、あんまり外にはありますまい。生れ落ちると親にはなれ、姉妹二人揃ひもそろつて、古郷をよそにはるゞ〳〵と、知らぬ東へさまよひ來て、うき川竹のながれに沈み、苦勞にくらうを爲ぬいたおげくに、あなたは行末たよりのお人に、はやくお別れなすつたゆゑ、お若い身そらに世を捨てて、附會しらぬ佛の道、夫にひきかへ私は、恩と情を捨かねし、浮世の義理にせめられて、日陰に咲きし徒花の、散りてゆく身はいとはねど、まだ撫子も芽生にて、育てあげぬが一ッの氣がかり」（笑）「そのなでし子が氣がかりとはエ」（トとがめられてこゝろづき、）小三「サア、その氣かかりとは金坊が事、とかく虫持で病身ゆゑ、明けても暮れても苦勞になり、どうぞ丈夫に育てたいと、思ひましても子供の事、何が食べたい彼が食べたいと、それは〳〵日がな一日、見る程の物食べたがり、ねだり事も三度に一度は、食過ぎぬやうに氣をつけて、騙し賺せばぐわんぜもなく、いやいやをして泣きますから、ツイ可愛さにひかされて、灸でおどすより早でまはしと、ねだるお

菓子をあてがひますと、又食べすぎてはお腹が痛い、痛い〳〵の食傷の度毎に、虫氣でいつもちよつとは直らず。一體ひよわい生れだのに、わたくしの乳で育てぬから、猶病身になりまするとおもへば不便がいやまして、よその丈夫の子供のやうに、折檻もしず、つよくも叱らず、わんぱくそだちが增長して、手にのらぬ程のいたづら者に、なりましたせゐかして、些づつ丈夫に育つやうだと思へば、旦那は又行儀がわるいの、育てがらが惡いからのと、あの子の身の爲をおもつて、小言をおつしやるも無理ではないが、まだやう〳〵丸三歲に、なるかならぬのふところそだち、生れ落からちやほや言つて、あんまり大事に爲すぎたゆゑ、わがまゝ氣まゝに育つ筈、今更急にせつかんしたり、泣く時あたまを批たりして、きびしくしたらわが儘も、少しづつは直りませうが、只でさへひよわい子が、それこそ驚風の虫でも引出し、ほんとうの病身になりますだらう。可愛いゝにつけ不便につけ、苦勞のやすまる隙もなく、氣で氣をつかひます故に、今の病氣もおこりましたの。是もわたくしが氣がちひさいから、せずとよい苦勞を餘計にいたして、壽命をちゞめますも心がら、とても長生はできませんが、思へばまことに世の中ほど、うるさいものは御座りません。それゆゑにこそあなたのお身が、お羨ましうござります」と涙ながらのかこちごと、聞くもなみだの目を袖「ほんにさう言へばさうでもあらう、けれども

それはほんの一隨。はやい譬か世の中に、子寶とさへいふものを、大切な金錢よりも、子ほどまさつた寶はないと、誰しも知つた世の諺、子を持つた身に苦勞の絕えぬは、お前ばかりではあるまいし、みんな世間のならひだわ子。高貴でも下賤でも、子にひかさるゝは親の常、マアア見るかげもない橋の上の、むしろ蒲團に世をおくる、食ふや食はずの乞食でさへ、子を大切に可愛がり、寐る目も寐ずに育てあげても、出世の出來ぬ乞食は乞食、上を見れば方圖がないから、貧しいものを思ひやれば、寒い目もせず不自由なく、くらしてゐるは安樂さ子。欲に限のない世の中ゆゑ、十分なことも不足におもふは、人情だから仕方もないが、おまへなんぞも日かげの身で、儘にならぬを苦におしだが、滿つれば缺けるといふ通り、十分すぎた事はないもの。人のほしがる金銀が、有り餘るほどの大家には、子を欲がるほど子が出來ず、貧乏人の子澤山を、うらやむと云ふことだから、金錢づくにも換られぬは、金ばうといふアノ大事の子寶、よし病身の生れつきで、人の知らない苦勞をするも、親となり子となるほどの、因緣づくだとあきらめて、面倒を見て育てなくつては、親の役目がすまぬといふもの。サアそれだから少しの事を、くよ〳〵案じて煩つては、おまへの身にも壽命の毒、彼子の爲にもなるまいから、氣を引立てて、煩はぬ樣に、身を厭ふのが肝心さ。世に藥も何にもない、わたしが身をうらや

まずと、金ばうの行末を神佛に祈つて、成人させるがおまへの手柄、女の道の缺けぬといふものの。しかし子もちの身でありながら、旦那の爲の手助に、身すぎ世すぎといふものゝ、人の機げん氣づまを取る、今の身での座しき活業は、ア、さぞいやだらうつらからうと、わたしがむかしの身を思つても、おまへの心が悟られて、もう〳〵胸もはりさくやう、何かにつけて苦が絶えぬから、ふさいで病氣のおこる筈。とはいふものゝわたしと違ひ、おまへは身ひとつといふではなし、幾度もくどく言ふやうなれど、あんまり苦勞に苦勞をかさねて、今のわづらひが大病になると、もしもの事がありもしまいが、さういふ時にはわたしはもとより、金ばうも便がなくなるから、どうぞこの末は願でもかけて、煩はぬやうに爲ておくれ」（トさすが姉だけ理をわけて、いもとをあはれむしりたきものぞかし。）小三「その御意見につきまして、申すやうではございますが、人の命はけふが今日、明日があすとて定まらぬ、世のならひゆゑわたくしが、けふが日もしもの事があらうや、知れぬ生身のことなれば、逆さまながら御回向を、受けます事もあらうも知れず、達者で居つてもなき後でも、眞身はあなたおひとりゆゑ、何彼につけて金ばうが事を、どうぞおねがひ申しますから、わるい事はどの樣にも、お呵りなすつてくださいまし」（ト子にまよふゆゑひたすらに、たのむ言葉ぞあはれなり。）紫「なんだエ、モウ、そんな哀れつぽい事はいつておくれでない。姉となり妹と生れて來たからは、

力になつたりなられたりするのは、そりやァ言はないでも知れた事。もう〳〵そんな愚痴はやめて、金坊をつれて梅屋敷へでも行つて、ちつと氣ばらしをしてお出」（トなぐさめるをりから金の助も、庭のあそびにあきたるにや、）乳母にいだかれ座敷へ來れば、紫雲は抱きつあやしつして、わが子のごとくに慈愛み、是よりみな〳〵もろともに、梅別莊へゆかんとて、内には下女と下男を、殘して小三と紫雲は連立ち、花屋敷より蓮華寺の、大師へ詣に出行きしが、程なくして立歸り、紫雲は種々の美味をとゝのへ、みな〳〵に夕餉をすゝむる、馳走に時を移しければ、秋の日のはや西にかたぶき、入相ちかくなりしかば、小三は家にかへちんと、せるなどしまひながら、き　小三「ヤレ〳〵今日は久しぶりで、つひになくゆる〳〵と、身のうへばなしに鬱をはらし、まことに保養いたしました。日の暮れるにも氣がつかず、盡きぬはなしをくりかへして、大きに遲くなりました。乳母、おまへも支度がよいなら、モウそろ〳〵歸らうぢやァないか」紫「アアおまへ、よいわチ。それに今日は遲くもなるし、内にさしたる用がなくば、又かういふよい首尾はないから、今夜一ト晩泊つてお出な。病氣がよくなつて、座敷へ出るやうになると、又出るといふが手重になつて、いつ來られるか知れないから、寐物がたりにゆつくりと、身の上ばなしの跡をついで、ふさぐ胸をはらしてお出よ」小三「私もたまたまではございますし、盡きぬお名殘だからどうぞして、泊つてまゐりたいと存じますが、今

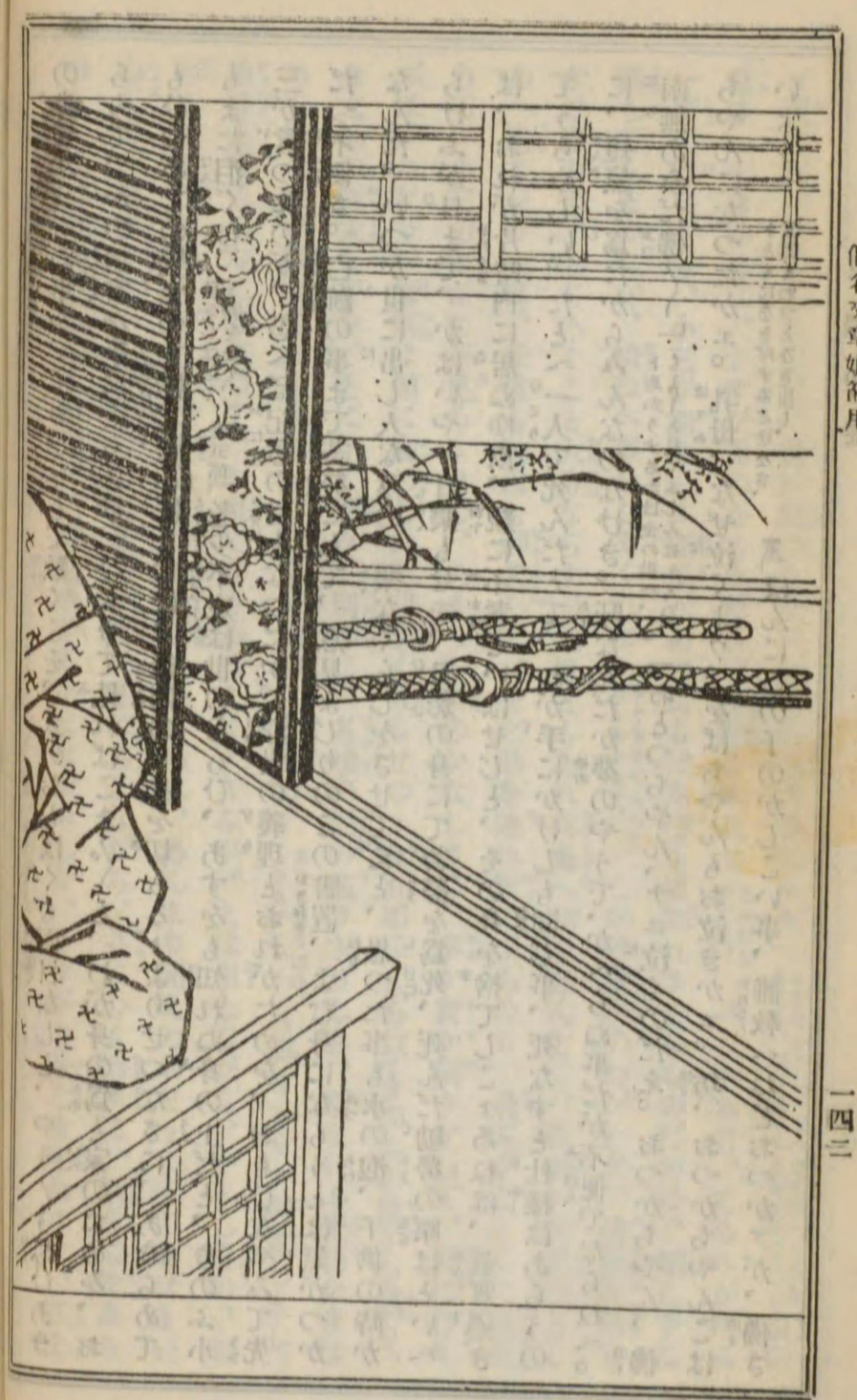
夜わたくしが留守のあとへ、ひよつと旦那がお出なさると悪うございますから、どうも歸らずはなりますまい」鯉「ほんにさうさねえ、旦那の御機げんをそこねても悪し、一ト晩でも儘にならないことだねえ。そんなら舟でおかへりな、しかし搖れてわるからうから、駕籠の方がよからうか」小三「ナニ、それにも及びません。ずゐぶん歩いてまゐられますから」鯉「それでもおまへ氣色がわるいに、往還ではくたびれるヨ」小三「いゝエ、却てすこしづつ頭痛のいたす時は、歩くはうが勝手でございます」鯉「さうか子、そんなら金ばうばかりも泊めてお出な。なう金坊、おまへは、乳母と爰へおとまりよ」金「アイ、坊、をばちやん所へ、寐仕て、お池の龜ン子つやまいゆよ」小三「オヤ、そんなら坊はおとなしくして、おとまりヨ。ばゝアのいふ事をよくきいて、だゝを言つてすねるではないヨ。アノ内に居る樣におこるとの、をばさんが、泊めてくださらないヨ。あなたが可愛がつてくださるから、直に泊らうと申シまして、おくめんが無くつてこまります」鯉「それだからまことに可愛いゝのサ。人見しりをする子供は、愛想をしても泣出すから、うつかり口もきけないが、この子のやうなにこやかな、可愛らしい子はありません」小三「坊はまことに仕合ものだよ。こんな野廣い所へ泊めていたゞいて、おつかアよりあやかり者だの。そしてアノ坊や、おつかアが居なくなつても、たづねて泣くのではないよ。泣くとの、直灸だよ。をばさんの所には灸がたんとありますから、おとウなしくしてお出よ」金「アイ、坊おとなチくすゆが、おつかちやんどこィお出だ」小三「おつかさんはの、アノ内が遠ウいから、歸らないとおとつさんに叱られるよ」金の助「をいだきあげかはいゝこの子のかは見るも、是が名殘か悲しやと、いはねど胸にせきあげて、顔を見つめて目に涙、しばし言葉もなかりしが、疑はれんかと心づき、泣く目をかくしわちひがは、小三「ほんに子供といふものは、何をいつても無我夢中、後生樂なことでありますねえ」下へおろし、帶〆直す顔つきも、常にかはりし樣子ゆゑ、紫雲も乳母も何となく、小三の身のうへ案じられ、顔見あはせて、鯉「どうもわたしは今ッから、おまへを獨かへすのが、心にかゝつて落付かぬから、今夜は泊つて明日の朝、はやく歸つたらよささうなものだ。なうばゝアア」ろば「さやうさ。旦那だとて一ト晩ばかりの事、譯をおはなし申しましたら、お腹立もありますまいから、是非今夜はお泊んなさいましな」いれず、小三「さうだけれど、けふこなたへ來る事を、旦那におはなし申さなんだから、泊つてはどうも濟まないよ。それに是非、おはなし申さねばならぬ事もあるから、三松どんでもお借り申して、ちつともはやく歸らうよ」ろば「さやうならおばうさんも、お歸りがようございます。小僧さんばかりでは、おかへし申されません。わたくしもお供いたして、龜ン子は又明日、見

にまゐりませう、ねェお坊さん」金「フウ、ばゝア、坊歸りの、いや〳〵だよ。龜ン子の所へ泊ようヨウ」ゝば「あゝだもの、どうも困りきつた事た。どういたしたら可からうやら」蜜「そんなら斯うしませう、坊と乳母はお泊と極めて、おつかさんには三松に久助を附けて上げやうよ。それでは案じる事もあるまい」ゝば「さやうならどうぞさうなすつてくださいまし。ヤレ〳〵それで落つきました」小三は紫雲と金之助に、名殘のことばが置みやげと、なみだを袖にかくしつゝ、小三「さやうならあなた御機げんよう。御厄介でもございませうが、金ばうが事をおねがひ申します。ばゝア、そんならたのんだよ。金ばうヤ、おつかアはモウ行くから、おとなしくして機げんよくお遊びヨ。あば〳〵だよ、おさらばよ」トのこるかたなくつど〳〵に、いとまごひして立出れど、輪囘の絆にひかされて、盡きぬ名殘のやるせなく、紫雲も乳母ともろともに、金之助の手をひき門口まで、別を惜み送る身より、送らるゝ身はこの世から、くらき冥途の旅の空へ、消えゆくものと悟りしも、さすがは尊き法の道を、受けたる身ゆゑ御佛の、眞身の姉に導を、させて給はるものにやと、ふり歸りては目に涙、哭音をしのぶ親鳥の、雛に別るゝ思にて、氣も絶々になる鐘の、無常の風にひどき來て、耳をつらぬく入相に、おどろかされて氣を取なほし、心弱くてかなはじと、別れてこそは歸りける。さる程に金五郎は、今朝小三に別るゝ時、常にかはりて名殘が惜しまれ、

歸る心のつらかりしが、主人持つ身の儘ならねば、言葉を契りて別れしかど、その夜の夜詰の番にあたりて、出づる事さへならざるゆゑ、心ならずもとやかくと、案じわびてもせんかたなく、明くる夜遲しと待かねて、御殿より内へ歸りても、胸さわぎの常ならねば、食事さへせず著物を著かへ、青柳橋まで急ぎ來る、足も空に飛ぶがごとく、小三の許へ來りしは、やう〳〵日の出の頃なるべし。まだ入口の戸も開けねば、さては何事もなかりきと、少しは心もむちつきながら、戸口をとん〳〵と打たゝき、金五郎「オイお竹、起きねえか。モウ日があたつてゐるぜ。お竹〳〵」下女はもどろき、お竹「ハイ〳〵、旦那さまでござりますか。オヤオヤ、大きに寐すぐしました」トかけがねはづして戸を開くれば、金五郎は内へとびこんで、金「坊主はどうした、まだ起きねえか。小三の病氣が惡かアなかつたか」お竹「ハイ、昨日は大きにおこゝろよいとつて、お坊さんをお連れなすつて、向島へいらつしやいましたが、お坊さんは、乳母どんと御一所に御逗留で、お獨あちらの男衆に、送られてゆうべお歸りなさいました」金「ナニ、きのふ金ばうを連れて、向島へ行つたか。よく歸つて來たのう。夫ぢやアくたびれて、まだ起きねえのだらう」三のねやへ行き、からかみあけて、ひとめ見るより、「ヤ、、、、、」トびつくりぎやうてん、尻居に倒るゝ物著に、下女のお竹も何事にやと、かけ來りて樣子を見れば、小三は白無垢を身にまとひ、いつの間にやら自害なしけん、朱に染みて死したる體に、おなじくわつと駭きて、倒れてわな〳〵ふるへ居る。金五郎は狂氣のごとく、金「小三、ナ

ゼ死んだ。どうしたのだ。氣が狂つたか。コレ小三。小三々々」きれて、顔の色つやあをざめて、虫の息さへなきゆゑに、さすが男の心もみだれ、泣聲くもらせ　金「コレお竹、てめへが内に一所に寐ながら、小三が斯ういふ樣子があつたら、ちつとは知れさうなものだのに、知らずに殺してしまつたか、情ねへ事をしてくれた」ことわりなり。この時粂川のわかい者、清助佐助もかけ來りて、おどろくこと大方ならず、何はともあれ向島へ知らせんとて、佐助を紫雲のところへ走らせければ、紫雲も乳母も仰天して、金之助を連れ駕にうちのり、飛ぶがごとくに馳來りて、小三のすがたを見るよりも、あまりの事のかなしさに、夢か實か辨きかねて、涙にむせぶばかりなり。紫雲は顔に袖おしあて、聲くもらせつゝ金五郎に、小三がきのふの樣子を語り、金之助の行末までを、とにかく憑みて別路に、名殘の泪の盡きざりしも、斯ういふ覺悟をきはめしゆゑか、情なやかなしやと、歎くかたへに書置の、「コレマア御覽じまし、遺書までこんなになすつて、お果てなさるはよく〳〵な事。とは申しながら、いとし盛の、お坊さんをこの世へ捨てて、後のなげきを思しめさぬは、あんまり聞えぬおどうよく、おせまい心でござりました」むせび居る。金五郎は男子ながら、共に心も消々に、歎きに沈みうつとりと、夢現ともわかぬまで、惜しさやるかたなかりしが、さすがさかしき生れゆゑ、武士の身でかへらぬ事を、くりかへして歎くこそ、人のおもはくも面目なしと、やう〳〵思ひあきらめて、かの遺書を手にとりあげ、ひらきて見ればこまぐ〳〵と、わが身の爲と家のためを、おもひつめての覺悟の文體、讀めばよむほど後悔の、身を切らるゝよりせつなさに、あきらめてもまた泪ぐむ、目をしばたゝき、金五郎「老少不定は世のならひ、あすをも知れぬ身の上だと、きのふ小三が言つたのが、思へば記念の言となつたか。浮世の義理とおれがためを、おもひなやみて先だつ不便さ。亡跡の事まで苦勞にして、意見まじりのこの書置、よむ身にならうとは氣がつかなんだ。いつか世に出し人なみの、樂なくらしをさせてえと、思つた事も水の泡、子供の時からけふが日まで、かはいや一日樂もせず、日影の身にて苦勞を爲死、死んだ劬勞の原はといへば、おれが片時内に居ぬゆゑ、親に不孝といはせじと、その身を捨てしこゝろねは、眞實過ぎてうらめしい。たとへ一人で死んだとて、わが手にかけしも同じ事、死なずと仕樣はあらうのに、短氣を爲たからみんなのなげき。吁なんだか夢のやうで、かへらぬ事だが不便でならねへ。南無あみだ佛〳〵」とゑかうするかは金の助は、つく〳〵と見てふしんにおもひ、「おとつちやん、ナニ泣くのだえ。おつかちやん、佛ちやんになつたかエ。乳母、なぜ泣くよウ。をばちやんもお泣きかエ。坊、おつかちやんこはいよウ」　紫雲もわつとなき出し、「ほんにこの子のかしこい事、誰教へねどおつかァが、佛さ

味噌人
紙し



んになつたとは情ない。こんなかなしい事を見るのを、虫が知らせたせゐかして、きのふ歸すが氣にかゝり、乳母と二人でとゞめたが、あの時歸さずばなんのマア、あつたら命を捨てさせやう。歸すも約束歸る身も、みんな定まる因緣ながら、薄命な妹が身の果や」と、みなみな歎きかなしみて、涙に壁も浮くばかり、哀れといふもおろかなり。斯くては果しなき人の、爲にならじと金五郎は、男心を取直して、紫雲をいさめ乳母をはげまし、野邊の送もねんごろに、七日々々の訪とむらひも、手厚く法會なしにける。かゝりし程に金五郎は、をさなき金之助が母に別れて、便なき身となりしを案じ、かねて小三が存生より、紫雲の許へ預けくれよと、たのみし言葉もあるゆゑに、日がら立ちて金之助を、乳母もろともに向島へあづけ、青柳橋の家は取かたづけ、殘るかたなく心を配り、をり〳〵紫雲の庵を訪らひ、金之助を愛しながらも、只小三の事忘れかね、家に在る時は部屋にのみ籠り、お雪にだに是等の始末を、祕しかくして語ることなく、氣のひき立たぬも理なり。白翁はじめ家内の者も、金五郎がこの頃にては、急にうつて變りしごとく、夜あそびにも出でざるゆゑ、さては身持の直りしかと、よろこぶもののいつとても、何か心に案じ顏、屈託らしくふさぐのを、見るにつけ又白翁は、老の身の思ひ過しに、倘金五郎が短氣から、小三に怪我をさせしも知れず、それゆゑにこそふさぐのか、小三の身のうへおぼつかなし、いかなる事かたづねゆき、樣子を聞きて安堵せんと、ひとりひそかに兩國の、小三が家へぞいたりける。

三編下卷

第九回

朝夕に、木々の落葉を雨と見つ、冬をば告ぐる寂しさに、心も空も時雨月、訪ふ人もなき草の戸へ、友さそひ來て音信ふは、水鶏にあらぬ小雀の、ちょよはょよと啼く聲を、聞くにつけても哀添ふ、紫雲は小三の亡後を、弔ふひまに金之助を、なぐさめてもまだ聞わけの、泣いては母を尋ぬるゆゑ、不便の增して可愛さに、泪のかわくひまもなし。母におくれし金之助は、紫雲や金五郎と もろともに、七日々々の寺まゐりに、小三のはかへ花をたむけ念佛となへてをがむをば、見やう見まねの子心に、内にかへりてあそぶにも、さすが血筋といひながら、菊の花など折りて來つ、庭に立てたる石どろろへ、たむけてちひさき手をあはせ、金「なんまいく、のトわけわからねどをがむをば、見るにつけ聞くにつけ、乳母も紫雲も俱なみだ、金之助をいだきあげ、紫「これ金ばうヤ、又そのちやんなんまいく。ばょァこょへ來て、なんまいく爲なよ。をばちやんもお出よウ」んな事をして、をばさんを泣かせるのかエ。ァ、栴檀はふた葉とやら、やがて成人したならば、孝行者にならうのに、いたいけざかりのこの子を捨てて、死んだ小三が心の中、マァどの樣につらかつたらう。思ひやるほど後生のさはり。ァ、南無あみだ佛あみだ佛」トつまぐるじゆずもしめりがち、うばもなみだの目をぬぐひ、うば「とてもかへらぬ繰言と、思ひ直し氣を取なほしましても、お可愛さうな事をいたしま

した」トかたるもはなすもなみだゆゑ、金之助はたいくつして、金「ばょァ、をばちやん所モウいやだョ。面白くないかヤ、家行かうよウ。おつかちやんへ行かうよウ」うば「又そんな事をおつしやるかよ、お聞わけのわるい。こょがお坊さんのお宿でございますから、家へ行かうくとおつしやるものでは御座いません」金「フウ、坊の家爰でないよ。おつかちやんへ行かうよう。をばちやん、ばょァいけないョ。坊、家へ歸やせないよ」紫「ヲヽさうかエく、わりいばょァだぞ。ァヽしかし騙しすかしても、まだぐわんぜもない子供だから、家へ歸らうといふも無理ではない。小三が座敷活業で、なんぼ傍には居ない勝でも、三日と離れた事もないのに、やがてもう五十日あまり。賑やかな所で育つた子が、こんなさむしい所へ來て、鮒鯉や龜の子が相手だから、どうでも遊にあきるはず。コレ金ばうヤ、おまへは利口ものだから、をばさんの言ふことをよくお聞き。ァノ、おまへのおつかさんはの、それはく遠ウい所へお出だから、モウ家には誰エもお出ではないよ。それだから家へ行かうくといはずに、をばさんの所にいつまでも居るのだよ」金「坊のおつかちやん死んだから、お寺へ行ちまつたかエ」紫「アイ、さうサ」金「夫だから坊の家無ちくかエ」紫「さうサ、よくわかるぞ。それだから爰が坊やの家だよ」トうばとふたりでなぐさむる、「モシあなたへ、どこのか御隱居樣が、お目にかょりたいといつて、入らつしやいましたョ」紫「さうかエ、そんならど

なただか、マア庭口からお通し申しな」下女「ハイ〳〵」ト立つて庭口へまはり、しをり戸開きこなたへと通せば つゐをつき〳〵入り來るは、金五郎がぢい白翁なり。

臼「ヤレ〳〵よい御住居ぢや。マ、御免くだされ」座になほりて、「偖ハヤわしは金五郎めが祖父で御座るが、たしかこなさんは、小三どのの姉御といふことゆゑ、聞きたい事、はなしたい事、山々あれば孫めにかくれ、わざ〳〵尋ねてまゐつたが、おさし合なお客はござらぬか」紫雲もよろこびながらなにか樣子もわからねばたゞいんぎんに手をつかへ、「これは〳〵、どなた樣かとぞんじましたら、金五郎さんのお祖父さん、ようマアお出あそばした。何にも御遠慮なものは居りませんから、何なりともお心おきなく、おはなしなさるが宜しうござります」トやさしきことばに白翁は、老の目やにをふきながら、紫雲の顏をうちながめ、臼「ヤレ〳〵、姉妹とはいひながら、小三どのに生うつし。おまへの顏を見るにつけ、涙がモウ、さきだつやうぢや。扨何から申さうやら、心のうちが取込んで、前後するのも老の癖、退屈ながら一ト通り、はなすを聞いて下されや。その仔細といふは、知らしやつた通り、不思議な緣で金五郎と、小三どのと深うなり、たがひに思ひおもはれゝばこそ、深切づくが苦勞のたね、大概に惚合つてゐたならば、人のおもはく世の義理にも、かゝはらずに樂みだらうに、あんまり可愛がりいとしほがられたから、孫めもその情にまようて、うちを外の夜どまりばかり。一ッづつ年はとれども、放埒が直らぬ故、止のつまりが案じられて、意見はしても糠に釘、豆腐にかすがひ、きかぬ

が儘よと、捨てて置いては爲にならず。刃物も折々磨がなければ、錆付いて切れぬ道理。その錆を落すには、曹通の世事の合砥では、とても切れる事ではないと、推量をして見る時は、わしが心の荒砥にかけても、切らねばならね浮世の義理。お雪といふ孫娘と、祝言までさせたから、とても添はれぬ惡緣と、思うたゆゑに孫めにかくれ、ア、いつでかあつたげな、小三どのの家へ尋ねゆき、はじめて逢うたその席で、よろこばせもせず孫めが身の上、かう〳〵いふ譯あれば、長うとは言はぬほどに、いやでもあらうが暫時が間、どうぞ緣切つて下されと、無粹なむごい賴をば、聞いて涙にむせながら、義理と恩とを聞わけて、ふつつり思切りましよと、いはれた時のわしが胸、うれしさ餘つて不便なは、小三どのの心の中、さぞつらからう悲しかろと、おしはかられて侶なみだ。ア、浮世が儘になるならば、容貌といひ利發といひ、やさしい心の生れつき、孫めと夫婦にしてやつたら、さぞマアたがひに嬉しがろと、思つたばかりでそれも叶はず、是非も泣く〳〵歸つたが、それから後は金五郎めも、そは〳〵する樣子もなく、家にばつかり居るゆゑに、偖は心が直りしかと、家内の者がよろこんで、機嫌をとるほど鬱ぎ顏、じれては部屋にとぢこもり、何か屈託なやうすを見ては、又案じるが親の常、兩親の者もお雪めも、同じやうに苦勞がれば、わしもやつぱり氣にかゝり、考へて見るほど合點がゆかず、も

し金五郎がわか氣の癖で、愛想づかしの腹立まぎれ、疵でも付けて騒動を、出來した故にふさぐかと、思つて見れば片時も、案じに胸がやすまらず、わざ〳〵青柳橋へ尋ね行きて、見ればおもひもつかぬ人の、栖家となりて勝手口も、變つた事で引越せしかと、あたりの人に尋ねしに、小三どのの知る人にや、子までなしたる身ながらも、男の爲と義理づくで、身を捨てられたあつぱれ貞女、近所の者までその當座は、皆惜がつて泣きましたと、泪ながらの物語、聞いて突胸のわしがびつくり、悲しさ不便さやるせなく、その捨てられし子の行先、聞けば眞身の姉御のところへ、引取られしといふ事なれば、悔もいひたし樣子も聞きたさ、孫めが顏も、イヤ孫ではない曾孫であつた、見ねば心も落つかぬゆゑ、駕籠を飛ばせてやう〳〵來ました。子まである身と知つたなら、なんのむごく緣切らせう。なま半つゝみ隱されたが、今となつては却て恨、年に不足のないわしが、長命せずばこの樣に、かなしい泪はこぼさぬもの、なんの因果で生延びたか、おもへば年が恨めしい」ト老のなみだをくりかへし、愚痴になるのも道理なり。紫雲もあらまし聞取るうち、ともに泪をも誘はして、紫「ほんに妹が薄命は、約束事とは申しながら、子までなしても日かげ妻、一日半時人なみの、息をもつかぬ苦勞を爲死。わたくしとても眞身といふは、天にも地にも小三ひとり、力におもふ甲斐もなく、杖にはなれし今のかなしみ、わすれ紀念の金之助で、

すこしは憂さも晴れますが、まだマアまことにぐわんぜもなく、明けても暮れても母を慕ひ、泣くにつけ、すねるにつけ、達者で居たならどうかうと、思出しては同じやうに、泣いて泪のかわく間は、ほんに一日もござりません」白魯「イヤモウ、そりや言はるゝまでもない。お前の胸を推量すると、わしが胸もはりさくやうで、矢も楯もたまる事ちやない。マ、マ、それは左もあれ、孫めが忰はどこに居るか、ちよつと逢ひたい、逢はせてくだされ」紫「ほんに左樣でござまいました子。金坊は奥においでかエ。乳母一寸連れておいで」トよびたてられて金之助は、うばよりさきへかけきたり、金「をばちやん、坊、おとつちやんお出だと思つたヤ、餘所のおぢいちやんだ子」紫「是はしたり、よそのお祖父さんではないヨ。是は坊ヤのお祖父さんだから、手をついてお時儀をおしよ」白「ヤレヤレ、おとなしいよい子ぢや。ドレ〳〵、祖父の側へ來やれ。オ、よく言ふことをきくぞ。そんならお土產をやりましよ。サア〳〵手を出しやれ。オ、てへ〳〵がよく出來たぞ。ヤレ〳〵可愛いゝ好い子ぢやナア」トやうかん一トきを出しやれば、いただいてうれしさうに、紫「をばちやん、コレお菓子、お祖父ちやんお吳だ。有難うごじやイまちゆ」紫「オヤ、よいお菓子をおいたどきだの。よく忘れずにお禮を申したぞ。よいお祖父さんを持つて、坊は仕合ものだぞ」白「ハ、、、、、イヤ、この坊ヤを見るにつけ、はじめて逢つたわしでさへ、可愛くつてならぬもの、いくら疾深く意見をしても、金

五郎めが聽居らぬも道理かエ。まして小三どのは女の事、このマアいたいけな子を措いて、飽きもあかれもせぬ中で、男のためと身を捨てられたは、貞女ともあつぱれとも、賞めても是が稱め盡されうか。しかし眞身のこなさんが、身に取りてはこの爺を、鬼とも蛇とも惡魔とも、さぞマアにくいと思はつしやろ。ガ、その言譯ではなけれども、この子を家へ引取つて、晴れて金五郎が忰と披露し、小三どのの亡跡も、ねんごろに弔はせましよ。せめては夫をなぐさめに、思ひあきらめてくだされ」トなみだふき〳〵いひければ、紫雲もうれしさかぎりなく、泪のとめどもなき顏あげて、「だん〳〵厚い思召、何とてお恨み申しませう。みんな過世の因緣ゆゑ、どうも仕方もございません。それにつけても姉妹が、身の上のあらましを、おはなし申すもお恥しいが、わたくしどもが生立は、かやう〳〵でござります」ト兄弟二人母なきゆゑ、小三が身は生れ落ち上り、文之丞に養育せられ、わが身も共になさけにて、親にかねをさづけられし、その惠にて里に行きしが、早く父にも死わかれ、里親にだまされて、うき川竹に沈みし事、小三も金五郎と共に育ち、たがひに末を契りしに、金五郎は本家へ養子となれば、小三は便なき身をかこち、心狂ひて鴨川へ、身を沈めしが不思議にたすかり、惡者の手にわたりて、つひに同じ花街へ賣られ、唄妓となりてくらすうち、緣ありて金五郎にめぐり逢ひしより、二世をちぎりて深くなり、つひに子どもの出來しゆゑ、身請をされて圍はれし事、又その身も同じころに、さる人に請出され、この別莊に

養はれしか、便の人に早くわかれて、頻に佛門の志願おこり、髮を剪り尼となりつ、世をのがれてくらすうち、妹が身の薄命から、浮世の義理にせばめられ、添ふ事ならぬを覺悟して、心づよくも身を果せしは、みな男の爲を思ひ、操を立ぬくこゝろざし、妹ながらも天晴貞女、只一トすぢの不量見と。おほしめさずに心のうち、推量してやつて下さいまし」トいちぶしじうをつまびらかに、かたれば白翁もかんるゐをながし、

白「さて〳〵姉妹揃ひもそろひし、貞婦といはうか、義婦といはうか。殊に小三は幼い時から、金五郎と一緒に育ち、家出して死んだと聞いた、養娘のお龜であろとは、夢にも知らぬが大きなあやまり。さういふ譯のある事を、養子の身ゆゑ金五郎も、遠慮して人にも明さず、ひとりで苦勞をして居たかと、思へば小三が心の中と、金五郎が胸の中が、不便でどうもなりませぬ」ト思ひやりつくろうちなげくに、紫雲も泪をせきかねて、ともに泣いては物がたり、はなしは泪ではかどらず。うば也次の間に、金之助をねかしながらのもらひなき。しやうじふすまのあけたても、なみだでしめるばかりなり。偖も白翁は、泣く〳〵紫雲に別を告げ、家に歸りて金五郎の、兩親はじめお雪にも、小三が成行紫雲の身の上、金之助が事までも、くはしく語りける程に、皆もろともに泪にくれて、小三を惜まぬ者もなし。この上はすこしも早く、忘れ記念の金之助を、引取つて小三の亡後、ねんごろに弔はんとて、金五郎にもこのよしを相譚ふに、喜ぶこと限りなく、それかり日をえらみ向島より、金之助を乳母もろともに呼むかへ、お雪の子となしていつくしみ、小三は世になき數

には入れども、あらためて先妻と呼稱し、佛事も手厚く行ひければ、金五郎はいへば更なり、紫雲乳母も上なくよろこび、家内の者も朝夕に、金之助を掌中の珠と愛し、只すこやかに成長するを、指をり數へてくらすほどに、はやくも小三が百ケ日に當りければ、金五郎は寺に詣んとて、金之助を乳母に抱かせ、供の男を引連れて、菩提所へとて出行きける。

かたづけなどする時、下女あやまつて煙草盆を打かへしけるはずみに、引出よりさま〳〵のほぐの出しまくに、取入れんとする中に、女のふみがちめきしもの出しかば、下女はこれを手にとりあげ、ちひさなこゑにて、下女「オヤ〳〵、御新造さんえ、一寸御覽あそばせ、女中のお文がございましたよ」お雪「ドレお見せ、ほんにねえ。オヤ、常のお文だと思つたら、書置の事としてあるから、こりやァ小三さんの書置だよ。わるい物があつたヲエ。モウ是を見たら、中を讀まないのに、胸がいつぱいになつたヨ」下女「オヤ、書置でございましたかえ。ほんに思出しても可愛さうでございますヲエ」お雪「さうさ、大かた若旦那の事が、いろ〳〵書いてあるだらうから、見たさも見たいが、泪のたね。それにひよつと知れでもしたら、お腹をお立ちなさると惡いから、マア〳〵、よしにしませう」トしまはんとするところへ

母おやが出來りて、母「お雪ヤ、モウ今に金五郎も歸るだらうヨ。早く其所を片付けておしまひ」お雪「ハイ、モウしまひました。アノおつかさん、一寸是を御覽なさい。まことによい手で御座いますねえ」母「ドレ〳〵、オヽ、書置の事、アヽ、小三どのの書置かエ。又そんなものを見つけ出して」お雪「それでもお杉が見つけましたもの。開いて見ましても宜しうございませうかヲエ」母「不遠慮なれど、あんまり可愛さうだから、ちつとばかり開けて見なナ。アノ杉ヤ、おまへはの、お煎茶の支度をしておくれヨ」下女「ハイ〳〵、かしこまりました」トお雪にことばふみをひちけば、その文にいはく、

逢ふは別れの初めとは、かねてより人の身の、定めなきに引くらべ、覺悟いたしをりけひしに、やうやく只今おもひあたりけまゝ、この世の御名殘に、一筆書殘しり〳〵。まづとや御平らかに御くらし被遊けひ御事、此上もなう御よろこび申上まゐらせけ。さてしもわが身事、いやしき賤のふせ家に生れ、草葉の露のはかなき身を、御父君の御情にて、やう〳〵人となりけひ御恩のほど、海とも山とも詞には盡しがたく、夫のみならず親姉までも命をつなぎ、御惠みの淺からぬ御事、いつの世にか、報いまゐらせんやうもなく、あまつさへ一日の御恩も送らず、かへつて御辛勞のみかけまゐらせけこの身の罪の深き御事、申上ぐべくやうも御座なくけ。えにしは神のむすばせ給ふ御事にや、もとよりいやしきわが身ながらも、君の御情にあづかり〳〵より、ひと方ならぬお氣がねのみ遊ばしさふらふも、みなわが身故と存じけへば、身もよもあられず、たゞ〳〵つたなき身をのみうらみ〳〵。御祖父さま御はじめお雪さまにも、さぞ〳〵わが身を御にくしみ、御うらみ被遊けはゞ、は

て〳〵は君の御ためあしからむと、行するのことぞんじつゞけけへば、ながらへをりけほど、つみをかさぬる思ひにて、後の世さへも空おそろしく、又このうへにかず〳〵の御苦勞かけ參らせんもはかりがたく、せめてはわが身を果しけはど、するゞ〳〵君の御こゝろも安かるべしと、とくより覺悟はきはめまゐらせけへども、女心の淺ましく、御名殘のみ惜まれて、けふまでながらへをりけ御事、まことに〳〵御はづかしく存じう〳〵。たゞ〳〵此うへは、お雪さまと御中よう、御祖父樣御はじめ御兩親さまへも御孝行のほど、願上げまゐらせけ。二ツには姉事は、御存じの通り、まことにたよりなき身のうへ、これまではおよばずながらも、たがひに便りトいたしをりけへども、末々は猶々たよりなき身にさふらへば、何とぞ御見捨なう御めをかけ被下けやうねんじ上まゐらせけ。又金之助事はぐわんぜなきわんぱく者にさふらへば、わが身なきのちは、たづねわび、泣きむづかりけはんかと、今より目に見えけやうにて、みれんながら、ふびんにぞんじう〳〵。姉方へも昨日まゐり、よそながら、いとまごひのついでに、金之助の事も、よく〳〵賴みおきけへば、あの方へ御あづけ下され、西東もわかりけやうに成けはど、母なし子とて、人にわらはれぬやう、手ならひなど、よく〳〵御をしへ下されべく、かへすゞ〳〵も君の御身もち、只今までのやうなる御こゝろにては、御ためあしくけまゝ、是より御心を入れかへ、むりなる御酒を御すごし被成ず、御宿にのみ御出遊ばし、お雪さまにも無理なる御事御申しなされぬやう、ねがひ上まゐらせけ。猶このうへの御ねがひには、後の世の御事に御座け。百とせの御よはひ過させ給ひて、未來はひとつ蓮のうてなこそ、ひとへに願上げう〳〵。まことにをさなき時より御したしみ申しあげ、時の間の御わかれだに、心うくぞんじさふらふに、かくながき御わかれとなり、さかさまなる御ゑかういたどきけは、いかなるむくい因果にやと、繰かへし、まことに〳〵御なごり惜しさいはんかたなく、こゝろも亂れさふらふて、申上度御事は、濱の眞砂の盡きせねど、明がたちかきかねの音に、死出の山路へ心せき、をしき筆とめう〳〵。

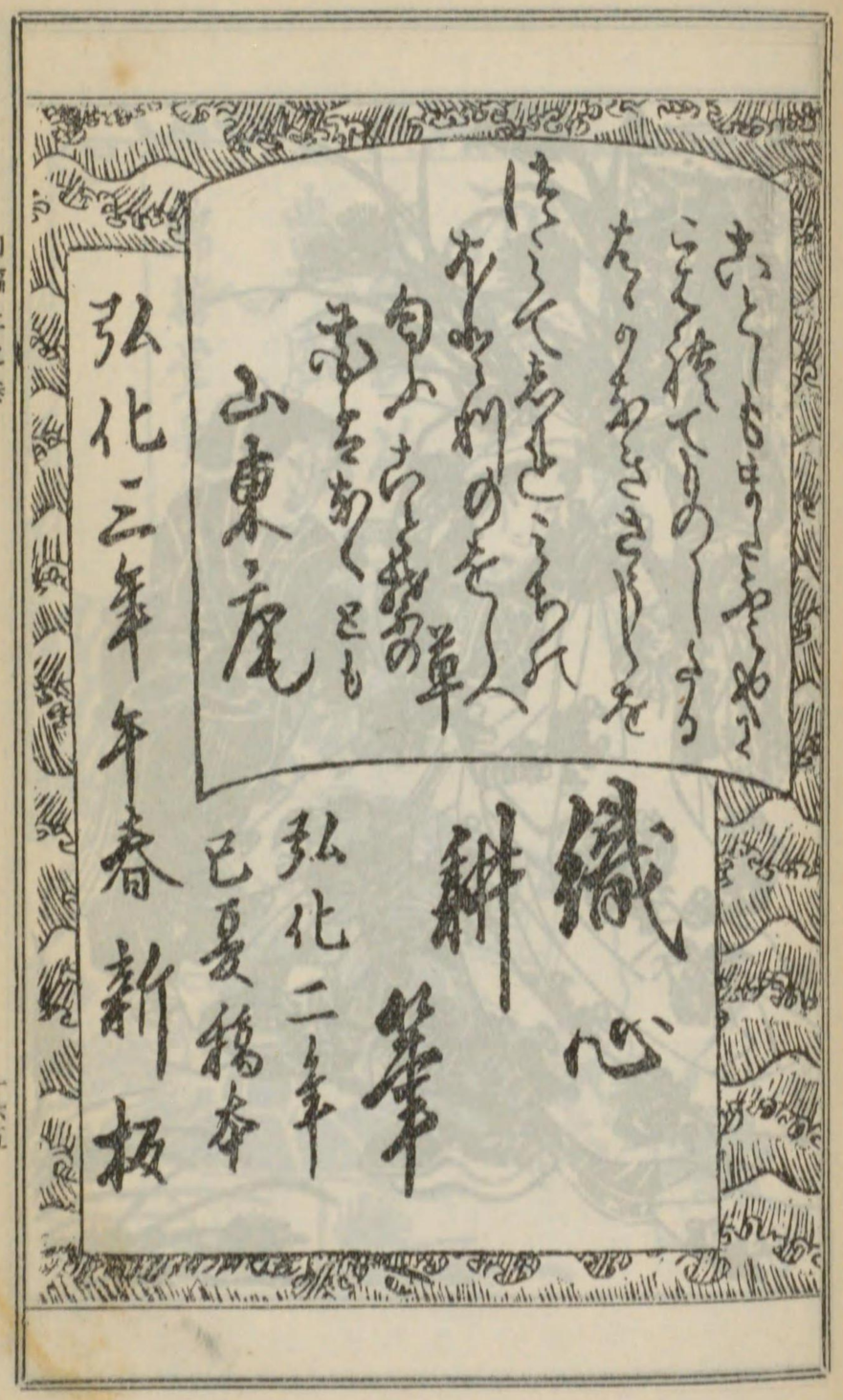
道しらぬくらきよみぢへ初旅の身は御佛を力にぞして

と讀み終り、お雪も母ももろともに、目を泣はらして顔見あはせ、「アヽヤレ〳〵、よしない文を開けて見たゆゑ、かなしさも悲しょ、胸がせまつて、大きに泪をこぼしました。金五郎の迷ひしも尤な筈、美人だとお祖父さんさへ小三が容貌を、おほめなさる程な生れつき、容貌は格別な事だが、心だてといひこの手蹟まで、うつくしいとも見事とも、約束事とは

いふものの、わか死をするゆゑに、人にすぐれて生れて來たのか。金五郎の爲を思ひ、おまへに義理を立通して、名を汚さない貞女の鑑。ほんにお雪ャ、かならず仇に思ひなさんなョ。この書置はおまへの爲には、實によい手本だョ。このやうに金五郎を大事にして、道を立てるが女のたしなみ。金坊も麁略にしてはすまないョ」お雪「ほんにさやうでございます。わたくしが人なみに、よく氣のつくやうな生れなら、このやうな事にはなりますまいに、因果な事でございました」（トおや子二人がくやみなき、なみだに袖をしぼりけり。をりから下女がはせ來り、）下女「若旦那さまのお歸り」（トつぐるに母は奥へゆく。）お雪は手ばやく文をしまひ、泣顔かくして出迎へば、（金五郎はその顔見て、）「お雪、どうぞしたのか。泪ぐんだ顔つきだが、ハ、ァ大きな形をして、又おつかさんに叱られたの」お雪「イ、エ、そんな事ではございませんが」（トあといひかねしが手もちなきゆゑ、）「アノ、金坊はどう致しましたエ」金五郎「ばゝァと先へ、奥へ行つた」（トきをきかへおびを しめながら、）「ア、ヤレ〳〵草臥れたぞ。ほんにお雪、けふはの、寺參をして、直に向島へ行つたら、紫雲さんのお傳言があつたぜ。おめへに金ばうを連れて、ちつと泊りがけに來いとョ」（トいへども、雪はうつむいて、ハイといつたばかりゆゑ、金五郎はふしんにおもひ、）金「ハテ、どうもおれは、おめへの樣子がわからねェが、何をそんなに鬱塞ぐのだらう。ハ、ァきこえた。こりやァ何だの、おれが小三の寺參に行つたから、それで癪にさはつたのだの」お雪「どう致してマァそんな事が」金「心になけりやァどういふ譯だか、心をおかずと言つてきかせな。一生添はうと思ふには、隔てぬでこそ夫婦といふもの」お雪「そのへだてるといふ事は、誰がわたくしに教へましたか」金「なんの事たな。こつちはそんな覺はねへもの」お雪「外の事はともかくも、小三さんの事ばつかりを」金「へだてたといふ事か」お雪「ハイ。それ故にこそこの悲しみ、先から私に、斯う〳〵だと、譯をお聞かせなすつたら、あなたにも御苦勞をかけますまいのに」金「なんだナ、又おもひ出したやうに。モツいくら言つてもはじまらねへ。未練も大概にやめてくんな」お雪「しつこい樣でございますが、何につけ彼につけて、つね〳〵忘るゝ事もなく、みんな私がおろかゆゑだと、この身を恨んで居りますが、けふは取わけいつもより」金「百ケ日だけ氣になるか」お雪「又そんな事ばつかり。お疑が晴れませぬから、申しますからお腹をお立ちあそばしますなョ。アノ、あなたの御留守のうち、お烟草盆の引出から、小三さんの遺書が出ましたゆゑ、ツイちよつと」金「見たので氣色にさはつたらう」お雪「なんぼおろかなわたくしでも、先から深い譯ある事を、知つて居つたら、どうでもいたして、あなたのお側へ小三さんを、呼びます事も出來ましたらうに、なぜ隱しては下さいました」金「モウどのやうに言つたとて、とてもかへらぬ繰言だ。小三の事をかくして居たは、おれが一生の誤だから、堪忍してくんな。年もいかねへおめへにまで、いろ〳〵苦勞

させたのも、みんな因縁約束事。この上は言ふまでもねへが、金ばうを可愛がつてやつてくんな。ァ、何だかひどく鬱いで來た。お雪、おめへいゝ子だから、茶碗に一盃酒を持つて來てくんな。その中ちよつくり奥へ行つて、皆の機嫌を取つて來やう」（ト羽織をひつかけ奥へゆく。お雪は酒をもち來れば、金五郎も部屋へかへりて、）「お雪、金ばうはの、祖父さんの側に媚付いて居て、好なねだり事をして居るぜ」お雪「左樣でございますかエ。お祖父さんにはよいお相手でございます。ハイあなた、御酒を」（ト茶わんをぼんにのせさしいだせば、）金「オット有がたし、御苦勞だつた」（ト手にとりあげていきをもつかず、ぐつとのむゆゑ、お雪はびつくり、）「オヤあなた、召上るのなら、煖めて參ればよう御座いました子エ」金「なァに、冷でもいゝ。是で氣色が直つた樣だ」お雪「ほんにその事もあの書置に、いつそ案じて書いて有りましたヨ」金「さうだつけのう。いつでもこのぐい呑では、小三にひどく氣をもませたが、ァ、今思へば是も後悔、モウ〳〵ふつつり止にする。思へば小三はおれが爲の、善智識でもあるだらう」（ト何かにつけて身のあこなひを、あらためるのも小三の貞心、天に通ぜしゆゑにこそ。あつぱれ賢女といひつべし。）是よりして金五郎は、主君へ忠勤怠る事なく、白翁初め兩親に、孝を盡す事日にまし厚く、お雪とも中睦ましくして、金之助を愛育し、紫雲の庵も四季折々に、訪ひ音信れて疎遠せず。忠孝信義全きゆゑに、家内に和順の基をひき、お雪の腹にも子を儲けて、幾千萬代賑しく、益〻家富み榮えける。かゝる目出たき因によりて、金五郎が實の親、文之丞も年來の、勘氣をこの

時免されしかば、京師の家には養子をなし、その身は直に東へ下り、親族眷屬に對面して、喜ぶ中に小三の身の果、聞いて悲歎の泪にくれ、頻に無常を觀ずるものから、終に髪を剃り佛門に入りて、身を雲水にまかせつゝ、諸國行脚に出でしとなん



小さん
金五郎假名文章娘節用 終

教草女房形氣
初編上下
京山作
豐國画
錦樓堂壽梓

○攝津國有馬郡山口の庄に溫泉在り、これを有馬の湯とて、その名諸國にきこえたる名湯なり。そも〳〵此湯は、今を去る事千二百五十餘年のむかし、欽明天皇五年此湯始て湧出で、行幸あり。その後孝德天皇も行幸ありし事など、日本紀に見えたり。又千載集にも、こゝにみゆきの歌あり。さて此湯、堀川院承德元年、洪水山を崩して、溫泉潰れしより、後九十五年の間絶えたるを、後鳥羽院の御時、建久二年大和國吉野の僧仁西法師、熊野に參詣なし、權現の靈夢によりて、有馬にいたり、溫泉を浚ひて、再興したるより、後天正十七年、殿下もこゝに入湯ありて、灰形山阿彌陀堂などいふ利久の古跡も殘り、本朝に冠たる名湯として、繁昌する事、あまねく世の知る所なり。この繪ざうしに、この湯の事あれば、溫泉の起原をこゝにしるす。

山東庵京山作

深き學問はなけれども、少しばかり物を知りたる翁ありけり。若き男此翁に問ひけるやう、「もし隱居さん、手紙に書く其節又は時節柄などは知れてあれど、禮節、忠節、貞節などの節とは何の事で御座ります」おきな「いかさま分るまい。節といふ文字をふしと讀む、節とは卽ち竹の節に擬へたる文字、それゆゑ竹冠に從ふなり。竹にも節がなければ力がない。されば禮儀にも、忠義にも、貞義にも、節がありて强きを、禮節、忠節、貞節といふなり。昔平治の亂に、義朝、淸盛と戰ひしに、軍破れて尾張國野間內海にて、家臣長田が爲に弑されしに、義朝の妾常盤も擒となり、淸盛常盤に戀慕しけるに、常盤三人の子を助け置かば、親の敵の淸盛を、討つ事もあるべしとて、操を破りて淸盛に從ひたる故、三人の子の命助かり、果して其子賴朝、義經、範賴、力を合せて平家を亡滅し、親義朝を殺したる長田父子をも生擒りて、怨を報いたるも、母の常盤が操を棄てて、操をたてし故なり。これを貞節といふ。又むかし建武の戰に、楠三代、南朝の天子に忠を盡しょに、正成の孫正儀の時、尊氏、正儀と戰ひしに、正儀が軍强

きゆゑ、味方に附けんとて、天龍寺の僧を使とし、味方に附かば、國六ッを與へんと、證文を書きて遣りしに、正儀申しけるは、我等三代慾の爲に戰を爲さば、天下をも取るべしとて、使の僧を縛り、南朝の帝の在ます吉野へ連行き、此事を奏聞して、僧を追放ちける。これ忠の節なるなり。さて又禮節といふは、むかし」「もし御隱居さん、お話の腰を折るやうで御座りますが、昔話はさておき、今の事で」「あゝ成程尤ぢや。昔の故事はくだ〳〵しい。常盤や楠が事珍しからず。扨今の事でいへば、何ぞ序もあらんに、今日態々貴樣が土産まで持つて來て、禮節の事を聞かるゝは、これ卽ち禮節なり。今もいふ如く、節とはふしといふ事、物にはふしといふが無けりやならぬ。人の體にも節々ありて、働をなす。其節を惡くすれば、腰が拔けたり、手が利かぬやうになる。草木にも節がありて、節より枝を持ち、花も咲くなり。禮節は、禮儀の節と思はしやれ。されば親子、兄弟、夫婦の中にも、禮節がなければならぬ。禮節は禮儀の節々なり。例へば、子息花見に行かんと思ひても、我儘に行かず、親の許諾を受けて行くは禮儀なり。さて行く時、親が早く歸れといひしを忘れず、道連の惡玉、色里の花をも見んといふを、親の早く歸れを忘れず、惡玉をはぐらしてすた〳〵歸る、是子の親にする禮節なり。夫婦、兄弟の中の禮節も、皆此心持なり。況してや他人の中には、別して禮節を缺くべからず。約束を違へざるも禮節なり。如何程心安き友達なりとも、亭主の留守に其女房と、浮々〳〵長話せざるも禮節なり。況してや酒など飲みあふは甚敷無禮なり。されば世の教にも、親しき中にも禮儀ありといへり。分りましたか」といひければ、子息感心して歸りけり。その親しき中にて禮節を缺き、大いなる騷を仕出したる物語、次にしるす。

當世男女之鏡

教草女房形氣

初編上之卷

山東庵京山作

發端

今は昔、足利室町殿の頃とかや、都あたり近きに住み給ふ、志賀山左衛門太夫治信といふ人ありけり。母君を梅月院とて、年も六十路、尼君にて、世の塵を厭ひ給ひて、加茂川の邊の下屋敷に在しけり。附人の重役を、棚橋渡とて心直なる老人、その下に立つ柵浪右衛門とて、年は五十に近けれど、妻はおりつとて二十三四、つりあはぬ夫婦なりけり。是は如何となれば、今の妻は先妻の妹にて、彼の梅月院殿に事へけるに、姉がいまはの時、浪右衛門に遺言せしによりて、後添ひしたるなり。此おりつは、若木の花の美しく、心操も優しき故、浪右衛門よりは年も若く、祿も男振も優りたる同じ家中にて望むもありしかど、姉がいまはの遺言を守り、

心には合はざれど、浪右衛門が妻となりけり。さて連添ひ見れば、顔貌には似ず心優しく、能く勞るゆゑ、いかさま姉が遺言したるは、宜なりとぞ思ひける。されば夫婦の中も睦じく、浪右衛門に浪風はなかりけり。こゝに又、同じく梅月院殿に仕へる料理人に、蜂松琴次郎とて、二十五六の若者、男振も心につれて素直なるものなりければ、浪右衛門身内の如く思ひ、目をかけて睦じく、琴次郎も浪右衛門を、兄の如く思ひけり。

第二回

恁て琴次郎は、今日も浪右衛門方へ來りければ、女房おりつ繼物をしながら、「降りはせまいかね」「何うであらうか。旦那はえ」「町に用があつて行きました。傘を持たいで行かしやんしたゆゑ、降らねばよいがと思ひます」「お案じなさるな。買物なさるお勤ゆゑ、傘ぐらゐは何方でも貸します」といひつゝ、おりつが側にありし本を取上げ、栞の入りたる所を開き見れば、頓阿が草庵集類題の戀の部なり。琴次郎少しは風雅にも心やありけん、おりつが珍らしく此本を讀むを訝りて尋ねければ、おりつ針をやめ、「さればでござんす。奥に勤めた時、御隱居樣から月並の御題が出て、皆さんと一所に、腰折を詠みましたが、此所へ來てから、下女さへ使はぬ水仕業、歌どころぢやないゆゑ、捨てて置きましたが、御隱居樣の御意ぢやとて、お局の御

文に、昔は賤しき檜垣の嫗さへ、歌の集は今に遺る、捨てずに詠めと丁お題を下された中に、忍んで契る戀といふお題があるゆゑ、何うした心であらうかと、夫で其所の戀の部を讀んで見ました。いかさま戀する心は、種々なもので御座んす」と話の折から、おりつが夫浪右衛門歸り來り、戀する心と女房が聲に心とまり、立聞くとは夢にも知らず、おりつ「琴次さん聞かんせ」と本を開き、忍んで契る戀に

我にさへいつとはいはぬ夕かなかねて人目のひまを知らねば

此歌はよく詠んだぢやござんせぬか」「いかさま、歌の道は知らねども、忍んで逢ふといふ心は其樣なものでがなあらん」と二人が話に、浪右衛門いよ〳〵耳を傾けて、立聞しけるに、おりつが聲に、「浪右衛門殿といふ夫のあるわたしが、忍んで逢ふ戀といふ歌を詠みましては、異なものでござんすが　見もせぬ名所、身にも知らぬ物を、言の葉にならぶるが、歌の道とは知りながら、夫のある身では、忍んで逢ふ戀といふ歌をよむは、此方の人へ氣の毒なれど、旦那樣より下された題ぢやゆゑ、迷惑します」と妻の詞に浪右衛門、疑も唐紙もさらりと開き、「今歸つたぞよ。」

第三回

爰にまた同じ家中に、横島眞鴈とて、年は三十五六、碌な人でないと嫌がらるれど、人の上に立つ男なれば、避けて通すをよき事と思ひ、肩で風切る、風邪の御見舞とて、主人の母君梅月院殿の方へ來りけるに、逢ひ給ふべき人なれば、逢はせ給ひ、風の病氣も昨日より忘れて、湯にも入りしなど、語り給ふ中、盞も賜りけるに、眞鴈は飲む口なれば、女中相手に微醉ひ、猶打解けて飲みたけれど、物堅き尼君の前なれば、盞をお局に納めさせて、此所を下り、上館へ歸る折しも、浪右衞門が妻のおりつ、夕方なれば門口に、かけたる簾を取入るゝとて、通りかかりたる眞鴈が肩衣に、少し障りたれば、眞鴈これを咎めんとて、目を瞋して振返る。おりつは其人と知れば、打驚きつゝ、「御免遊ばせ」と柳の腰を屈め、花の顏赤めたる風情、こゝにも春のありけるよと、打笑みて立去りけり。これかの水滸傳の西門慶が事に好く似たり。扨此時横島眞鴈が供に伴れたる若黨は、石崖蟹藏とて、邪曲者の眞鴈が心に適ふ程の奴なれば、惡がしこく、眞鴈が今の面つきを悟りければ、「もし旦那、今の女、貴方は御存じでござりますか」「をゝさ。門に打ちたる屋札を見れば、柵浪右衞門が宿。しからばありや浪右衞門が後の妻と見ゆるが、齡も若し、浪右衞門には過ぎものぢや」「彼の女、貴方は御存じな筈ぢやが」「否、知らぬ」「ありや梅月院樣のお次を勤めました、松尾と申した女中。姉の死後へ參り、今の名はおりつと申します」「お主よく知つて居るな。何者の娘ぢや」「彼は星井樣の家中の醫者の娘、親逢は國勝手になりまして、彼の娘一人御當地に殘りました。私は星井樣の家中にも奉公いたし、彼のおりつどのの十三四の頃は、羽子板こしらへてやつた事も御座りましたが、もう見忘れましたらう」「すりや以前は心安くしたか」「左樣で御座ります」「はてな。南無三泥濘へ踏込んだ、可介、何故敎へぬぞ」

第四回

人のよく知りたる淸少納言は、今より八百五十年ばかりの昔、一條院と申し奉りし帝に仕へたる女房なり。大內の女中を、女房といふからに、夫がうつりて人の妻をも、今は女房といふなり。さて此淸少納言は、彼の源氏物語を書きたる紫式部と傍輩なり。淸少納言も枕草紙とて、大方は自分の身の上の事を記したる中に、行成卿と心を通はせし時、世にあふ坂の關はゆるさじと詠みし歌は、實方中將にも心を通はせたる言譯に、行成卿へ詠みて送りたる歌なり。恁る好色の女なれば、それが作りたる枕草紙に、遠くて近きものは男女の中と書きたり。その心は、人目あればこそ遠けれ、人目を厭はずば、直に近くなるは、男女のなかぞといふ心なり。八百餘年のむかしは、大方は斯樣なる風俗なりしゆゑ、源氏はさらなり、古き物語ども、